

川柳端

創刊大正十三年 通卷八五三号



白川協加盟

No. 853

六月号

第四回 川柳塔まつり

とき 10月7日(水)

ところ アウィーナ大阪(なにわ会館)

◎詳細は後日お知らせいたしますが、恒例によって同人総会・各賞発表・記念句会・懇親会を開催します。

開催日が休日になるよう鋭意努力しましたが、会場の都合で平日になりました。ふるって御参加くださいますようお願い申し上げます。

残暑見舞広告

本誌八月号に掲載する残暑見舞広告を募集いたします。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、よろしくお願ひ申し上げます。

★個人 一口二、〇〇〇円

(氏名・住所・電話番号など掲載)

★団体 次の四種といたします。

① ¼頁六、〇〇〇円 ③ ¾頁二二、〇〇〇円

② 半頁九、〇〇〇円 ④ 一頁一八、〇〇〇円

▼原稿締切 6月25日

〒545-0005 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

川柳塔社

第22回 全日本川柳山口大会

とき 6月14日(日) 午前10時開場
ところ 萩市民館・大ホール
(萩市江向495-4)

宿題 第1部(事前投句締切終了)

「豊か」 小林 由多香選

「輝く」 小島 蘭 幸選

「ほのぼの」 永石 珠 子選

◎3.5×18cmの句箋1枚に1句宛記入、各題2句、無記名、封筒に住所・氏名を明記、投句料1000円(定額小為替現金書留)を同封して左記へ郵送。

投句先 〒530-0041 大阪市北区天神橋2丁目北1-11
ステッピン南森町702号

全日本川柳協会大会係

宿題 第2部(当日出句・午前11時半締切)

「仲間」 月原 宵 明選

「揃う」 黒川 笠 子選

「現役」 猿田 寒 坊選

「大物」 太田 紀伊子選

会費 3000円(昼食・記念品代共)

観光 6月13日(土)・3000円

前夜祭 同日午後6時半・8000円

◎宿泊・観光・前夜祭の申込は5月10日まで
に左記へ

申込先 〒758-0057 萩市堀内1701-5 進藤竹生方

全日本川柳山口大会事務局

藻介さんと

智子さん

橘高 薫風

川上富湖さんがオール川柳賞大賞を受けた大会で私は雑詠の選を担当した。本社句会に於ても雑詠の選を試みたいと思っている私なので、大いに感激して選に当った。

特選の句は「神はもう地に満てよとは仰有らぬ 杉野睦朗」、第一席に「見晴らしのいい場所に来て死を思う 海地大破」を頂戴した。それぞれすばらしい句である。殊に第一席の句にはある感慨を持った。それは今年になって相次いで、中尾藻介、田中好啓という親しい先輩を見送ったことである。高みの見晴らしの利く所から空を眺めて死者と心を繋ぐ、作者の気持ちもそのようではなかったか。

中尾藻介さんからは教えられることが多かった。岩井三窓さんと三人で阪急沿線岡町駅前の丹波屋という飲み屋で何か

につけて飲んだ。大正生まれの十一人で「たいしょうの会」をつくり、大阪北の割烹入船の二階で毎月例会を開いた。すべてがなつかしい。

藻介さんの性は、表面淡白で飄然と屈託ないが、内面は深奥にして複雑剛腸であった。後進には常に「句は軽うに軽うに」と教えておられたが、ご自身の句の内容には深みがあり「言わずして言う」広がりを感じさせるものが多かった。

ご先祖には池大雅ら文人仲間と交流のあった俳諧連衆の方もおられたようで、おのずから環境にも恵まれていた。

浴衣着ていると浴衣が通るなり
どっちが先に死んでも葬儀委員長
妻に字を聞いて知ってたことがなし
外套をひっかけるとき父の職
絵馬をあげだして渚を走る馬
人間の夢を見ている犬の耳
惜命や口のはたなる飯の粒
萬華鏡この世は夢を見るところ

昭和五十五年、朝日なわ柳壇が創設され、私が選者を担当したとき、藻介さ

んはすばらしい句を投句してご支援下さった。十数回も続けて入選という、それは見事な援護ぶりであった。

藻介さんの句に惚れ込んで範となし、精進を続けたのが小出智子さんであった。麻生路郎先生の句集「旅人」に出会いこのような川柳を目指して挑戦したいと思った私の衝動と同じものを持たれたのであろう。結果は藻介さんにも遜色のないと思える多くの佳句を残された。

草を踏む緋の絨毯にまさりけり
お年玉無駄な言葉は添えぬもの
友達と一緒に齡をとってゆく
いつまでの女と思ふ春の傘
合格をしたのか会釈してくれる
あじさい寺の冬を想像せぬことだ
夫より包容力のあるポスト
心配は海苔が湿ったほどのこと
うちの酒が美味しいなどと言いはじめ
展示会娘が一人欲しくなる

智子さんの命日は六月二十二日、七日の本社句会にはひそやかに紫陽花が飾られることであらう。



座右の句

息子には話しておこう川の幅

私の句

金木犀にあすを重ねているいのち

(智子)

池田 寿美子

川柳塔 六月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 藻介さんと智子さん	橋高 薫風	(1)
李香蘭の同志	東野 大八	(2)
川柳塔 (同人吟)	橋高 薫風 選	(4)
自選集	東野 大八	(54)
川柳の群像 今野空白	清 博美	(56)
古川柳歳時記 『山王祭』	西田柳宏子 選	(60)
水煙抄	橋高 薫風	(83)
大空のこころ (89)	遠山 可住	(58)
秀句鑑賞 同人吟	門谷たず子	(93)
水煙抄			

李香蘭の同志

東野 大八



去る3月17日付の朝日の朝刊第一面に眼にするなり、私はウムとうなっていました。橋本首相は十六日、幹部が接待汚職事件で逮捕された責任をとって辞意を表明していた松下康雄・日本銀行総裁の後任に、日銀OBで前経済同友会代表幹事で日商岩井相談役の速水優氏(むす)を就任させることを内定するとともに、生え抜きの福井俊彦副総裁(ふくい)も辞任させ、その後任に藤原作弥・時事通信社解説委員会顧問(ふじ)を充てる方針を固めた。(以下略)

このあと同紙21日付の「ひと」欄に、記者から日銀副総裁についての藤原作弥さんの写真入りの大きな紹介記事がありいわく。
「時事通信の解説委員会顧問として就任直前まで日銀記者クラブに籍を置いた。ワシントン特派員、日銀や大蔵省詰めの記者として、金融・財政・政策を担当してきた。日銀では「マスコミで最大の理解者」との定評がある。通信記者として速報競争の日々を送る一方、戦前に李香蘭として活躍した山口淑子さんの

渺湖抄	八木千代選	(80)
茴香の花	宮西弥生選	(84)
「振る」	岩津ようじ選	(86)
一路集「素朴」	田村きみ子選	(86)
「再び」	中島正博選	(86)
初歩教室「口」	吐田公一	(88)
路郎賞・川柳塔賞中間発表		(90)
福浦勝晴さんを悼む	芳地狸村	(92)
五月本社句会		(94)
各地柳壇(佳句地十選/大内朝子)		(98)
図書紹介 道頓堀の雨に別れて以来なり	田中正坊	(113)
柳界展望		(114)
六月各地句会案内		(115)
■編集後記		(116)

座右の句

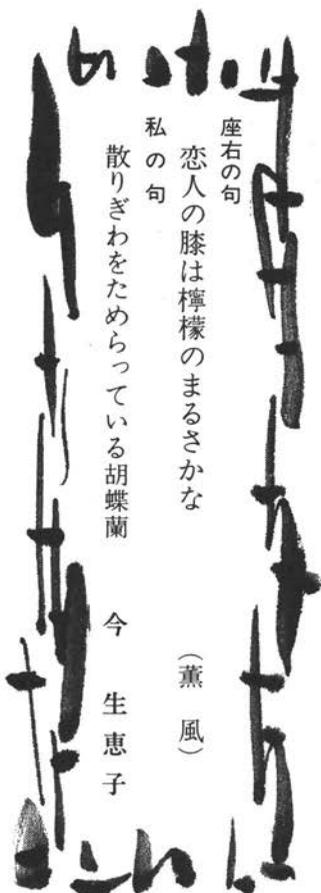
恋人の膝は檸檬のまるさかな

私の句

散りぎわをためらっている胡蝶蘭

(薰風)

今生恵子



自伝『李香蘭、私の半生』を共同執筆、肝炎の療養問題で知った人間模様をつつた『聖母病院の友人たち』で日本エッセイストクラブ賞も受けた。(以下略)

私にとつての関心は、その李香蘭伝執筆の折の文通の一件である。

それは私がさる柳誌に執筆した『李香蘭伝説』を、この藤原氏が『新潮45』(昭61・8)に「伝説のペールを脱いだ李香蘭」と題して、私の柳号入りでそっくり転載してくれた数十行があった。

李香蘭こと山口文雄一家とじつ懇だった北京の頃の私の思い出で、月刊満州(昭18刊)に「李香蘭半生記」八頁を写真入りで載せた折の、彼女との若い頃の交遊記の一コマの稿をコピーし藤原氏宛に謝礼文を書いている。折り返し、彼からの感想文を受けとつたが、今搜してもみつからぬのだが、とにかく数度の文通を重ねた。

彼の著書後記によるとこの人は、一九三七年仙台生れて、朝鮮清新から官吏の父君に伴われて引揚帰国とあるから、北京引揚者の私とは、同じ海外引揚者の間柄で同じマスコミ出身、そのことが、この人にとってはひとしおの親近感を覚えられたものらしい。

とにかくこの人が、今をときめく日銀副総裁就任とは愕くやら嬉しいやらだが、今だにまだこの人へ祝電を打っていない。

川柳塔

橘 高 薫 風 選

堺 市 桑 原 道 夫

ひかりなき身を沖繩にさらしけり
やるせなく磯巾着を突いている
海中の我はもつとも胴欲なり
切り岸に精神という花が舞う
柱などないがもたれて待っている
一切を肯定すれば雪が降る

鳥 取 県 原 み さ を

九合目あたりでもらう肩すかし
少年法いじる白髪を知恵集め
日だまりの舌がころころよく遊ぶ
おままごとみたいに亡母の骨拾う
エルニーニョ砂丘の春が落着かぬ
よく動くラクダの耳に春の風

米 子 市 中 井 ゆ き

ひたすらに生き一ぱいの花さかす

花電車花に負けない顔で乗る
身の内の私ときどき他人めく
自尊心ピエロもあるさ鼻を塗る
日が暮れて狐の尻尾太くなる
友四人花をながめて皆無口

生 駒 市 麻 生 ア ー ト

エコロジー枕ことばとなりけり
老いてなおここに夢あり花言葉
オムライス裏は見ないで食うものよ
花水木ホームシックの雨にぬれ
エルニーニョ諸悪の罪を着せられて
心はれやかイワンの馬鹿を決めてから
（トルストイから）
書いてます自分の為の弔辞です
よく肥えた人が食べるとうまそうだ
肖像画後でアカンベしてるだら

大 阪 市 榎 本 落 児

風景画中に居るのは私です

静物画りんご転んだままである

最高の盛装女裸です

吹田市 山本 希久子

背かれて背いて母と娘の絆

人形のただ老いぬるもいさぎよし

恋衣一枚脱いだ肌寒さ

さくらさくら恋は幻愛は夢

淀川の流れに逆らいながら生き

ゴキブリの強さ弱さよ死んだふり

西宮市 井上 松煙

老いるほど遅れなくなる老いの会

一日が終り自分を褒めてやる

ホテルの名聞けば昔に灯がともる

旅慣れたサインを真似てチェックイン

クラス会今の悩みは黙ってる

くぎ煮炊く匂のさきは孫の顔

広島県 藤 解 静 風

書きすぎぬよう人妻に書く手紙

古希すぎてまだ捨て石になりきれず

情熱もやがて放物線となり

川柳と討死せんと覚悟する

毎日を匂にしたくて髭を剃る

ファックスが深夜に動く計報かな

運慶の腕脈々と仁王さま

仏壇の中でも会議開かれる

クライマックス女御輿もくりだした

声あわせドレミファソからやりましょう

愛のお返し期待をはいませんか

気ままな椅子で盥まわしを待つている

松原市 玉置 重人

長生きをしすぎたらしい介護法

けつたいな男にティッシュ渡される

ウエストに笑われズボンばかり買う

戦友会大団円がもう近い

春ですよ鏡に羽化をせかされる

カミソリの音が男を主張する

黒石市 相馬 一花

調査書に無職と書いたことがない

嬉しくてつい気管にも祝い酒

恥ずかしい名前の菓子を買ひそびれ

じよんからがじよんがらになる大都会

軟膏を塗ることのない薬指

胴長で短足だから長生きす

箕面市 岩津 ようじ

痩せ蛙老いて腹のみ太りけり

子を抱けば美女も才女も母の顔

米子市 野坂 なみ

屋台客二列になつて飲んでい
るよう効いたクスリ三日目副作
用おかしいね惚れると惚けるおんなじ字
淋しくもわが煩惱のかくも減り

富山市 酒井 輝

年寄りを置き去りにする電波網
胎内に恩を忘れて子が生まれ
序列給廃めると座る椅子が無い
悪知恵にさえ偏差値のある賄賂
定年に値を付けて見る朝の顔
飽食の果てはムザンに花も食べ

豊中市 江口 明光

酸欠になる頃出たくなる旅路
回転寿し柿の葉すしは回らない
カギっ子のつぶやき小犬の眼に溜まる
開拓の祖父が棲んでる桜道
シーズンも終り蟹の身やせて来る
車座に酒を回して花見かな

藤井寺市 吉岡 美房

病んで見て今更亡母の掌が恋し
満開の桜が僕を覚えてた
爛漫の桜に深い飢えがある
はらはらと花散る音を聞く慕情
うれしくて牡丹は赤を身にまとう
遮断機の向こうへ消えた敵討ち

米子市 鷺見 正子

婿殿が来るぞ来るぞと障子張る
東京はまだまだ遠い寝台車

球根の娘が出番待っている
父ちゃんが好きで時どき喧嘩売る

癌よりも呆けちゃうことが恐ろしい
レンゲ咲く野原で風の子になろう

伊丹市 山崎 君子

ゆきやなぎ小雪降るよう庭石に
庭の灯のとどく高さにハクモクレン

花散らす風に向かって稚児の列
逝くひとの想い出ひと花の冷え

のろろと花びらのせて練習車
病みあがり靴音きいて紅をひく

鳥取県 塔 寛子

屋台骨支えた頃に戻りたし
春うらら孫は福耳ほんエエ子

耳うちの効かぬお人と無駄話
価値観の違いか炎消されそう

枕木はレールの錆に気づいてる
花吹雪遺言状は筆にする

寝屋川市 堀 江 光子

一斉に頭右して敗戦史
観光誌ふだんの暮し写されず

空仰ぐ姿のままに落ち椿

鯛の目の何と大きな子の写生
別れゆく酒へ別れは口にせず
好きな絵を春夏秋冬掛けとおし

米子市 澤田千春

さわやかに方程式のとけた朝
素足から土のぬくみを吸いあげる
手相見のことは胸に突きささる
冥最中 人形たちも踊りだす
心の窓に染井吉野が咲いている
あかるくてにぎやかだろう終の駅

出雲市 竹治ちかし

寝る樂が解って亡父の齡となり
子と語る父は父なり母は母
例えばの話時々妻とする
少し樂覚えてからの怠け癖
人間の尺度で測りきれぬ海
井の中で井の中なりの暮らしする

堺市 柿花紀美女

一つ一つ子供等の船遠ざかる
出番もうなくした老いの裾模様
卒業のどの子も風へ放たれる
蛇口全開ゴクンと二月の水を飲む
昨日今日リズム崩さず余命表
弁のたつ人に早々身を躲す

竹原市 岩本笑子

菜の花 菜の花 二人で歩く道なれど
未来キラキラ長女のナースキャップかな
目無しグルマにいつも叱られています
いい人いい町タクシーが二台
背景のトマトがいつか熟れている
ツーアウト妻の勇気が試される

弘前市 斉藤 劔

句碑めぐり石撫でながら撫でながら
竹山師逝って津軽の灯が消える
こんないい土に減反迫られる
サラブレッドの産声春が透き通り
千羽目の鶴と指切りしておこう
裏庭に真実の木を植えておく

弘前市 富士慕情

氷柱からポトリと落ちる春の脚
目を閉じて桜の私語を聞いてやる
門づけの三味が吹雪を弾き語る
三味線のひとときわ桜舞い上がる
屋根雪の重さに耐える老家かな
キュッキュッと靴を泣かせるしはれ雪

大阪市 西出楓 楽

子供の頃見た空もつと広がった
聞き上手話し上手にさせている

自由とは淋しきものよ眼鏡ふく
ほめられもけなされもせぬ存在感
反省が過ぎててにをは狂い出す
金で済む話いちばん難しい

富田林市 片岡 智恵子

期待して子の生きざまを見ていよう
あやとりの指ふる里は様変り
ジェラシーの沈む鏡がよく曇る
ポケモンのことなら家の豆博士
疑ったときからグイヤ光らない
今日も雨明日へ生きる傘を干す

寝屋川市 平松 かすみ

ながいながいキッスをみたり蝶と花
他の事を忘れ大根みじん切り
四十年着けたまんまの妻の面
野暮なこと言わぬお財布ならほしい
他人様の尻尾掴んで炎えてはる
向こう三軒研究してるビッグバン

出雲市 園山 多賀子

さくらさくら夫唱婦隨の定位置に
温暖化母の歳事記狂い出す
悩みごとないなど銜う嘘もある
風上におくには煙たい人という
踏まれない影二つ三つ身の回り
ふさふさとした髪皺の消えた夢

砂川市 大橋 政良
くり返し聞かされ当り前になる
たかが猫されど心を読まれてる
空一ぱい五月の鯉の放し飼ひ
デモクラシー家風の温暖化がすすむ
散り急ぐ桜と話長くなる

弘前市 佐治 千加子

西の窓逝きにしものただよえり
許しあい祈りあい五百羅漢の前
おでん鍋内緒話を聞きながら
沈黙の言葉ごっくりのどぼとけ
わが猫は美形なりけり春の窓

弘前市 岡本 花匠

道頓堀川 舟で顔見世 仁左衛門
大阪の出会い触れ合い橋慕情
花曇り自虐のうつを持って余す
縄文の想いを奏で宗次郎
有為無為の風の愚痴聞く野の仏

弘前市 小寺 花峯

古文書の解釈染みから離れない
孫が来るから楽しいと限らない
熱燗の酔い本当の事を言う
悲しくもピエロの笛が鳴り止まぬ
盃を挙げれば同士縄のれん

弘前市 櫻庭順風

フライトは喫む間なく着く大阪へ

熱烈歓迎雪の感動溶かされる

直撃だ昂りに昂る呼名

お名残り惜しい出るフライトに涙ぐむ

フライトに立山富士はちっちゃいね

弘前市 高瀬霜石

向こう岸一色多い虹がでる

手相見の手相はどんな手相だろう

にんげんの真ん中に吹く砂嵐

ほどほどがずいぶん違う君と僕

定年近し父は寝巻に凝っている

弘前市 高橋岳水

花咲けば濠も発光する津軽

津軽富士借景に花競い合う

満開へ游魚の如く浮かれ出る

花冷えの四肢こわばってゆく老化

散り初める花の鼓動はわが鼓動

弘前市 一戸ツネ

おみくじに照顧脚下とゴシックで

豆の蔓夫唱婦随の女です

雪解けの音が集まるレクイエム

女ひとり生命線のひとりごと

所詮は喜劇で生きる足の裏

弘前市 今 生恵子

ついにきた 鼻にピアスの女の子

禁煙鈍行 下車して吸うは女の子

大げさな音で羽化した揚羽蝶

世の移り地球のうらからのど自慢

三世にも懂れている祖国あり

弘前市 小枝 ふさゑ

さくらさく春の声聞く電話口

遅咲きの花が立派な実をつける

輪の中に明るい人と暗い人

波の音風の音にもある悩み

遊び方知らない子等の心病む

十和田市 小笠原 敏 人

途中下車叶わぬままに終着駅(定年退職)

終着駅降りたらそこに妻が居り

五年忌の法要ないが花がある

花曇り亡母にもさくらの便りする

雑草も花を咲かせて山野草

八戸市 島田 昭 治

未だ早いが亡妻への土産考えよう

あの世では妻とハナからやり直し

寺参り石の小僧さんの頭撫で

地獄で鬼を鬼にしてかくれんぼ

入院で人間模様しかと視る

青森県 諏訪 柳々

初対面 懐かしさから先に立つ (本間満津子さんにお会いする
三句)

手も足も嫁にあずけて信じきる

生きていれば亡母もおんなじ年頃で

蓮如記にたたかう男の聖と俗

蓮如さん闘うことは悪ですか

青森県 西谷 大吾

人間を脱いで人間らしくなり

中流に肩肘張ってしがみ付き

リストラの影に怯える蟻の群れ

止まり木に座ればしゃんとする背骨

ウエディングドレスの下の六か月

仙台市 川村 映輝

ゆったりと何時しか浄土目指してる

春風に誘われ老いも杖をひく

ほどほどに戻せ米価と理髪料

早起きし月を窓から入れてやる

好きなもの美味しいものもほどほどに

町田市 竹内 紫鏑

金婚の宴の役者は末の孫

川柳とコーラス 金婚は通過点

堀ぎわの好捕のごとし詰め将棋

十年日記 首都圏を出ぬ鼠かな

公園の遊具くぐって理科に來い

横浜市 菱田 満秋

お墓には他人に言えぬことが言え

どうもどうもで日本人はわかる

桜散る下で別れの話する

順番に咲くのを花は待たれてる

神戸から春がくぎ煮でやって来る

横浜市 菊地 政勝

後手後手の施策に景気ソッポ向き

本当を酔ったついでに言つてやる

伝統がはびこっているイツキ飲み

気まぐれな水やりに花懐かない

人生の転機としたい定年後

静岡市 安本 晃授

遅れまいと明日へねじ捲く花時計

老いの巢のヒビ割れ防ぐ壁を塗る

眼裏に突然写る揚羽蝶

老いの身に年金重くなる背骨

未来凶を描いて夫婦の和を護る

富士宮市 渥美 弧秀

霧雨に季節の動く散歩道

アルバムに何時まで笑う幼友

詩と曲を貫い刻々変わる富士

幹事連れ下戸も付き合う呑み直し

雲流れ潮さいを聞く露天風呂

静岡県 蘭田 獭 杏

十年の知己の如くに花の下

トンネルを出ればまた花花の旅

花弁を付け小疲れのスニーカー

SLの煙が混じる花霞

満開に魅せられて出る老いの杖

富山市 舟渡 杏花

マザーテレサの真似など続くはずがない

紅ひとつ足す檜山の旅かばん

ドンマイドンマイこんなことばに救われて

ことしこそ仏好みの花の種

人並みに子にのしかかる老いた鬼

富山市 島 ひかる

簡単な便り幸せ満ちてくる

再会を信じた人の訃報の誌

幻か追えば彼岸へ消えてゆく

酸欠の街で柳がまた芽吹く

もう何を聞いても怖い事はない

富山県 増田 紗弓

醜形恐怖川は花びら乗せてゆく

ゼロの身と思えば幸の多くなり

春獅子の子役に温い風の息

花代へ獅子のはやしが早くなり

それなりの期待で母娘寄りかかり

大山市 早川 盛夫

男かな女かなやっぱり男

家に居てほしい新車を買ってやり

喧嘩した日調味料に気をつけろ

一夫多妻羨ましい国があり

ぶつかって転んで起きて人生さ

京都市 都倉 求芽

ジグソーパズルにナイフが嵌めてある

モノ時代のちもモノに扱われ

橋塔がすつくと光る春の海

野辺おくり三つ続いた春彼岸

ガジュマルにも似て移りゆく絆

京都市 山海 友照

古都の風わたしを呼びに来る如し

青蓮院心豊かに樹々が炎え

先斗町かいわい風が通り抜け

哲学の道を歩いて花に逢う

小雨降る街に忘れた女傘

大阪市 神夏 磯典子

明石大橋センスが光る夏帽子

誘蛾灯虫も賢くなりました

露天風呂あありがたや有難や

孫のこと話題晩酌お相伴

遠慮して鬼も入らぬ老いの部屋

大阪市 川端 一步
奥様といわれてはしゃぐ妻が好き

夫婦して春眠むさぼるが如く
熟年もおてて繋いで歩こうよ
捨て石にだれでもなれるものでない
才媛の嫁少しずつ変えている

大阪市 板東 倫子

冬苺りストラの日の季節感

花暦美女も野獣も老いました

ささやかな願いへ小さな招き猫

フェミニストなのに笑わぬ羅漢さん

「ゲイです」と造花のような顔で言う

大阪市 河井 庸佑

横槍を覚悟で語る主義主張

スタートがよく快調に乗る流れ

裏方の体験生きて今日の椅子

梅雨の降り待ってる顔に嫌な顔

大向こう役者冥利に尽きる声

大阪市 津守 柳伸

日々好日感謝忘れぬ日記帳

感嘆詞忘れたくない束ね髪

さわやかな風黒髪をなびかせる

タイマーを忘れてました炊飯器

さくらんぼ変哲もなく独り

大阪市 松尾 柳右子

紫のアヤメ引き立て雨が降る
雨の中けんか別れが走り出す
アジサイの変化に似たか娘の着替え
声の出ぬ風邪は孫等の置き土産
難聴にほんやり理解笑み送る

大阪市 本間 満津子

すっかり言うて聞いて互いに軽くなり

無駄のないのは淋しいことだとも思ひ

声聞くだけの贅沢電話二万キロ

しようもないことでも言えるので家族

フワフワを静める春の雨も良し

大阪市 井上 白峰

保護色に慣れて自分の彩忘れ

雪月花十七文字の綾を織る

アクセルとブレーキ妻が踏み分ける

決心がぐらつきだした曲り角

しきたりも時の流れに逆らえず

大阪市 北 勝美

無と空の多い心経に救われる

諦めを知った時から楽になり

病妻を看取る白髪まだ逝けぬ

匠技鉋くずにもある命

藤の棚花を見上げる車椅子

大阪市 大塚節子

腕に数珠かけて心へかけ忘れ
あんたはん信用して押す印だっせ
よばれ立ち席抜ける間よ時ぞ今
駆け込み乗車難波へ一人おき忘れ
コーヒーの味蘇り一句出た

大阪市 渡部 さと美

人を恋う想いでゆれる藤の花
まあまあと立てない位置へ座らされ
複雑骨折二世帯住んで見て別れ
列島縦断テレビよ訛り消したのか
明石大橋ゼッケン付けて六十四

大阪市 川内 叭笑

殺された子供の無念何と聞く
大地震お辞儀したまま僕の家
体中基地と言う名の傷があり
新党の新党らしきどこにある
盗み酒顔にも出ます臭います

大阪市 清水 絹子

子と同居水掛け論で今日も暮れ
打ち水も掃除洗濯風呂の水
独り膳あのすき焼きの水入らず
豆粒ほども大阪があり世界地図
午後三時納豆一つまたひとつ

大阪市 川原章久

あと一言思う間にくる通り雨
言いたいこと呑んで見上げる隼月
春の海安住ならぬしじみ貝
鰻井とカレー親子の差し向い
飼い主も猫もガラリと更衣

大阪市 福岡雅楓

瀬戸の夢パールブリッジ春うらら
駅降りて駆け出している旅帰り
ああこれがリッツなのかと通り過ぎ
門開けて閉めて地球の巡る音
通り抜け楊貴妃あつて小町ない

大阪市 小林周信

昭和史遠く胸にほくろのあった女
ひねもすのたり雑魚一匹の釣公園
頬張った焼芋へ鳴るドアチャイム
政治討論枕詞が長過ぎる
毀誉褒貶俺は橋龍サポーター

大阪市 玉置英子

亡夫ならどうするだろうこんな時
橋の塔地球の芯へ直線に(明石海峡大橋)
乙女椿と競う気はないやまつばき
花見には行ってきました喜寿どっし
桜咲く関鯖急に値上がりし

大阪市 杉澤汀

何ごともなかったように夫婦鳩
みくびられ視線は既によその人
鮎放流荒瀬の旅へ六ヶ月
鮎巢立ち入社試験は堰堤越え
どの花が同期の君か桜咲く

大阪市 岡本久峰

タニマチが終の館か慣らされる
戦死墓地ひとりひとりに泣きぬ
潔く散りしか友は功六級
どじょうたにしみみずもぐらよどこにいる
打ち水のすがすがしけり朝の駅

堺市 板尾岳人

悪人を乗せても走る御所車
鞆にゆられて恋を捨てました
恋人がたくさんいます赤ワイン
恋人が出来たら海に出て話そ
応援歌負けて笑って千里山(母校関西一高準優勝)

堺市 楊井二南

空腹の時は味見をしたくない
好敵手四つに組んで譲らない
一点を見詰めて疑念さしはさむ
年の差を言えば謙遜じみて来る
葉桜の魅力浮気を引き締める

堺市 黒田真砂

夫病んで雑草ぬくもためらわれ
春風に身を押しされつつ夫見舞う
去年逝きし妹桜と夢で逢う
一日が長い独りのモカの香り
夫見舞うベッドの寝嵩低く春

堺市 近藤豊子

ひこうき雲あそびたりない児と帰る
春の日へばんざいしている柿の枝
チュックインあとは朝までかくれんぼ
髪うすくなりたりダステイン ホフマンも
保育園のこるひとりへ灯がともる

堺市 宮本かりん

目の前の疑似餌がとても魅力的
誘われるままに気楽な風に乗る
月明り手をつなぐのも久しぶり
誕生日齡がわたしを嘲笑う
ふるさとの駅もわたしも齡をとる

堺市 志田千代

披露宴泊ったことのないホテル
声高にお式ロイヤルホテルです
遅ればせながら新郎ほめている
小休止小休止する見舞状
晩学の遅れ時々深呼吸

堺市 神原 文

瞑想へ鯉が飛びだす大覚寺

茶室には英語とび交う大徳寺

友を泣き友を思つて南禅寺

どんちゃんを抜け出してきて庭の藤

猪口貰いおやおやわたいしいける口

高石市 浅野 房子

無限大の友情あの世までつづく(はつこさんへ)

人生の卒業いさぎよくしたい

夕食のビールがぬるい妻の乱

夢の中枯野にひとり立っている

通り抜け去年あなたと行ったのに

豊中市 田中正坊

やることはもうやってきた喜寿の坂

今こそが余生なんだと言ひ聞かせ

三世代 二泊三日の旅日記

若い娘がみな美しい宿浴衣

廣重の美人図を観る春うらら

豊中市 安藤 寿美子

蘭亭叙読み下せないままかけてある

いい夢を見てるよ食べるなよ猥よ

ゆずれない所へ座布団しいておく

坂道急家が傾くように見え

トーシューズ孫の踊りに見とれている

豊中市 吉田 あずき

さくら咲き春の呪いにかけられる

減税も縁なく今年の桜散る

本音から少しはずれるのが得意

言うべきか言わざるべきかまだこの世

いかなごに神戸のガンバリ三年目

豊中市 井上 直次

年金者ペンのとまった収入欄

趣味の数 棚に並んだ入門書

孫の文娘と同じ字で届く

死に遅れ後は余生と戦友会

下積みで磨いた技のいぶし銀

豊中市 滝北 博史

椿まつりテレビニュースにわが姿

鉢変えて生き生きしてるサクラ草

つらい日の庭にイリスとフリージア

吊り橋で明石海峡春景色

四月七日もう千寝ると新世紀

池田市 岡本 吉太郎

一呼吸おいて話せば笑い事

離婚して未練ばかりは男達

子等五十年金話早してる

人生の悩み生きてるあかしなり

通夜の夜月光を背に帰り行く

池田市 栗田 久子

一時の晴れ間忙しネムの花
ほろ酔いにぜいたく過ぎる花吹雪

晴れ間には猫も散歩か花畑
一呼吸おいて手にするハーブティー
架橋後はうだつのあがる町へ行く

吹田市 栗谷 春子

咲きそめのはにかみの色花も葉も

散歩みち辛夷うれしい家二軒
確実に確実に日は過ぎてゆく

百合七本切ないほどの枕もと
老いなんて身ぶるいひとつ吹つとばせ

吹田市 瀬戸 まさよ

つぼみから散るまで様になるさくら
花沈み緑吹奏楽響く

世は変わる独り暮らしを善しと言う
何事もいいわええわと許す歳

不足分幹事支払う同窓会

吹田市 古川 喜美子

道聞くもきかれるもまた旅の人
春うらら空巢ゆつくり荷をまとめ

有田の皿に蟹があぐらをかいている
猫にまで心の動き見すかされ

豪邸のちらしに包む草の花

吹田市 石原 靖巳

運鈍根ないが三度のめしを食い
桜満開つまらぬ愚痴はやめておく

送別会みんな惜しむと限らない
休刊日リズム取れない朝のお茶
百歳が老後の貯金励む国

吹田市 野下 之男

待たされて腹の立たない婚約期

遅れても亀は未来を夢見てる
口だけが心無い事言うており
絶景をも少し見たい夢の橋

出口まだ遙かな妻の電話かな

茨木市 藤井 正雄

ラウンジの夜景妻からもたれかけ
遅咲きのスターだったがい芸

坪庭に花欠かさない祖母の四季
ホテルより民宿が良いしじみ汁
足音で機嫌を仕訳できる妻

高槻市 川島 諷云児

わたしから川柳取れば骨と皮
ライバルと競った足が萎えてくる

賞味期限切れた妻でも居る安堵
散骨もいいなと思う蒼い海

句読点打てないままにはや傘寿

高槻市 井上照子

満開の下で思い出辿る昏れ

孤独とは思わぬ谷間君が棲む

おない年友の化粧と明るさと

呆けたよと言えば吾が娘は突きはなす

ペランダに鉢植並べ土恋し

高槻市 傍島克治

もつれ合う蝶飽きもせずひとりもの

ときめかぬ胸の鼓動は正常に

功成れば友一人去り一人去り

法輪寺散華と紛う花吹雪

父の日は父の日というだけのこと

守口市 森川まさお

春愁というものはない風車

佐保川という名で呼ばれ水温む

一筋の川に渴きがとめられる

浅漬や人が恋しい春の宵

磨崖仏思いがけなく鳥交尾

守口市 結城君子

遊ぶこと決まり血色よくなつた

じりじりと本気でなおす春の風邪

水彩のひいな飾りてその気分

怠惰な日重ねてわたし呆けるかも

蔦若葉一文字貰うペンネーム

寝屋川市 北岡波留吉

子報通りならぬ浮世に夢がある

狭い家器用に使う三世代

匿名で貴い方がボランティア

恋ゆえに貴い方が城を捨て

妻の口防ぐテープが見当らぬ

寝屋川市 江口度

雪解けへ雷鳥少し色を変え

伝言板の多弁になつてくる花見

弟が転んで兄が泣いている

放任を許さぬ足の爪をさる

税金をごまかしていた信号機

寝屋川市 柴田英壬子

大役をぶじに果たした茜雲

気がつくと葉ざくらばかり蟻がくる

夕暮れは不安喫茶店ですごす

そつとしてほしいも老いのエゴかしら

乱雑な書齋あつたかな詩がうまれ

寝屋川市 岸野あやめ

白哲の長身や佳し入社式

新聞に出ていましたと信じ切り

投書欄私に似てる悩みごと

待ち人がようよう着いた国訛り

未亡人せめて歌舞伎を観に行かん

寝屋川市 太田 とし子

初夏の風花も私も衣替え

戸を閉めてこそりと音のする方へ

置きぐすり一年前の痛み止め

雨の音お茶とすっぱい梅干と

赤い服誇示するようにこんな齡

寝屋川市 後藤 黎之助

退院が近いと階段上り下り

三世代揃ってコーヒジュース お茶

二次会は肩書で呼ぶ同期生

病癒え初心を想い桜見る

冷暖房完備役所の窓開かず

寝屋川市 森 茜

頬笑んでいないと苺つぶれそう

蚊柱が立つ日溜りのしんと墓地

ばあちゃんが塾休ませて叱られる

何をどう取り違えたか頬染める

れんげたんぽぼ 追い詰められた坂に咲く

寝屋川市 角野 仁清

還暦もキユンときめくまだ男

交番の軒へ迷っている燕

花水木造花のように咲いて見せ

保健室心の傷を診るところ

レディースデーなどとパチンコ屋が誘う

枚方市 森本 節子

羅針盤なくても天に星がある

海峡の吊り橋が知る人の悲喜

オランダに行ったつもりとハウステンボス(長崎にて 三句)

夜の海光の魔術に色妖し

チャンポンはやはり本場と旅の味

枚方市 海老池 洋

自分史を練れば悪友ころげ落ち

重心のいつしかずれてきたお酒

ママさんに男だてらと励まされ

虎の威とやめて分かった社の名刺

ことここにままと開けた玉手箱

枚方市 前 たもつ

島に橋いいことばかり言うている

橋マラソン大きな道であったとき

時流れお遍路さんも持つ電話

ふるさとの温いニュースと桃の花

骨埋める土地で小さな役受ける

枚方市 寺川 弘一

生き方に無駄などあろうはずがない

柱時計今でもネジを巻く我が家

モーツァルト今でも聴いて泣けますか

バラ色の人生という通過点

いい出会いいつも遅かったなと思う

交野市 福崎 しげお

癌告知桜ちらほら咲く朝に

趣味登山煙草も喫まず肺を病み

癌病棟高校野球に湧く歓声

メーデーの会場見降す癌病棟

癌告知やさしい妻を見出せり

東大阪市 森下 愛論

向河岸日傘の上にさくら咲く

快く飲める酒あり友があり

バスの旅心残りの地酒酌む

無視されているなど分かる酒の席

過去ばかり追うてる愚痴の老いの酒

東大阪市 指宿 千枝子

今少し異国の旅を楽しまん

人前で抱擁似合う海の向こう

オリーブの地平線雲空に溶け

風車守りサンチョパンサに少し似て

私の旅リュックにズック似合うて来

東大阪市 谷口 義

打水をしたら霊柩車を通る

留袖のままゴクゴクと水を飲む

長続きせんとは本人も思い

一身上の都合で会社やめません

おじいさんが死にほがらかなおばあさん

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

遅れ咲く一本愛しチュリッツ

全身の汗裸馬愛撫する

どこまでの愛よ砂丘を駆けて行く

何様のおいでホテルに横付けて

ついそこにそびえるホテルまで遠い

羽曳野市 吉川 寿美

喝采を一度はほしいかたつむり

大腿で生きて転んでばかりいる

男と女 らしさがあつた昔の絵

下書で終る科白を持ち歩く

エプロン姿男衞いのない平和

羽曳野市 福田 満州

白木蓮の散りざまに似たくない

咲き出して辛夷通りと思い出し

叱つた口調そのまま叱られる

さしすせそ分量でもいいお味

わたくしの通夜に聞きたい曲が増え

羽曳野市 三好 専平

ふるさとの小川目高はもういない

台本にはないが相手を張り倒し

空っぽの財布の紐を締め直し

二上山どこから見ても美しい

盲導犬そんな悲しい目をするな

ひとりでもたのしい質とくらして
花すんで梢は無口な風になる
八尾市 宮西弥生

整形の顔がヒーローになりたがる
幸福がうすくて石橋を叩く
散りつくしたあととはわたしの出番です
八尾市 内海幸生

走馬灯ゆっくり回れ恩師の忌
晴れもよし雨もまたよし恩師の忌
新緑よ一生輝き通すべし
不況風うちだけ狙う訳でなし
水やらぬペンペン草の生きの良さ
八尾市 長谷川春蘭

朝寝して良い身となれば老い淋し
花疲れとは快い帰路だなあ
花の窓着く度駅の名を聞く子
受験子に熱さほどよい母の粥
雑の間に雑と寝る子の夜具運ぶ
八尾市 宮崎シマ子

稚魚放つ迷子札をつけておく
譲られた席心地よい揺れがある
母の待つ島へは飛行機で帰る
鈴蘭のすず一つ増え誕生日
母の日に精いっぱい嫁の情

花誘う母の電話も若やいで
春の風邪ようやく猫で打ち止める
八尾市 吉村一風

春愁を子に見せまいとでかい声
脱サラに揉み手なかなかない
道草もふえて余生に味がつき
八尾市 高橋夕花

お見舞は遠くて近い京都なり
病院の坂のしぐれは弟よ
お見舞の帰りに買った五色豆
夕ざくら一刻過去に佇めり
葉ざくらのみちは私の性に合い
八尾市 生嶋ますみ

回るすし手がのび穴子さらわれる
チンと呼ぶ電子レンジのぬく御飯
退院する母の蒲団に陽をあてる
犬と遊ぶ小犬のワルツ弾き終えて
チャンチャンコ縫うて米寿の母祝う
八尾市 大内朝子

からっぽのところに夢の種を蒔く
浪曲はほっとおとなの子守り歌
川柳をはじめて仲のいい姉妹
新しい地図を捜して生きる張り
さみしさに負けぬひとりを飼い慣らす

八尾市 村上剛治

昇進で妻がきれいになりました
大空に抱かれてぼくは風になる
この先を言うと話が纏れそう
走ってさえいればかあさん叱らない
耳許へ散歩しましょと春の風

八尾市 村上ミツ子

わくわくとドキドキ詰めたランドセル
留守電に口ごもってる顔がみえ
手引きもし従いもする夫婦道
みくびらず買いかぶらずについて行く
都忘れと亡母の話をしています

八尾市 篠原いつふみ

心配はしないであなた亡き後は
残り火をわからぬように持っている
マネキンとどうして連う試着室
良いところだけは似ている孫を抱く
婚約のそれから地味になるデート

八尾市 神原まさと

桜敷く道は爪先立ちで行く
病院の待合室が若返り
自然から宝を貰う里の子等
捨て犬の可愛らしさに困り果て
還暦の妻に母の赤贈る

岸和田市 芳地狸村

それぞれの門に顔あり紫禁城(北京 五句)
観光の人人人の天安門
自転車に車が負ける朝の街
名物の北京ダックが皮で出る
長城へアタックたのし喜寿の春

岸和田市 高須賀金太

長打より僕は単打で稼ぎたい
一杯の酒で安い理屈をこねまわし
追憶をかき消すように花ふぶき
歓心を買おうとおどけてはみたが
雑念があるから円が描けない

岸和田市 岩佐ダン吉

核あやつり平和守るといふ不安
クローン人間いまに増殖する不安
ヒト科絶え縁が甦る地球
洗いざらい話せと母さんの涙
グルメシアンの様子は神のいたずらか

岸和田市 原さよ子

ユニークな挨拶新人うけている
老舗にも劣らぬ母のよもぎ餅
鶴のひと声祖父の威厳はまだ落ちず
いい顔でビール飲んでる花の下
不景気も主婦も忘れてエアポート

岸和田市 古野 ひで

花の城わんさわんさと人の群れ

人の世の憂きを忘れて句にひたり

神様の御褒美かしら我が余生

言いつのる私を軽くないなす夫

親馬鹿でないがやっぱり私の子

岸和田市 井 齋 一 齋

賭けごとにサッカー加え綱渡り

不況風泳ぎ切れない鯉のぼり

ビールのよう泡立つ頃が花だった

いさり火に帰らぬ父を思い出す

無理承知 次期当選の下準備

岸和田市 藪 野 けい子

夜ざくらへ例年通りの席に着く

母さんの後ろ姿に見る老後

店頭の和菓子を見てのあんづくり

いちにちを抹茶と和菓子で憩う余暇

アイドルに苦労話がありました

岸和田市 長谷川 呂 万

席替えて義理のからまぬ温い酒

失敗で知る人情の裏表

何となくコース決まっているデート

帯解いて御令室様脱ぎ捨てる

銀盃に一家の名誉こめて酌む

岸和田市 田 中 文 時

葬式で分かった僕と同じ齢

旅帰り粗食が続く老夫婦

路地裏で缶蹴った道排気ガス

気にするなどは言え別居した電話

匕首に大変身をするナイフ

富田林市 藤 田 泰 子

転た寝のほんの短い夢の中

抜け殻であふれる春の乱れ籠

痛み止め自分が自分でないような

曾祖母が着ていたと聞く緋縮緬

独り身の夜桜に酔う昨日今日

富田林市 松 本 今日子

春四月みんなそわそわしています

弱虫も剛情もいる洗濯機

ゴミ出しも料理も出来る夫求む

沢山の欲にまみれて生きている

思い出がここにもムーンライトセレナーデ

河内長野市 植 村 喜 代

花だより増えて新聞明るなる

毎日を重ねて近き古稀の年

四月バカでもよい有難うと言って

祝電をもらって弔電打っている

まだ生れない姉の子に土産買い

河内長野市 加島 由一

たばこ消す仕草味方になってやる
おひとり来てにたいがい引っかかり
いいのかと思わせるよな酌される

パソコンを習い待ってる新世紀
向けた背が知ってた大きな陽の温さ

和泉市 西岡 洛醉

人間の脆さへ金という話題
無位無冠古希を守って昨日今日
米寿まで金欲物欲続くなり

何もせぬ毎日妙に肩が凝り
過去未来懐の夢温かい

和泉市 岡井 やすお

やっぱりナ総裁ここのご出身
初心忘るな入学の日の東大子
電気下げガスは横這い水値上げ

牛若丸鰻にしてと神頼み
お団子の食べ過ぎですよ仰木さん

大阪府 八十田 洞庵

生きるため時々白い旗を出す
矢印に逆らい迷い深くなる

良心に恥じよ投書のペンをとる
母のエプロン一日がまだ終らない
まっ白な紙にまさかが伏せてある

奈良市 天正 千梢

のみすぎたのか自分の影がさみしすぎ
あやしてくるので酔いが早くまわる
愚痴言いに来て聞かされる破目

倦怠期少し胡椒をかけすぎる
旬なんかないんだトマト茄子きゅうり

奈良市 米田 恭昌

あれ以来社名を小さくした袋
やつと毬弾む娘よ晴れ姿(未娘嫁ぐ 四句)
バージンロード ロボット娘に手をとられ

バージンロード こんなにれた事はない
スピーチのしどろもどろにある温味

生駒市 北山 悟郎

富士桜日本の心ひきしめる
耐え抜いた真一文字の父の口
一筋の道をひたすら肅々と

世の中を裏返したい正義感
亡き戦友が早く来いよと呼ぶ傘寿

大和郡山市 坊農 柳弘

大器晩成親の期待が欠伸する
梅雨明けの沖繩誘うエメラルド
タコ焼きの旨味受け継ぐ橋の上

ジューンブライド蛙コーラスはなむけに
恋やつれあじさい寺に付つ女

大和郡山市 柳原 慧心

路地裏の屋台の酒にある情け

部外秘 社外秘 極秘もみなもれる

逢うたびに孫の遊びがまた変わる

働きに出てから妻がよく笑う

帰国して絵葉書を待つ間のわるさ

和歌山市 堀端 三男

酒煙草止めた男の影が無い

イミテーションの指輪で起こるメロドラマ

長の付く役から返上仕り

良いことが続いて話前後する

左傾した郷里の友と逢う都会

和歌山市 牛尾 緑良

春臙 君に十九の日がありき

ともだちのまままで同窓会で会う

果物も少女も句を忘れてる

讚美歌をふと思ひ出す花吹雪

さくらさくら命あつての散歩道

和歌山市 桜井 千秀

人情の交差に欲しい川の音

マネキンの似合う服には手を触れず

回れ右すれば昨日に戻れそう

ひいふうみい始めて実る桜桃

右足を庇うと拗ねる左足

和歌山市 垂井 千寿子

逆縁の子有り地藏へ手向け花

逃げられぬように上座に据えられる

人生を逃げたくなれば寺参り

総裁も銭の流れは変えられず

落第は座右の銘を書き変える

和歌山市 福本 英子

魚屋が魚に水を撒いている

桃の里明日の摘花も知らぬげに

振り返り振り返り行く花遍路

餅撒きにお遍路さんも笠を受け

私の未来図を見る無縁仏

和歌山市 青枝 鉄治

セクハラと怒る女のシースルー

仲人にしかと聞いたく酒の量

禁酒車もプランに入れるJR

栄転にしては寂しい駅に着く

億の金釣る磁石持つ金バッジ

和歌山市 池永 正嗣

あの頃をまた思い出す軍歌集

駅前の放置自転車止まぬ雨

工場はヒマか煙突立ったまま

留守番へ一升ビンが相手する

だらしな腹締め上げる革ベルト

和歌山市 宮口克子

お互いに平行線のまま峠
人間の魅力彼より彼の父
じつくりと罪は氷が溶けてから
信頼と自信鯖にも鯛にも
悔しさの枕泣いても叩いても

和歌山市 木本朱夏

静脈が泡立つさくら散るまでは
花吹雪過去と未来がすれ違ふ
死んだように春の真昼の花畑
黒猫を匿っている花の闇
葉桜にわんわん噓せているいのち

和歌山市 福井桂香

病室の痛みに折れるバラの首
プライドの一つ二つはへし折って
赤ちゃんのように虚空をつかんでみる
地獄界夜のとばりが攻めにくる
相部屋の少年も退く新学期

和歌山市 古久保和子

熱気むんむん花もすっかり花疲れ
タンポポに攻め落とされている更地
花便り美容院なら直ぐとなり
関節を外して楽に生きている
ポランテアいつも卵を温める

和歌山市 田中みね

門灯に窘められて千鳥足
郵便受けに団体様の請求書
終着駅見て見ぬ振りをする余生
気が付くと私もしてる孫自慢
すべてに深読みあなたお疲れ出ませんか

和歌山市 細川稚代

たこ焼の舟にひらひら舞うさくら
傾いた墓石は過去を語らない
紀の国のみやま石楠花今盛り
ためされてまだ耐えている芝桜
かけがえのない人でした好きでした

和歌山市 玉置当代

暁を覚えぬ枕にて候
試験合格 娘あしたからナース
姑さんの腕にはいつも負けている
またふたり労りあっていく枕
対角線に座り視線を浴びている

和歌山市 川上大輪

種明かしは出来ない僕が消えるから
何思ったのか目覚まし不意に鳴る
拝啓と書いて自分で照れている
散髪中ですが噓が出そうです
原色で虹を描くからすぐ飽きる

和歌山市 川上富湖

見つめたら赤くなるのが贖作だ

地球への矢文みか月から届く

筈が成長剤を飲んでいる

乙姫様がこっそり入れた請求書

薬石効なく私の花が枯れました

和歌山市 岩本美智子

春の嵐夫一日眠っている

思うこと多くて夜半の闇深し

荒廃の地下道に吹く春の風

百花繚乱春夏いちどに訪れる

花の香り消えて屋台のにおい満つ

和歌山市 木村初子

花吹雪わたし詩人になっている

薄紅にはんなり染まる桜びと

留学の孫に豆菓子エアメール

浅き夢枕返してまた眠る

転生の風は陽気な歌に乗せ

和歌山市 楠見章子

萌える芽に具合を問うて草むしり

美味そうに食べる男は惹きつける

身じたくを整えはらり散るさくら

ステンドグラスの光りつ罪をざんげする

誘われてみようか風がみどりいろ

海南市 三宅保州

天国でお逢いできたらよいですね

極楽も地獄も多分高齢化

要約をすると中味のない話

文学的価値はともかく立志伝

その指輪僕があげたのとは違う

神戸市 中村ゆきを

新任へ拍手したのは茶髪の子

初夏の風そろそろ生徒朱に染まり

美味しい店巨人びいきがものたらず

犯人が澄まし顔をして茶をたてる

よいよいの父と風呂屋へ夕桜

神戸市 山口美穂

春樂し山菜舌にほろ苦く

どの辺で本音出そうか耳そうじ

生老病死 老母の寝息が胸を突く

犬談義きいてる犬は欠伸する

老母とわたしの残り時間が気にかかる

神戸市 木村貴代子

雨のち晴あなたと生きた三十年

雨降りの歌そのままに子と帰る

音楽会どの子の口もまんまるで

褒め足りぬ思いを皿にドツと盛る

あれほどの若者何故に召し給う

尼崎市 春城 武庫坊

夜桜もひっそり不況の春を耐え
桜並木にラジコンヘリが飛ぶ平和
春風のおだてにちよつと乗ってみる
乗り捨ての自転車的に花が散る
二本目の徳利で返事また変わり

尼崎市 春城 年代

じゃが芋の芽が出て哀を憎むなり
着てゆく服の決まらぬ春の気まぐれに
ほろほろと朧月夜を戻りけり
過ぎし日の記憶はおぼろおぼろにて
ひとりより淋しいことを君知るや

尼崎市 長浜 澄子

ホルテージ上がらぬ雨の化粧前
タンポポの虬毛せつなに夢を見る
流れ雲過去は追わないことにする
菩提寺のさくら父に降り母に散る
簡単に弱音は吐かぬ黄水仙

西宮市 門谷 たず子

友は一年帰らず残る紅椿(はつこ遺句集紅椿)
やさしくしよう夫傘寿を祝われる
義妹がホームへ入る梅雨じめり
何もできぬが子の帰り待つ門灯よ
明日へ向く新しい靴揃えとく

西宮市 林 はつ絵

臭わず鱒を焼いてもものたりず
賑やかに嫁の見立てで服を買う
高齡もここまでくれば恐くない
おたがいに鎧を脱げば春の風
ごめんなさい いろいろほんのり温み湧く

西宮市 奥田 みつ子

あじさいの彩は変わらず人は亡し
鮮やかな花豊かなりあじさい忌
雲間から塔を見守るやさしい目
亡姑の好物作って亡姑と対話する
赤鉛筆片手に今日はシチュー煮る

西宮市 西口 いわゑ

恋ごころ雨もわたしの為に降る
盲点を歩がやんわりとついてくる
サミットだ等と申して飲んでいる
夕ざくら道行き等をしてみたり
好きなことさせてくれてる厚い胸

西宮市 秋元 てる

句集贈る感想細々老恩師
菜種梅雨友の大方病い持つ
世紀末などしたり顔止めとくれ
大口の合唱ラッパ黄水仙
空箱が役に立ったと老母いきいき

西宮市 山本義子

むかしから独りですよと春の月
残酷なはずらもする風である

気分一新 春帽子など買いますか
お仏飯にはともあれ米を研ぐ
五分咲きに出かけてこいと山便り

西宮市 亀岡哲子

大根の花はむらさき銀の雨

花影に亡母を見たよなつかの間の
ほかほかの湯気盛り上げるお仏飯

伝言板が見当りませぬ風の駅
よそさまの庭に歳時記坂の町

西宮市 菊池トミエ

観覧車大きく回れ夢のせて

きらきらとさざ波眩しい猫柳
日曜日教会の鐘良くひびく

春雨は花粉もませて降ってくる
少し老いすこし偏屈花作る

芦屋市 黒田能子

人ひとり葬り去ったペンの先

ミステリーペンは生き生き謎を解く
名が売れてサラサラサイインペン

少子化の時代娘の子沢山

胸張って馬鹿正直に生きている

伊丹市 小熊江美

春爛漫わたむがように来た風
チューリップ我も我もと伸びて咲く
余生にも大きな壁はあるものだ

披露宴孫へ謡った高砂や
生きてるとまさかと思う事に遇う

宝塚市 吉田笑女

はなれ住む子の無事祈る朝夕に

孤独にも慣れて暮しも板につき
よしやろうその気になれば句も出来る
八十路坂まだ泣き虫にとりつかれ

久々の友の便りに泣かされる

宝塚市 上田佳秋

ワンカップ夜半にわたしを説諭する

いつ消える跡継ぎのないわが戸籍
抜かれても抜き返せない万歩計

痛む足なだめなだめて競馬場
亡き妻の匂いが消えたたとう紙よ

宝塚市 嵯峨根保子

美しき蝶は昔を語らない

イヤリング三人ばかり敵がいて
船場煮を遠い味覚が知っている

いつのまに好きになったか土牛蒡
諍こうて後には引けぬ露のとう

宝塚市 黒台 伊佐武

君なくば愚痴も言わずに済むものを
ほんのりと上気色して薫る梅

葉隠れに香る花あり白美人

秘めた香を風に散らして逝く桜

歎びのあと儂さが込み上げる

川西市 松本 ただし

手を挙げてみんなで渡る癖が付き

凡人の中の凡人自認する

老松の腰慇懃に折れている

買い控えばかり我が家のビッグバン

朝市へ夫婦気取りの宿浴衣

川西市 氏林 洋 敏

消火器はあるが期限は切れている

音無しの構えパチンコ負けている

名湯の宿で命を遊ばせる

新聞に本当の年が載っている

男茶碗せいっぱいに仕事する

加古川市 吐田 公一

刺戟するために時々妻は病む

母と手を繋ぐ校舎の花の下

物腰はソフト名刺がものをいう

一字ずつ罪をつぐなう写経する

天下り先のないまま肩叩き

姫路市 古川 奮 水

限界を競った山の雪消える
東塔に春を迎えた花会式

喜寿の賀はすっかり丸い友の背な

夕映えに赤い命が煮えたぎる

獅子身中の虫恥ずかしいドラマ

相生市 中塚 礎 石

お芝居が上手になった春帽子

余命表女は夢を追い続け

引越しの荷物にあったハーモニカ

道を這う生きる毛虫の早い足

八十路坂どうやら嘘も底をつき

岡山市 井上 柳 五郎

ご機嫌を風呂の窓から父の歌

遠き日の曠野の草木若芽萌ゆ

姑娘の手鼻あざやか思い出に

生き抜いた五体自慢も老いの皺

冬天に雷鳴雷雨昼さがり

岡山市 川端 柳 子

花吹雪死ぬの生きるのとはおかし

手つかずの預金うなっていたそうな

合格オメデトウ父さん臍をなでながら

晩学の門を叩けばある門限

しあわせを絵にしほのぼの聞く話

倉敷市 田 辺 灸 六

生き延びて来る日くる日を踏みしめる

色褪せた花は誤解をされたまま

頭から一喝老いの意趣晴らし

母校万歳桜満開優勝旗

誘われた花見の旅の後遺症

倉敷市 小 野 克 枝

白い杖頬笑む花に耳を貸す

長男の立場で声を大にする

花束で飾る美しいたくらみ

ここまでは友情白く太い線

子もやがて怒りの海を知るだろう

倉敷市 井 上 富 子

地下足袋に日曜のないカレンダー

春うらら足でみつけた野の恵み

食欲はまだ旺盛な総入歯

鯉のぼり花粉情報聴いてない

校則ではち切れそうなスクールカバン

岡山県 二 宗 吟 平

石碑撫でながら爺婆の話する

帰りきた燕懐かしそうに舞い

卒業の無い老大で賞を受け

ジョギングで桜トンネル独りじめ

写真名鑑明治は遠くなりにつけり

岡山県 荻 野 鮫 虎 狼

失明の右眼が可哀想になり

持寄りの肴は全部左利き

神様も花見の酒が欲しい日々

孫の手は痒い所を通り過ぎ

宿の下駄妻に済まない方へ向き

岡山県 山 本 玉 恵

老いらくの恋を吊した衣紋掛

絆の端摺み損ねて蟻地獄

つまずいて心の杖をまさぐりぬ

余生とは思いたくない足の裏

今日までの節目に残る母の釘

岡山県 矢 内 寿 恵 子

年金に聞かせてならぬ株のこと

亡父の命に亡母の命を足して生き

一病息災毒もくすりも飲んでます

花の命捧げつくした敗戦忌

どん底で人の情けの裏おもて

岡山県 富 坂 志 重

家族には見せてはならぬ今日の顔

つぶらな瞳やがて火にあう風にあう

野菊一枝花屋の花と手をつなぐ

ワープロに今日も叱られ老いの指

寺の鐘余韻死の声生の声

抑揚をつけて遠くへ行った人
この時期の衣類になやむ春彼岸
悪ふざけだけは止めてよ四月馬鹿
春の道うれしくなつて遠回り
同志を得た春に乾杯山歩き

広島市 森田文

おじさんが死んださくらが散っている
鳥の眼虫の眼自然は美しく暮れる
喜怒哀楽 男のうしろ姿かな
友達がいて納豆が好きになる
川柳の本が売れてる花の雨

竹原市 小島蘭幸

平成の演歌は肩身狭く生き
カタクリの里で出くわす人情味
リストラの前に辞表を出して来る
ジャンケンポンで擲んだ倅せだつてある
二つは無い真実を追いつづけ

竹原市 森井菁居

ローン終之故郷恋し蝸牛
岬から絶唱したい海の歌
寸劇を演じるように死を選び
運命は信じませんと美人ママ
表札は立派な文字で生き続け

竹原市 古谷節夫

嘯りに目覚めて今日をありがと
九十の父の背中の中の人生訓
木の芽和え筍ごはん倅せよ
フキわらび童にかえす春の野辺
おかげさま初心にかえる誕生日

竹原市 石原淑子

これらも春猫も屋根から野辺送り
しんしんと六十路の果ての桜かな
山青し青し鳩舎に帰るなり
引分けなら小さい方が勝っている
目鼻欠け仏もこの世の傷をもち

竹原市 三宅不朽

高級車を飛ばしてるのは若者だ
おせち料理自家製の物は見当らず
握手はしたがあなたに投票致しません
悪い癖だけはあなたに皆似て
帰省した子がノオノオと寝て過し

柳井市 弘津柳慶

点滴の友の強気が痛々し
風の子が少なくなつた風のウツ
先生と呼ばれ振り向く自己過信
黙ってはいるが漬物石の父
景気よい時は静かに回る独楽

宇部市 平田実男

41

美祿市 安平次 弘道

錠剤を飲んでて謀反出来ませうか
棘のあるバラに復讐して見ても
女三人コーヒータムしています
ふくれっ面鏡の知ったことでなし
心技体さすが横綱土俵入り

下関市 石川 侃流洞

チューリップ孫の拍手へパツと咲く
花吹雪過疎に悔いなし弱法師
神獸鏡ヒミコ映した夢を追い
お齋の酒で和尚とはずんだ釣り談義
夢たんと見せて貰ったはずれくじ

鳥取市 武田 帆雀

七寸の碁盤にもある崖つ淵
妻よりも色が白くて能がない
保護色を着てしおらしく写ってる
フオークより割り箸が好きお祖母さま
投了も近い正座に組み直す

鳥取市 西村 黙光

元気だせ励ますように陽が昇る
少しずつ我取り戻す散歩道
齢毎が増えて来ました誤字脱字
この齢でよくもこんなに飲めたもの
退屈をすると決まって縄ノレン

鳥取市 美田 旋風

欲のない人へ揉み手は通じない
最後まで嘘を通した愛もある
サクラ満開老母は鯛焼き買ってくる
幼子の願い届けよ流し雛
欲望の電車に乗って事故多発

鳥取市 前田 一枝

花見酒きさまとおれの唄になる
靴ぬいで素足で春を踏んで見る
一人来て二人で俄雨にぬれ
美人ネと言われた人は横に居た
影法師仏にもなり神になり

鳥取市 坂田 和歌子

アルバムに恋の頁が蘇る
春の陽に少しやさしい鬼瓦
もしかして私バツカスかも知れぬ
のほほんと屋根から降りぬネコになる
女でも好きになりそうナースさん

鳥取市 植田 一京

花吹雪家中春の風になる
悪人になれそうもなし桜咲く
二次会はどこに行こうと付いてゆく
人が好き五七五に詠みきれず
春ですねやっぱり若さ欲しくなる

鳥取市 近藤佳子
転々と住居を替えて出世せず
過ぎた日を風に話して椿落ち

細やかな幸せ今朝も粥うまし
ケルン積むいとしいひとの眠る山
困るのは本家の顔の慶弔費

鳥取市 岸本孝子

気に染まぬ話相槌軽く打つ

原点に立つといつもの山がみえ

いい話年貢の収めどきがきた

幸せの物差し時に狂い出す

大物が欠けて締まらぬ会議室

鳥取市 岸本宏章

大自然こぼれ種にも声をかけ

演奏はいらぬ親父の海ゆかば

ゴミになるチラシ無い日もまた寂し

皺ひとつつくりスランプ切り抜ける

世渡りの軽いジョークも気をつかう

鳥取市 福田登美

空財布年金入れてからの見栄

とまり木で男の夢が雲に乗る

握手して心に石を一つ積む

妥協点下げて孤独の影抜ける

朧月明日は何かがおこりそう

倉吉市 野口節子

心うきうき跳んで見たいな春の音

放られてそれから弾むまりになる

てかてかと飾りましたが逆効果

ナイシヨナイシヨ遊び疲れたとも言えず

その時の汗は言わないお人柄

倉吉市 米田幸子

お許しが出たら一直線に逝く

おふくろを背負う余力を蓄える

産褥の妻がとつても眩しくて

山吹色の光に弱い立ち眩み

目的を果たしてしばむ紙風船

米子市 林荒介

手掴みに出来ぬ故郷の路わらび

白牡丹いまだに母を放さない

新キャベツ新玉葱という私

路の花雪どけ水に濡れている

山ウドの芽出しをじっと待っている

米子市 林瑞枝

権力のナイフがぼろり落ちている

道化を見て愛のモナリザ少し笑み

人影のゆれて城址の遙かなる

切り取り線食み出て一歩また一歩

盲腸の存在感の椅子に居る

米子市 石垣 花子

潮騒の中へすとんと夕陽落ち

急病人にも騒がず母は処置をする

客座敷母も生きいき国訛り

大切な芽ばかり狙うかわい鳥

ノホホンとしてても三度のものは食べ

米子市 政岡 日枝子

春霞おいしい酒によく出合う

風船も野望も風にさらわれる

春の雨いのちがわつと深呼吸吸

耳から入る人の匂いのする噂

仏壇にむかしむかしの音が棲む

米子市 青戸 田鶴

桜咲きひと時不況忘れさせ

山門の仁王さまにも手を合せ

よろこびが持続するよう早く寝る

病室の姉なくさめる山と鳩

齒のかけた戦友会にも父は行く

米子市 木村 富美子

今日出来る約束だけにしておこう

花の宴今年は一人欠けました

まっ白な紙いつわりの絵は画けぬ

履歴書一枚天国へ送る

地雷踏む心配のない国に住む

米子市 田中 亜弥

てのひらの命時々見とどける

僕の掌に夜店のひよこ寝てしまふ

張りあう気はないが花見におしゃれする

クレヨンを折る年頃もあるはずだ

菜の花とやすらぐ春の風の中

米子市 光井 玲子

さくら吹雪花の使命を演じきる

ここに来て二人の地図を塗りかえる

寡果てて本音を晒すピエロなり

現し世は愛ひと筋で生きられぬ

森林浴しばし太陽忘れてた

米子市 茂理 高代

賑やかになって来ました野も山も

冬と春綱引きしてて風邪をひく

芽吹くものみな声かけて散歩する

頼寄せて桜見えろと指をさす

つりがね草逢いたい人に鐘鳴らす

米子市 永井 三津子

見合い早く母が脅迫めいてくる

人一倍苦労知ってるかたい指

ピイヒャララ酔った妻だけ幸の中

宝石は女優しい顔に変え

ああこんな時あったかと孫を抱き

鳥取県 上田 俊路

腕組みの男に桜まだらしい
霧晴れて別れ話が軽くなる

少年の非行の種をテレビまく

昭和の苦労平成にいなされる

人情も霞んで見える失意の日

鳥取県 土橋 螢

いつ死んでもよいいのちが古稀に体あたり

それ以上褒めたら花が散り急ぐ

人間は足の裏からくたびれる

呼び捨てにされる情けに甘んじる

卵巣がいらなくなつてとり外す

鳥取県 土橋 睦子

目覚めたら礼にはじまる灯をとます

経あげて格天井の誇らしさ

仏縁に茶の間静かに通り抜け

雲海が迫る絶景バスの旅

負けそう握り拳がまだ解けぬ

鳥取県 津村 八重子

経を読む亡夫の命日雨しずか

山彦に呼びかけもなく村は過疎

命ある如く溪流岩をかむ

割箸の木の香ただよう宿の朝

祭笛獅子もうかれる音色出す

鳥取県 岩崎 みさ江

号砲が鳴ったか春が駆けて来る

北側の庭に遅れた春を待つ

鼻ピアスした少年の目が淋し

こぶし咲く千手菩薩の掌がほどけ

タンポポの答は風に任せませす

鳥取県 新家 完司

神さまがタクトひと振りさくら咲く

さくら咲く度にいたたく桜風邪

糖尿の疑いがあり桜闇

春霞どこから先があの世界やら

松乃湯の見越しの松も枯れそうだ

鳥取県 鈴木 公弘

欠伸する程度の春がやってきた

さえずって花盗人を見つけられ

本心と違うコーヒー飲むふたり

桜散るやがてとおもう哀しさよ

のこぎりのような刀を提げている

鳥取県 谷口 次男

注意書添えてナイフを売っている

滝壺の底はいつでも七変化

樽酒に湧くが如くに人が群れ

只酒をたら腹飲んで怒り出す

のほほんと生きた親父でもの足りぬ

鳥取県 田村 きみ子

やつと花咲いてくれたね蜜柑の木

神の目を盗んでハエを叩きます

七十の坂にもあつた板挟み

紫陽花寺で茶を戴いてます妻と

夫よりも花を愛して蝶になる

鳥取県 林 露 杖

供華に剪る連翹の黄掌に染みる

数珠一連購い街は花の雨

風もなき無限の落花掌にうける

「嘘ケ」ねえなるほどそれもええですな

八十路二歩登坂の息を深く吸う

鳥取県 乾 隆 風

おぼこ娘のみよちゃん孫を抱いて来た

袴を着せて喋るとポロが出る

また愚痴こぼしすみません如来様

杖ついで行ける尿瓶は止しにする

請け判はせぬが一万円あげる

鳥取県 石谷 美恵子

人間不信桜花の季節に病んでいる

軽がると抱けてさびしい病母の嵩

余命ごと妻に預けてある安堵

救急車送り女の立ち話

生臭い口を拭って写経する

鳥取県 羽津川 公乃

新芽吹くうちの芝生も悪くない

少子化を笑う恋猫朝帰り

野人だが茶道は免許皆伝だ

あの人がこんな小さな箱の中

こだわって玄関跨ぐ癖ひとつ

鳥取県 西原 艶子

町なかの花屋で花の色になる

子がふたりまだ花婿と呼ばれない

花開く日はきつとあるきつとくる

花の季に花を枯らした悔いがある

桜散る花道のように逢いに行く

鳥取県 乾 喜与志

胸に柵しつかり愚痴を飼い馴らす

卒寿まだ祭太鼓に気が逸る

雨も好い風なごやかに花の下

入学式俺もその日が欲しかった

放課後の遊びは米の粉を碾き

鳥取県 幸家 単車

孫達の卒業夢に見て暮らす

潔く引くも男の花道だ

御機嫌が斜めで言葉切り出せぬ

綱を引くその殿に俺が居る

斜めから見ればスマートだと思ふ

鳥取県 西川和子

その上に立てば上しか見えて来ぬ
この柵の中で流れに逆らわぬ

井の蛙違つた井戸に憧れる

お付き合いするのに丁度いい垣根

点滴のように雨だれ吸い込まれ

鳥取県 石尾かつ乃

誘われて桜並木の風に会う

背のびした頃の若さが戻らない

納得のいくまで聞いてきられる

新聞に軽く包んであげる仲

ワンテンポ遅れて孫とする会話

鳥取県 権代康女

記念樹が大事に支柱立ててやる

ふところが楽になつたら世辞も言う

だまつてる方がききめがありそつだ

貧乏と辛抱人を作りあげ

エリートに霞がかかり世が暗い

鳥取県 近藤春恵

年老いた素顔に少し紅が要る

草取りをする老母の背に陽がぬくい

窓際で故郷恋しくなってくる

喪が明けて重い心の窓を開け

連休は隣に負けず派手に出る

松江市 舟木与根一

死んでもいい酒を呑んでるはずがない
花よりは団子留守番申し出る

口喧嘩も阿吽の呼吸五十年

金髪もピアスも自由世紀末

当確になると別人かと思う

松江市 佐野木みえ

哲学の道を娘と行く春一日

浦安の舞に見とれる平安宮

座りだこも辛抱は止しなさい

福袋買って後悔するばかり

コート脱ぎ心も軽く春着選る

松江市 川本 畔

甘酒のとりりと亡母に甘えたし

小さな恋がわたしを光らせる

ポケットに手をつ突っ込んで不意の客

恋人をほどよく料理して眠る

重ね着を脱いでわたしの色になる

出雲市 板垣夢酔

雨宿り飲んでネオンに見送られ

才覚がないから汗にしがみつく

花やいだ昔もあつた粗大ゴミ

我が事の例え話でぎこちない

ネクタイの鎧着闊歩して出社

出雲市 吉岡 きみえ

花ぐもり観光バスは唄で行く
チューリップ一年生だドレミファソ
ポケットへ春をいっぱいふくらます
空高くひばりヒヨロロと唄い出す
四月馬鹿ころりわたしを軽くする

出雲市 岸 桂子

私の音痴を犬は聞いている
松の木が枯れる味方が消えるよう
どか雪も友達だった寒椿
口下手が炎えて思いを語り出す
八分目溢れる事を知っている

出雲市 小玉 満江

カトレアのコサージュ ママは奇麗だよ
お見事と思わず見上げさくら咲く
ギヤル言葉ばあちゃんが言い笑われる
わだかまり溶けぬ絵の具を持って余す
嬉しくて口笛も出る花の午後

出雲市 富田 蘭水

ハイハイの子に魂を見すかさず
一冬を狂った海が嘘のよう
恨むなんて貧しい事と知りながら
一物が溶けない胸のコップ酒
いい雨とうかつにほめた酸性雨

出雲市 小白金 房子

水門を上げて農耕春を呑む
桜百選見事に春を演じ切る(木次主手)
野いちごが届くふる里甘い風
帯といて農婦に戻る安堵感
婚近い娘に春の彩を選ぶ

出雲市 石倉 芙佐子

くるつと背を向いて何だか悪女めく
悪女いま一本の蠟燭つけている
目の鱗ほろりと落ちてまだ悪女
櫛ひとつ口に銜えて絵の中に
火の酒が女を殺す花の乱

島根県 松本文子

いつかのように黙ってお茶をのんでいる
哀しみの欄一行で済まされる
一族で見送りそしてちりぢりに
年のせいにしないで心の破れなど
親戚が集ってくる病院に

島根県 小砂 白汀

五六鉢飛ばして去ったエルニーニョ
メロディーも変り果てたるさくら咲く
はいはいはいアメリカさんならはいはいはい
松ぼっくりごろんとありぬ雨あがり
すくすくと育った息子に骨がない

島根県 柳原秀子

明石大橋無事渡つたとはずむ声
花ぐもり何の便りもまだ来ない
おぼろ月花もおぼろにつつましい
菜の花へ今年は蝶をまだ見ない
近道をゆきたいという人送る

島根県 堀江正朗

夢積んで崩して積んで夢に生き
ああ眠い眠くないのに何故眠い
山鶯聞こえ盃そつと置く
まなうらの桜実物よりよろし
百面相しても鏡に顔が無い

島根県 堀江芳子

真言と歩いて嬉し桜土手
戦盲の夫と心で見る桜
ダスキンは春の埃を吸いたがり
お互いの胸読み合って読み合って
正直な鏡に朝の髪を梳く

島根県 伊藤寿美

わたしの好きな曲を知ってる珈琲店
語り部に六月が来る摩文仁丘
兵馬俑展ニポポ人形重ね見る
露の茶屋大正ロマン仄昏い(津和野の旅)
反戦も不倫も唱うコンサート

島根県 藤原鈴江

老春を謳歌までとはいかないが
夜の日ざめ過去振り返り振り返り
神様にあれもこれもと願かけて
いつまでも若いと思っていた不覚
我が余生納得しきれぬまま生きる

香川県 木村あきら

此の頃の貯金サツパリ子を産まぬ
ストレスも一緒に入れて洗濯機
四割減反農家は何を食えと言う
緞帳の下りてくるまで夢を追う
賞味期限切れた女はやかましい

香川県 工藤吟笑

民主主義ムチは生徒の方が持ち
鍬を持つ手に学歴が邪魔になる
黒いから何時もカラスは損をする
切り札を持ってゆうゆう家を出る
逆転を企んでゐる亀の甲

香川県 川崎ひかり

いつからか嫁に移ったサーブ権
満開の桜語らぬたえた冬
手を合わせお願いしてる欲の種
風ひとつおこさず散ってゆく桜
関の声聞こえてきそう大手門

義齒磨く夫婦揃って夕餉どき

香川県 成重放任

朧月愛を語るはチト寒い

花冷えが忘れた風邪をよびもどし

一時間待って四分乗るデイズニー

草分けの人とは知らず見得を切る

香川県 山地マツエ

淋しくてやさしい鬼と手を結ぶ

妬かないであの人同じ趣味仲間

紙雛を折れば聞こえるわらべ唄

流れ星亡母の命が流される

手さぐりで渡る夫婦の命綱

香川県 池内かおり

打ち解けて口角泡を飛ばす仲

せんせいの先生も来た後援会

手錠の切れの悪さよ今日も雨

褒められた灰皿その方の為に

どの辺で歩幅狂った元夫婦

松山市 宮尾みのり

肩を貸すただそれだけに要る勇氣

借る時は返す苦勞を考えず

タレント本の部数へ作家羨まし

B面の方でいきいき天の邪鬼

日暮しや和顔愛語のひとりごと

今治市 越智一水

肩の力抜いて素直なことが言え

一期一会出合い宝のよう思い

潮風へわかめを干せば海光る

環境ホルモンあゝ人類はどこへ行く

今治市 矢野佳雲

俺の脇で眠りこけてる眠り姫

プランコの余韻ゆらゆら暮れ残る

双方が振った気橋ですれ違い

どうせ出ぬ芽なら賭けよう反主流

恵まれてお玉ジャクシに足が生え

今治市 野村京子

さくら咲く甘えて見たい人がいる

おんな対おんな炎の綱引きよ

オチのない落語でおわる父である

割れるかも知れぬ仮面をつけて出る

花だより詩人の骨を抜きにくる

高知県 小澤幸泉

さなぎからかえる娘の遅い春

もういいでしょう人生ドラマあと五分

絵にならぬ後の世さがす老いの旅

帳尻が合うたそろそろ定年だ
コースから少し外れてみたくなり

師と歩く亡夫と歩いた桜の道
高知県 赤川菊野

地底から春の大鼓の音がする
一人でも炊事洗濯日々多忙
詮索の好きな女の紅い口
朝ドラに合せ掃除もそこそこに

北九州市 梅田宣司

人生がそれぞれあつた墓並ぶ
そういえば我が家無沙汰の水枕
二人三脚紐に気付かぬこともある
その時は応援しますそれっきり
ライブルにニトロの話伏せておく

唐津市 田口虹汀

なんとなく親にやさしい遅咲きよ
咲くまでは目に這入っても痛くない
咲き急ぐほどの時世じゃないようだ
懐は寒いが桜花は暖かい
熱い灸すえて長生きしています

唐津市 久保正剣

からつきし世情に疎い正一位
素朴さが身上と知る人形劇
ノーパンシヤブシヤブもつと怒れよ納税者
年金に為替変動ない安堵
ノースリーブ暫く白い腕で魅せ

唐津市 仁部四郎

酒煙草止めてみようか国の為
古傷も挺子になるよと向かい風
賃上げができて社長も椅子がある
リストラのゴールで蟻が間引きされ
学校に凝った仕掛けは要らぬはず

唐津市 山口高明

倅せの鍵を握って居る貴方
檻の中猿も真似するVサイン
太閤の偉業一日観^光て回る
勉学の部屋に鍵など要らぬはず
ひと一人殺して何処が普通の子

唐津市 山門幸夫

古都の春御所の古式を目のあたり
紅しだれ平安の空いや青く
花吹雪こぼれて埋まる高瀬舟
罪と罰ポトリポトリとチリ椿
萩の寺戦友の顔あり杖を引き

唐津市 山門タミ

ウグイスの笹鳴き仏間開けて聞く
人生のかくし味なり老いの皺
桜咲く来年もまた孫が咲く
亡母の数珠共に詣でる本願寺
お浄土も満開ですか亡母の忌よ

子の巢立ち見届け母の旅鞆

唐津市 市丸晴翠

サクラサク親子離れへ歩き出す

派手な色まとい老いの身ときめかす

接待の海に溺れて横車

繕った堪忍袋また破る

熊本市 永田俊子

上ばかり見てきた足が弱り出し

子供らがお利口すぎる万愚節

自信ないうしろ姿のまま終る

世話好きがちゃんと持つてる守備範囲

九回の裏まで財産渡されぬ

熊本市 岩切康子

鶯の声に目覚める嬉しい日

お話に乗って行き着く温泉地

獅子の愛学んで欲しい人の親

晴れ舞台静かに支える黒子たち

新漬にお替りをする似た夫婦

熊本市 高野宵草

庶民われバック刺身で酎をのむ

嘘だらう役場が僕に古稀という

ママが居ておふくろが居ぬPTA

子を想う妻に敵わぬ父であり

まだ眠い蚊が掃除機に吸いこまれ

テーブルの上だけにある爺の時

弘前市 蒔苗果林

筆ペンに濃淡ねだる無理励み

枕ほど厚い字典の字と遊び

梵鐘の余韻のような宵瀬の音

弘前市 相馬銀波

この夏も真夏日欲しい北の稲

無駄に汗流すか胡瓜よく曲り

度忘れのあれもこれもと前後する

採決の時は踏絵をいとわない

新券をばりばり入れるお年玉

春の土雪をぐいぐい飲んでゆく

すいすいと二列縦隊赤とんぼ

ポーポーと古切符から汽車の音

弘前市 中山雅城

万札を入れて背広が軽くなる

焼芋がいつも笑いの使者になる

買った方が安いですよと修理工

人助けした実印がよく眠る

十和田市 阿部進

笑顔にて旅立つ孫を送り出し

豊かな世失せてしまった助け合い

励ましの言葉たまわる豊明殿

怖いのは前の敵より後ろの味方

横浜市 清水 潮華

行きずりの約束花の種とどく
だぶだぶのズボンで太い脚かくす
置き忘れ傘が終日うつにする

春寒に秋の旅行の誘い来る

横浜市 後藤 早智

水仙が咲き続けている廃校舎

若い葉に押しされ桜が散り急ぐ

桜にも結婚記念日祝われる

辞令手に子の転校を考える

京都市 大河 未佐子

これでもかこれが浪花の通り抜け

山水に枝垂れる京のさくらどす

乾杯にワインカラーのチューリップ

トーストが噛めて入歯の治療すみ

京都市 稲葉 冬葉

野暮はやボでも一筋のお人柄

血の通う学習孫も素直なり

即キレル人間にもやさし夏の海

ギャラ抜きのゴルフカメラを遠ざける

大阪市 稲本 凡子

変化球投げているのに妻は無視

曾孫来るうれしもう帰る尚うれし

空っぽの頭へ英断迫られる

椿落つ恋の重みに耐えかねて

大阪市 藤田 頂留子

苦手かと聞けばいきなり怖い顔
うぬぼれの一つが私を誘い出す
若葉の芽見とどけふぶく桜花

また一つ昔が消えるブルドーザー

大阪市 清水 利武

弓削の山今年も句碑に会いにゆく

スーパ―に年中並ぶ初鱈

マンションの窓に飽いてる鯉轢

禅修行肩に厳しい愛の鞭

大阪市 町田 達子

壊れた像に何か魅力を立ち止る(シバ女王)

注文のモカに昔がちと騒ぐ

源氏の君 明石上もファンタジー(明石海峡大橋)

久女の句を成程と読み通り抜け

大阪市 寺井 東雲

福の神通る花道あけてある

うかつにもタクシーに乗り財布ない

空に咲く大きな口を開けて見る

悔しいが昨日の負けは今の糧

大阪市 中田 あい子

春日和母おなじことくり返す

カラオケが遍路宿から春の宵

お下がりをセンスよく着る末娘

母よりの荷物の隙間うめる豆

信心は大楠木の胴回り

生命線途切れたままで生きてます

合併で格下げが待つ不況風

ウォークマン心も体も軽々と

大阪市 小糸 昭子

陽春の空へ大きく汽笛なる

えらぶるも女は裏の域を出す

舞妓の香花咲く如く今盛り

葉桜の光の中に退院す

大阪市 奥田 良子

夫婦してポックリ寺の酒を飲む

“モガ”だった亡母へ墓前の花を選ぶ

亡母の文セピア色が元氣出る

ありがとう柩のははに紅を引く

大阪市 川久保 睦子

偉大なる明治の母も生を終え

春の夕蔭に筍豆ごはん

老い二人今が一番しあわせか

れんぎょうの黄金に光る雨上り

大阪市 黒崎 恭子

醍醐寺のしだれ桜に絶句する

在りし母玉虫色の虹の中

人恋うる有為転変の波の果て

雲海に桜みっちり津山城

大阪市 田中 節子

世話好きの我が家は何時も店屋物

指定席なのに乗車を競い合う

雪山は大事な友を返さない

嫁ぐ日の別れの庭は雪化粧

豊中市 松岡 久留美

肥後守より有為転変のバタフライ

卒業式日の丸賛否春一番

少年は何も語らず証書丸め

ばあちゃんはまさかに慣れて鉦叩く

豊中市 湯浅 馬洗

ティッシュ配りオジン族には目もくれず

ドンファンとの真似はあなたに出来はせぬ

水中花すっかり妻の愚痴を聞く

柘榴石の指輪が似合う粹な女

池田市 藤井 計光

札束を積まれあつさり節を曲げ

表には出せぬ話に金が要り

誕生日いのちしんみりかみしめる

二次会を断わり帰宅妻は留守

箕面市 椎江 清芳

ビッグバン経済誌読む付焼刃

擦り切れた幕もあがれば華やかな

綻びを繕う針のひどい錆

指運動老化へちぎり絵を始め

吹田市 茂見 よ志子

昇進の部下を見送る窓の席

茨木市 堀 良江

衿足の深さ思わず振りかえる

親戚で長老となり威儀正す
生き抜いて浪速の五輪生で見る

寢屋川市 酒井 勇太朗

長雨に昼のビル街灯をともし
花散らし雨新緑に塗り替える

上達をあきらめてから上手くなり
事故現場人生観を変えさせる

茨木市 島 元ふみ

八十の晩酌今更休肝日

正論が夢みた席にすわれぬ靴
靴みがく妻はなんにも言わぬまま

枚方市 二宮 山久

やる気大事に温めている昨日今日

桜舞うただそれだけの花見かな

老春に横槍子から近所から

今日生きて明日へたしか靴みがく

一年ごとに花見る思い深くなり

花遍路九十五歳の玉青画

守口市 石 森利昭

交野市 山川 日出子

友人の噂聞いている花だより

絵手紙が孫から来た日ルンルン

美しい嘘を聞いている花庭

腰痛も三步進んで二歩下がる

役者より裏方が好き芝居好き

春バーゲン秋を待ってるカーディガン

森で聞く水の流れの心地よさ

十分の違いで階下の時計鳴る

寢屋川市 坂 上高栄

東大阪市 安 永暁子

お迎えのない子見守る昼の月

女王のように芍薬さまになり

握り潰すに力はいらぬ袖の下

花吹ぶき流されまいと手をつなぐ

握り屋のあつと驚く義援金

練乳をかけて差し出す春苺

コマーシャルほどの息抜きハイキング

お茶碗の丸味がうちの家風なり

寢屋川市 籠 島 恵子

松原市 小 池 しげお

意志薄弱なんだか変に透きとおる

前例がないから石を投げてみる

もつと気になる事が今年の桜かな

信号が青まで待てるうれしい日

悪口は言えませぬと遠い耳

貰われていった小犬へ書く便り

風向きがホラ変つてる春ですな

藤井寺市 高田 美代子

いい事があつた靴音だとわかり

おところにも男やめたい時があり

目刺し焼く佗しくなんかありませぬ

不機嫌を曳きずつたまま雨季に入る

紫の蛇の目が似合う京訛り 藤井寺市 中島 志洋

ピエロ役勤める平の下心

野次馬をがっかりさせた仲直り

人前は夫唱婦隨の振りをする

羽曳野市 酒井 一壺

陳列に飾ってあつてだまされる

夫には見せぬ化粧の參觀日

途中まで送って行つて話しく

駅までの送り迎えの免許取り

八尾市 高杉 千歩

独身と分かる気ままな洗濯機

雨宿りの椅子で景気を占われ

身の上ばなし佳境 雨が止んでいる

二人して遊ぶ余生の放し飼ひ

貝塚市 池田 寿美子

海峽を染める夕陽にあすがある

生かされてみやこ忘れは紫に

ナレーションがヒーんとこたえる春の宵

新名所ほとばり覚めて訪ねよう

河内長野市 井上 喜醉

島国は高い橋より船の旅

友情を確かめ過ぎた花見酒

鯉のぼり祝う我が家は豆ご飯

肩が凝る電話へクシャミ一つ入れ

大阪府 榎山 隆盛

梅雨らしくつゆに見合つた旅を組む

列島に二男三女孫十人

火種抱く異常乾燥下のふたり

甘くみた酒で踏んだり蹴つたりだ

奈良市 宮口 笛生

何の花かあの世の夢に狂い咲き

満開の下をゆっくりゆっくり歩く

さくら咲く風邪もすつかり治つたり

春うれし明日花見の約束す

大和高田市 岸本 豊平次

葉の数減つて気になる不安症

本名と雅号で暇なく過ごして

散歩する小川に啄む番鴨

彼岸すぎ寒さも消えて花吹雪

和歌山市 山口 三千子

親と子の視野が大きくずれていく

シナリオにない伏兵が待つていた

辞書を引く老眼鏡と虫眼鏡

ぼそぼそと回り続ける夫婦独楽

和歌山市 榎原公子

西宮市 刈田泰司

沸点でたぎる女のティーポット
反転をしながら私を浄化する
音消してすももももも花ざかり
一号の値を聞いて出る絵画展

恩師とも言われ綽名ででも呼ばれ
恩一つ売った記憶が顔を出す
光琳の梅に逢いたくなる二月
雪吊りが客待ちをする北の宿

和歌山市 山根めぐみ

芦屋市 水田民平

サクラサク生命丸ごと踊り出す
夢を追う生命の彩はラムネ色
タイタニック心まるまる奪われる
引き際がきれい吊り橋ゆれさせぬ

生き易いように矢印変えてみる
ちびててもまだまだ未練残る靴
虎の子が行き場に迷うビッグバン
週末は鬱が屋台に並びはる

神戸市 池田善守

兵庫県 井上信子

定年後妻への借りを返す日々
珍客に仏もとまどう善光寺
ゆっくりと渡る老女をみるダンブ
珍プレイ好プレイとは紙一重

ホテルでの朝の会話は失敗談
一泊のホテルで手持ちぶさたです
どこの地も観光名所の似た土産
競争がなかった頃の子は強し

西宮市 牧 渕 富喜子

兵庫県 大谷幸次郎

痛みとは生きてる証靴をはく
あと何度見られるナンテさくら咲く
すり切れたコートいちばん合うと言っ
今年またさくらを見せた車椅子

登りつめ裾野霞んで見えもせず
春霞肩にくいこむ入学金
葬式の献立にみる今昔
配られた旗で万歳して帰る

西宮市 久保まさお

岡山市 小林妻子

津門川の鴨と鷺消え桜散る
鴨二羽がつかいとなって消えてゆく
転んでも四囲見はるかす寒椿
雨も良し日照りもよしと傘一本

多数決が一番いいと思わない
反古になる証券を焼く悔しさと
我が身の蠅も追えず東奔西走し
五月病ちらり不況の風の中

岡山県 江口 有一朗
障害者の神技胸打つバラリンピック
我動く故に我あり独り住む

少し哀しい涙を月に拭われる
雷おやし消えて非行の子が増える

岡山県 福原 悦子

この道は母も歩んだことだろう

裏道に義理人情が吹き溜まる

決断の影が大きくなるばかり

寝たきりになっても財布忘れない

岡山県 大石 あすなろ

花有情風のささやき聞きわける

自画像が笑い出してる二重あご

曇りのち晴れを信じて七坂を

梵鐘の一打が許す今日の罪

甘日市 林 野 甦 光

追伸で言い過ぎたとこ詫びておき

岐路に来て暖かそうな道を選び

おせっかい人のネクタイ締め直し

有り余る時間で女の手がきれい

竹原市 時 広 一 路

てのひらに一粒そつと落ちた雨

休むより歩け歩けでする充電

おおらかに風の気儘を許す雲

大いなる宇宙の一人だな僕も

鳥取市 春木 圭一郎
気まぐれな男に女ほれている
気まぐれに書いたエッセー本になる

気まぐれに誘ったひとがついて来る
気まぐれな恋から夢があふれ出す

鳥取市 岩原 喬水

健康法病気になつて考える

プライドと見栄が財布に無理させる

男なら必ず貸した金返せ

弔辞では努力の人にして送り

鳥取市 杉本 孝男

程々のショックも生きる薬だよ

もう泣くな亡母は泣いても帰らない

日記には書くだろきつと今年こそ

泣き笑いた坂道を振り返る

鳥取市 倉益 一 瑤

幾山河あうんで越えた夫婦です

着地点きつとあなたの胸です

百ヶ日どの辺ですか姑の旅

ほうれん草よポパイの腕が子に欲しい

鳥取市 石上 悦子

春一番視線をもらう木瓜の花

木蓮は春を知らせる白い鳩

自販機に口数負ける店主です

ゴミ袋ふくらしやつれさす地球

倉吉市 磨り硝子の向こうに二人置いて来る
松本 よしえ

花ぐもり山が優雅に横たわる
爺さまがシャツの釦を付けている
点線を急いで切れば請求書

倉吉市 最上和枝

不器用な柵で優しさには溶ける
桜にも礼儀葉の出ぬうちに咲く
プライドが偽のダイヤを許さない
つくしんぼ小ちやい春を連れて来た

倉吉市 淡路ゆり子

松葉杖散歩も慣れた朝の風
病室のテレビにお金しぼられる
さくらははらはら今年も花見出来なんだ
ジーパンの裾を継ぎ足す子の背丈

倉吉市 山本玲子

露のとう姉さんかぶり頬かぶり
一握りの米は軽いか農継がぬ
乗せられて気分よろしくVサイン
母の日に足音高くカーネーション

米子市 白根ふみ

エリートはひとりもない花の下
正義感なだめなだめて楽にする
おき菜ぐらいな風邪で春になる
みんな女王でやがてボタンも散り初める

米子市 木村春枝
若い芽をぐっと添え木は見守って
夢を抱き胞子したたか飛んでいく
バス停に人の噂の一しきり

本物の思い待つほどのり出す

米子市 本吉宗光

花たたくエープリルフル強い雨
訪ねたいお光吾作の佐渡の島
少年法なぜアメリカを真似られぬ
寡婦を訪う春のネクタイ締め直す

鳥取県 土橋はるお

布団干すのに丁度よいフェンスです
いい妻をそのままコピーした娘
四季薫る町のワインはおいしいな
ちっぽけな事を考えすぎてたな

鳥取県 太田幸枝

立つだけで拍手喝采される孫
一つ違いの姉女房が尻にひく
どん底の不景気バネに奮い立つ
親しいが三ツ指ついて夫送る

鳥取県 さえきやえ

杖のころんだ方へ遊びにいつてくる
一が抜け二が抜けみんな他人顔
去年見た二人の花を一人見る
切ることの出来ぬ縁にしばられる

鳥取県 橋本多哥由
楽な道とおれば裏に罫が待つ
失敗をする人が好き握手する

明日という知らぬ世界を頼りにす
願いごとかない神には礼をいう

鳥取県 国森武子

礼儀などどこ吹く風と子ら育ち

初孫が立った歩いた赤飯だ

机より炬燵が便利祖母と孫

にこにこしてゐるあの子も本音持ち

鳥取県 黒田くに子

ときめきをしずめ手紙の封を切る

崖に咲くとどかぬ花が美しい

ほめ言葉一つ生き生きしてきたぞ

泥んこへ生き生きしてゐる子の手足

鳥取県 山本正光

大過なく今日まで生きて只感謝

かんぬきを外すと身体軽くなる

底抜けに明るい人と旅したい

踏ん張りの利かぬ男が枯れてゆく

松江市 安食友子

生剥げを見るちびっ子の自尊心

介護の手夫の涙で奮い立つ

狒犬をあくだいほどに撫で回す

陽気さを殊更見せる太郎冠者

松江 浦辺静江
ジョギングの後追い越せぬ万歩計
お互いに心開いて抹茶飲む

幼子のお口訛りがあいらしい
春風がやさしい香り連れて来た

出雲市 久谷まこと

うっかりとしていましたで事が済み

義理固い事で煙たい目で見られ

ほどほどで波風立てぬ暮らし向き

稗尊の指す天界に濁り水

鳥根県 森茂美

色褪せた糸でつないでいる夫婦

苗木市花のついてる方を買う

囀りが空の深さへ吸いこまれ

豆の蔓今日の天気を探り合い

高知県 北川竹萌

孝行柱始祖懐に來る花見

九十二の祖母ホスピスの人間味

孫の旅本場キムチの土産物

棚の物取る踏み台の火消壺

水 煙 抄 (追加)

生駒市 半澤無眼子

天無空咀嚼しきれぬ総入歯

五濁悪世神は頻りに篩かけ

自選集

藤村 女

迂り台小さな権利主張する
砂場から小さなめ事持つて来る
嬰兒の言葉一つつふえ風薫る
見入る子にわれもたたずむ蟻の列
かたつむり逃げも隠れもせずにはう

遠山 可住

ひと言のお世辞が言えず隅に居る
裏ばなし聞くとあいつもただのやつ
晩霜の子報へ父が起きてゆく
節約の知恵を忘れてからの老い
暖冬へ咲いた迂闊が笑えない

野村 太茂津

不況だというから不況だと思ふ
袖の下俺も貰うた桁違う
老耄れて呆けても疼く袖の下
津軽三味響く竹山もう聞けぬ
地唄舞い心に影だけ映る

藤井 明朗

寅年の景気を国民あきらめず
第二の人生行く道は赤信号
幸せは医師もゆるした旅靴
子の部屋秘密を親は感知せず
連休の旅終え無事を乾杯す

正本 水客

全力投球高校野球も桜も咲きおわる
思いがけぬ人から温い葉書が来
風向きがかわらぬうちに握手する
ためらいを見ていたように電話くる
ゆとりある暮しと高級官僚思つてず

月原 宵明

手袋の片方貰う野の地藏
卑怯だが忘却と言う方を撰る
橋架かり家業を捨てて人があり
イロハから忘れた姓を思い出す
ライバルと握手を交わす車椅子

金井文秋

万歩計やさしい春の陽を貰う
補聴器の耳にも届く春の音
病氣せぬから年金で事が足り
九十まで持つ身体だと決めている
脳の老化を思いたくない趣味を持つ

小西雄々

豊かさを見せず善人風を読む
耳底に昨今父の咳ひとつ
ほのぼのとできず妬心が追うてくる
悪魔とも二三度遊び酌み交わす
遊ぶ暇ないと言わせぬ縄のれん

黒川紫香

気がつけば周りは下の歳ばかり
考えるふりも小鳥に真似られる
またデートふられてしもた午後の雨
灰皿のない応接で待たされる
景気よく迎えたいのは新世紀

小林由多香

エルニーニョ花のいのちも狂わせる
一票差だけの多数に押し切られ
花ことは純潔そえてバラ贈る
赤飯の色華やかに和やかに
ちちははの面影かすみ孫ひまご

辻白溪子

読みにくい字がかけてある寺の軸
花好きの性が余生の趣味となる
高架下の暮しが好きでおでん売る
お互いの財布を当てに梯子酒
自販機の酒買う背中叩かれる

波多野五楽庵

門を出て一人ぼっちの赤い傘
みんな捨てみんな拾って孤独なり
極点も奈落も知って病み続け
生きてこの煩わしさを如何にせん
溜息の一つが妻を曇らせる

西田柳宏子

欲ばった魚眼レンズが歪んでる
素浪人ですと肩書ない名刺
偉大な足跡歩幅真似られず
江戸前の寿司より老母の祭りずし
キレた子の気持知ってたのはナイフ

野田素身郎

休日を見越したように母は逝き(三月二十八日)
百歳が間近い母が逝った春
花冷えに何遍目かの風邪をひき
足弱の僕には行けない花便り
かつての部下も次々定年きて辞める

松川杜的

矢印の路地にもサクラ散つて来る
狙の凹みは私の味方です
ここ三年ネクタイした事が無い
年金のハナシは止そうサクラ咲く
扇骨を干して湖国を春にする

奥谷弘朗

血の通う言葉一つに心満つ
素直には満足させぬ腹の虫
手作りでないとやっぱり味がない
執念が路傍の石にしておかず
メンバーに利口も馬鹿もいて楽し

阿萬萬的

妥協癖結局損な役がつく
阿呆になることも覚えた八十路坂
下手な洒落矢鱈に耳がかゆくなる
持ち時間を惰性のむしが食いつぶす
酔うて来て人間臭い愚痴こぼす

恒松町紅

伊達に年取らぬと知恵を自慢する
十指みな老いを忘れた時間帯
嫁ぐ日へ孫馬鹿がまた弾ませる
幸せな形を皿に盛りつける
年の功などとすっかり有頂天

高杉鬼遊

西行とおなじ想いや花の下
選挙より大事な政治忘れられ
先に来た料理をみなに眺められ
周辺事情の袋の中で恋しはむ
遣句集の増えて書棚の薄冥し

八木千代

わたくしの老いに少しの化けの皮
絶対を生えてはこない奥歯抜く
仮歯してやっとなと凌いでいるこの世
おとといの鬱をするりと脱ぎ棄てる
新しい皮膚 傷口の仏さま

河内天笑

ひと月で2キロにんまり腹さする
流行は気にせんでよい腹まわり
ふたりして梅の毛虫を手で潰し
赤信号あれあれ母娘渡りだし
あの世にはレディファーストとは行かず

橘高薫風

あじさい忌湖一つ持つ人と
鯉のぼり囿囿の身の置きどころ
なつかしや友七十の丈くらべ(同窓会)
今朝会うた南無帰依仏の白い蝶(悼中野樺子さん)
来し方や合縁奇縁相半ば

今野空白

東野大八

本名宏・一九二三(大正十二)年4月23日

台湾台東区大武生れ。生家が朝鮮の仁川に移住したため、仁川府の小中学校を卒業。京城帝国大学予科から同医学部二年在学中に終戦となり、一家は朝鮮よりの引揚者として帰国後、東北大学に転入学。昭和23年卒後武藤外科専攻。秋田・岩手・宮城・福島各県の各病院で勤務後、現住地の町立病院に移り、昭和44年福島県相馬郡小高町で個人病院開業。医学博士・ロータリアン。

以上は昭和61年刊の「現代川柳のサムシング」(B6判150頁)の巻末に付された著者略歴である。

彼との初対面は、昭和51年福島県土湯温泉で開かれた第13回大陸川柳同窓会の同地の朝であった。渡辺蓮夫川柳研究主幹に同行した

筆者を彼の運転であちこち案内して貰ったのが縁の端であった。

道中いろんな話はずんだがその会話から「柳号空白―すなわち、こんのくうはく」とは少々変ってますな。柳号はどういう意味？」

「各公文書の末尾に以下余白の判がよくついていますな、あの余白からのアイデアです。台湾生れを皮切りに朝鮮各地をうろついた挙句、この東北地方でも各地を放浪、おれの人

生は余白むきの、イミもない代物ですよ」

と答えてくれたのが印象に残っている。どこかインテリ崩れの放浪人生か。その後、宮島での大陸同窓会でも再会したが、妙に好人物の癖に一風変わった偏屈者と断じていた次第である。こうした縁でさきの「現代川柳の

サムシング」という美本が刊行された際、いち早く惠贈して貰った。以下はこの本のあとがきより抄録。

「川柳の大衆」―或いは逆説的に―と言うテーマで、川柳を取り巻く連中、所謂庶民とか大衆とか連衆の姿を浮彫りにしようとした。書いて行く途中で、これはとんでもないテーマである事に気付いた。鈍頭である。

人類文化史や、文化人類学の範疇に属するものに向って、竹槍で対抗するの愚であった。

愚や愚や汝を如何にせん。それでも診療の片手間に書いたところだが、どっこいヤブ医の上に気分屋では、時折診療をぶん投げて書く事もあった。それでもこの低度で、従って川・診画面何れもワグツが上がらない。

そこで方向転換(?)せざるを得なくなつて現代川柳の目指しているもの、現在の姿にすれば、まあ、何とか手に負えそう。ましてそろそろ養痾園の入園手続を考えねばならぬ年頃になつて来た。門限もあるだろうから、暗くならぬ中に済ませたい。こんなことを考えていた丁度その頃「三太郎のサムシング」に関する片柳哲郎の論文を見た。先人、先輩たちが求め得なかつたもの、また拓かずに遺してくれたもの。その何ものか(サムシング)長いので以下失礼して端折るが、彼は伝統

の古川柳の中の伝承し、培われてきたものを最も根強いテーマとしよつと、当初取り組みはじめたらしい。それは「二頁ほどのあとがきを味読すればよくわかつてくる。いわば、サムシクなる大いなる拡がりに逃げを打ったわけだ。

この贈与を受けた本のシオリの残片に「晒存」と銘打たれていた。この字句の解釈は「あざわらつて残せ」と意味になり、あとがきの中にも「啐啄」の文字がみえる。つまりらんことをつつきからかすとの意味である。

そこで筆者は

「さすがは放浪の医博、才氣縦横、博覧強記の労作なり、名著なり」と心から賞めておいたが内心、古川柳の入念な啐啄ぶりには正直感じ入った次第である。

空白は、この柳界切つての労作と処女句集『迷子の影』（昭38刊）を残し平成九年十月一日自宅で診療中内臓疾患により忽然と死去した。享年75。杏林院博仁宏照居士が法名。

福島県川柳連盟会長で、福島県川柳賞も受賞。その三日前に開かれた川柳宮城野社創立五十周年記念東北川柳大会に選者として出席したばかりで、その遺句と見られる句は

おお、ゴッドゆつくり床ペドに入りませす 空白
であった。

空白が有力同人だった「川柳杜人」通巻一七六号（昭22創刊）は「今野空白追悼号」であった。彼を知る多くの柳友からの弔句や悼文が誌上を賑やかに埋めている。

昭和33年5月4日、東京大塚駅前、西村百貨店会場で、前日初めてこの作家と対面し名刺を交換したのであった。（中略）空白35歳、哲郎33歳の夢溢れるときであった。今野氏は勤務地の本宮病院から小高町診療所に栄転されたばかりの時であったが、その講演の論旨は整然たるものであった。

「原則として人間を主題とする十七音律の定型詩」三太郎。「川柳は人間である」紋太。

「人間陶冶の詩」路郎。「人間批判の詩」水府等々の先輩作家の主題を冒頭にあげて、川柳が「人間の短詩」であることの共通性からどんな行き方の川柳であっても、いわゆる川柳の三要素のみで事足りるものではないことを説いた。この時代があげた参考文献は十指に余るもので、特に当時の川柳家が名も知らぬ頼原退蔵の「俳句周辺」なども参照して

「滑稽性・諷刺性が川柳本来の特性とすべきではなく、川柳の文芸的特性は一句立の附句たるところに求められるべきだ」と述べ、三要素以外の特性を求められたのである。実はこの年、空白氏は中絶した「杜人」の新生第

一号に「世界に通じるコスモポリタンのな、バックボーンを持った川柳でありたい」と書いている。（中略）

昭和38年発行の処女句集『迷子の影』で笑う時の汝の犬歯に吾は死なんよ 空白
について三太郎の序文には

「今野君の句柄は無残に十七音を踏みにじっている。そして近代感覚の鋭さを見せている。これは新しい姿である」と書かれていたが、事実空白氏は、当時の六

大家が共通して固守する古いメトロノームを踏み壊して見せたのであった。氏は心象の機能に大きな荷重を載せ、その機能の障害となる音楽性も確実に、また故意に破壊して行き詠うことから描くことに、更に描くことから川柳を書くものであることへの活動の思考を進めて居られたように思われる」（片柳哲郎 悼文）

右の記事こそ空白をよく描き切っていると考える点で、本追悼号の白眉であろう。

何処で飲んでいるのか俺の影がない 空白
ラッパ手の手の中に居ても尚も吹く 〃
乞食夕べにひとり猫焼く 〃
木枯の川耳だけが泳いでいる 〃

▼次号は「中尾 藻介」

『山王祭』

清 博 美

隔年の六月十五日に行われる永田馬場日吉山王権現社の山王祭は、神明明神社の神田祭とともに天下祭とも言われ、いやでも江戸っ子の血を湧かさずにはおかない、もつとも盛大な祭であった。

そして日吉山王権現社は、將軍家の氏神でもあったから、ちやき／＼の下町の神田祭に對して、全てに時代がかった祭でもあった。

『続江戸砂子』には、「江都第一の大祭り。神輿の通筋往來を禁ス。町屋棧敷かゝる。但し二階棧敷禁止也。幕毛毳さらびやかにして、脇小路／＼は矢來にて仕切れり。桜田辺の大名がたより神馬をひかれ、あるひは長柄の供奉、御町与力同心供奉あり。神輿三社、獅子かしら、別当神王衆徒十騎(俗に法師武者と云、各よろひを着し馬上)先年は、だし屋桝ね

り物あり近年はだし斗、番數四十六番、町數凡百三十余町也。一の鳥居の前へ詰る。祭礼道筋は星野山より麴町半蔵御門へ入、吹上、竹橋御門、大下馬より常盤橋へ出本町、十間店、本石町、鉄砲町、小網町、靈岸橋を過、茅場町。

○御旅所にて奉幣あり。それより日本橋道町筋、姫御門に入て霞が関、御山に還輿也」とあつて、町人のみならず大名までが関与したことを記し、その規模の大きさを示している。

また、『麴街略誌稿』は、「山王祭の年には、十日より、幟、提灯を出し、同日、山王神領十州多摩都堀の内より櫛を引き出しぬ。是は、麴町鳶の者、途中車に乗せ、山王御用と云ふ札を建て、木遣りで引る例なり。山王の同心も附添、一町毎に家主送りにて山王へ納む。五丁目柵屋にて中食のこと。○十三日、

町内廻りとして、出番の笠鉾が組合の町々三四箇町を廻る。是れは、其町の鳶の者、木遣にて荷ひ、居付地主の前にて手打などありたり。○十四日は麴町揃とて、出番の笠鉾六本、早朝より一丁目御堀端へ揃ひ、夫より麴町中ねり歩行、喰違の外紀州公の御館にて御上覽あり。故に十三日より、家々幕を張り、屏風、毛氈をしき、客を招きて、其繁華なる事、実に麴町の大盛事と云ふべし。祭礼の休年には、十一日より、幟、提灯を出し、自身番には笠鉾の人形を飾ることなり。三丁目の猿と山元町の猿田彦は、山田三輪の作也。山王の社にて、七五三の祝参りに、木にて小さき猿の手遊を、守として求むる事なりしと云ふ」と、祭礼前の支度の模様なども記されている。

なお、『守貞漫稿』には、「江戸山王祭礼神幸あり。蓋寛永十一年祭祀の礼備り始て大祭礼となる。当社と神田社と隔年祭礼也。天保府命前は年々大行となり、出しと名付る樂車の外に踊屋台及び地走と号くる物を出すこと四年に一回也しが府命ありて兩社とも中三所づ、出之ことになりたれば、以後は凡三十余年に一回踊やたいじばしりを出すこととなる。此三所を年番と云也。年を順に輪番するが故也……年番に當る町人は盛夏なれども袷の美服を五枚重ね着す。年番に當る所の警固

人も或は荷を重ね又は夏服のまゝの者もあり、年番に着流すもあり。其他雇夫に至る迄新調の服にて古服を用ふること聊も無レ之。麴町ハ古服にても出る。手棍と云ふて其所の薦人足大勢是も対の浴衣にて出しの前に木遣を唄ひ往く。諸警固人以下手棍前雇夫に至る迄又必ず造り花付たる笠をかむる也」と祭に参加する人々の衣類についても、詳細に説明している。

祭礼当日は、四十五番の山車が連続し、その後には神輿の行列が続き、供奉の人馬五百人を越え、先頭の猿田彦からしんがりの長柄持に至るまで一里にも達する長蛇は、まさに盛観だったに違いない。行列通過の町々では、家の前を綺麗に掃き清め、家毎に幔幕を張つて神灯を吊し、真紅の毛氈を敷詰め、後には燦然と輝く金屏風を引き回し、美酒佳肴を用意して、親類縁者を招いて饗応しながら、渡語御の行列を拝するなど、その有様は言語に絶する偉観だった。

と、言うわけで、この祭には莫大な金がかかったであろうことも容易に察することが出来る。寺門静軒は『江戸繁昌記』に、「祭事の常例、家ごとに赤飯を炊く。乃ち糯米一時に万の斯の倉を傾け、炊煙、一朝に千の斯の竈を熱す。此猶ほ細事、言ふに足らざるなり。酒、天に滔こり、燭、天を焦す。人の狂謀

天地を反復すれば、則ち一戸数日の浮費、推して知るべし。且つ費中の費、無用の用なる者あり。欄干、是れなり。畳樽、是れなり。祭り前の一日、工来たつて蘭施す。一欄、値数銀。且つ祭人の過ぐるを追ひ、跡を踏みて之を毀ち、欄材を奪つて去る。是れも又常例。

空樽数百、畳積して山を出だし、綴ぬるに灯笼を以てし、以て京観と作す。是れも又古例。其の他の常例、列挙するに遑あらざる」と記し、独特の筆致で祭礼の無駄遣いを皮肉つている。

しかし、祭に熱中する江戸っ子からすれば、「大きなお世話よ。金は天下の廻りもの。祭が終わつたらまた稼ぐさ。こちら、この祭を樂しむために生きていようなものヨ。どうでえ、先生もおみこしを担いで見ちゃどうだい。そうすりゃ、こちららの気持も多少はわかろうつていうものヨ」と、蛙の顔に小使の態であつた。

もともとは、この山王祭も、またこれに匹敵する神田祭も、毎年行われていたのだが、延宝九年に、隔年交互に行われるようになり、山王祭が、子、寅、辰、午、申、戌年に、神田祭は、丑、卯、巳、未、酉、亥年に当たる年と定められたのである。その一方の本祭に対し、他の一方は陰祭と称し、簡単な略祭を行うことになつていた。

*

天か下晴れて日吉の御祭礼 七七七

— 天か下で天下祭を暗示。

家中の気たと山王の町へい、 明八満二

— 將軍家の観覧もあるのだ。

祭礼の襦袢が出来て人だかり 宝十一亀二

— 祭のために新調。

神田から見れば山王うす着なり 天四礼一

— 神田祭は九月。

山王の祭りの奴暑気さらし 宝十一満一

— 夏の日中、太陽に曝されたまま涼むことも出来ないの。

も出来ないの。

山王と神田でもみた金屏風 一七四

借用にしろ家毎に金屏風 二六三

幕はよしかたと屏風を出しに行き 天五鶴一

— 川柳では、祭に建てる金屏風は、全て借

り物で間に合わせるという趣向。

甲の座に居るが屏風の主と見え 天二松一

— 屏風の貸主を主賓の席に据える。

高見では見物させぬ御祭礼 安八義一

— 「二階棧敷禁止也」。

町内の仏とらへて猿田彦 初二三

常の名は甚六今日は猿田彦 安八礼二

— 祭の先導役を勤める猿田彦は、重労働で

大変。そこで一寸足りない人物にこの役

を押しつける。

秀句鑑賞

同人吟 遠山可住

—5月号から

若い時から先輩の名句に魅せられて、川柳

のおつき合いは随分と長くなりましたが、

公務員（農業関係）退職後、ボツボツ外の空

気を吸いはじめた井の中の蛙が私の狭い川柳

の世界です。作品鑑賞となると本当は作者を

知って、この人にしてこの句ありと、その生

れた心を鑑賞しなければならぬのでしょ

うが、それも出来ぬまま心引かれる句を選ば

せていただきました。何せ一八〇〇句もの創造

の世界がドツと迫って来るすさまじさです。

さりげない身振りの中の温かさ、さりげな

い言葉の中の感動、ハツとする人間の面白さ

がたまらなく好きです。

最近の川柳にはユーモアが少ないという声

をよく聞きますが、笑いの内容が昔と違っ

たので結構ユーモアがあるのも再発見です。

お釈迦さんは知恵を説かれた。人間もつと

知恵があつたら戦も起きないし、貧困も無い

という。川柳という世界も言葉の表現から生

れる創造の知恵、そして人間陶冶、私にはは

るかに遠い道です。

染みの手に女のいのち静かなり

山本半鏡

この染みはプロのそれでなく、きつと身近

な手だと思ふ。女の手には四季が匂う。春の

若芽からはじまるくらしの染み、郷愁に似た

染みが語り草になってしまふのは淋しい。

水平線と身の上ばなしして帰る

西原艶子

山育ちがはじめて見た水平線は途方もなく

でっかい夢をくれた。青春の水平線は戦の中

の恐怖だった。平和な水平線の中で豊かにな

つたいま、改めてじっくり対話出来る水平線

の発見である。この民族にしてこの句あり、

明日への出発がある。

定位置はこことボタンの穴がある

石川侃流洞

一時ボタンのかけ違いというのがよく使わ

れたものだ。着こなす、履きこなす、人それ

ぞれ、思いがあり、流行がある。どうぞお好

きなように、と認めた上で、だが定位置とい

うものがあるんですよ、ここに——面白い。

人間の裏にも慣れてよく眠る

植田一京

よく眠れるまで相当の修業があつたのだら

う。人生の三分の一は眠り、横道のことも、

仮面の裏も覗いた上で、図太い軒が聞えて来

そつです。

窓ぎわの椅子を無駄とは思わない

政岡日枝子

誰も一度は座る椅子が、身につまされます。

この椅子に座つたことがない族が、このごろ

日本を危うくしていそつです。

古い二人だいいじな鮎をかうてくる

春城年代

これだから人間やめられない。大臣さまよ

何処かのエリートさんよ、こんな素敵な老後

があることをご存じでしょうか。

顔の皺あるがまんまも勇氣なり

林はつ絵

女性の勇氣がこんなところにありました。

きんさんきんさんまで行くともう別ですが。

忘れていた昔ボツカリ昼の月

奥田みつ子

消去法わたしひとりが売れ残る

吉川寿美

ふと気がついた昼の月、わたしひとり、こ

の二人？何か気が合いそうて心に残ります。

自動改札抜けて道問う人もなし

亀岡 哲子

自動化の駅が年寄りにはだんだん遠ざかる
思いに写って来ます。みんな思い思いの方向
へ、声をかけるでもなく、かけられるでもな
く、他人さまの世界です。

幸せは欲が見えなくなっただけ

堀江 正朗

仏道で悟りとやらをひらくまでは人間欲の
固まりのようなもの、金にも運にも見放され
老い先も見えはじめると、やっと欲もしほむ
ものの、生への執着が残るようです。作者は
目の不自由な方、物が見えないと共に欲も見
えぬ、それが幸せだとは実にこの作者にして
この言葉あり、感動させられます。

造花だと思われている胡蝶蘭

菱田 満秋

時々すばらしい胡蝶蘭にお目にかかります。
整然とした色と形と配列は自然の造形とは思
えない冷やかささえ感じさせます。胡蝶蘭は
置くにふさわしい場所があるのでしょうか。

引場後不明で出来ぬ恩返し

福元 みのる

戦後はまだ終っていない。新聞の片隅に小
さく載る消息にふと目が止まる。消え去らぬ
憎悪も或は怨念になっているかも――。

風船の逃げた彼方は夢だまり

中村 ゆきを

夢だまり——きつといい風ばかりが集まる
吹き溜りがあるのでしょう。ここで聞く風の
音にはナイフ持つ子もいないでしよう。太陽
が一パイ輝くところ、決して山の彼方の空遠
くではありませぬように。

苦勞した人から貰うにぎりめし

高田 美代子

まず、米の銘柄が違う。炊く火かげん、水
かげんが違う、握り方がちがう。一つ一つ積
み重ねた腕は食べる人の心を知って動く。
地元でとれた地場野菜に作り手の顔が浮か
ぶ安心感のように、苦勞した人が握るにぎり
めしは心が温まる。このにぎりめし、きつと
ひと口ひと口かみしめたことでしょう。

雨漏りがしている僕の指定席

新家 完司

指定席はちゃんとあります。みんな寄って
一番良い場所を選んでくれます。それは何
の文句もありません。ただ、雨が漏るんです。
風ばかり読んで一步を躊躇する

高橋 岳水

石橋を叩いて渡る。その人の歩いた過去か
ら生まれる経験の所作。この句はより一步時
代を捉えている思いがします。

次に作者が伝わって来るいいリズムを味わ
いたいと思います。

崖つ淵のさくららにふつと誘われる

木本 朱夏

綿菓子に雲をヒントにしたのかな

石上 悦子

火をかぶる男が居ない淋しいな

梅田 宣司

旅立ちの朝から花粉症になり

鈴木 公弘

春なのね蟻一匹にお会いする

坂田 和歌子

ロコミの宣伝がない整形医

久保 正剣

スピーチに慣れた娘に縁がない

牛尾 緑良

千円の真珠いくらに見えるかな

岩本 美智子

相槌の軽さを妻に叱られる

川島 颯云児

うどん食いながら再起を考える

吉岡 美房

昭和コインがみんな汚れた顔してる

春城 武庫坊

弥陀の掌に委ねて妻の座の空し

桜井 千秀

水煙抄

西田柳宏子選

今治市 野村清美

ブランコをふたりに漕いだ遠い恋

色づいた蕾あしたへ弾む夢

長生きをしてねお守り孫がくれ

怠けてた畑の草が花をつけ

おかわりを言わぬ仏へてんこもり

河内長野市 大西文次

優等生と同じ鉛筆使ってる

新芽萌ゆ茶つみ娘の紺紜

マネキンと妻をしみじみ見比べる

曲り角上手に曲る千鳥足

酔えばまた歌う音痴の枯れすすき

大阪市 一本勇太

生命線の長い手相を信じよう

現況届まだ生きているお墨つき

リバイバルソング夫婦の息が合い

霧囲気に負けてポリシー引っ込める

ハンデイを笑顔に変えるまでの距離

高知県 百田幸

むつつりの息子に舵取りのうまい嫁

放任の親は知らない苛めっこ

五十年空気の夫婦まだ続く

守る人居る幸せに気が付かず

目をそらし聞かぬ振りして聞いている

伊丹市 樫谷郁子

歴史の重みじつと耐えてる寺の屋根

人柄がそこはかとなく文字の跡

青い空あなた居ますか雲の句座

団体に逃げ込んでいる腑甲斐なさ

遠き日のロマン語るか神獸鏡

今治市 渡辺南奉

つまずいた弱気を叱る影法師

いつまでも子供ではない子供部屋

父さんにノック無用の部屋がない

よその子が輝いている参観日

せっかちですぐに弾むがすぐトチる

横浜市 川島良子

手をつなぐひとりぼっちにならぬよう

介護する体力だけはつけておく

ほっとした途端に風邪をひきました

殺されるために生まれる人はない

お布施から和尚新聞代払う

和歌山市 吉村さち子

もう首も振らなくなった妥協癖

敵も味方も桜の下で脱ぐ仮面

引き合いにできぬ親子の血の絆

一身上の言葉は都合よく使う

親切に甘えたあとの荷が重い

札幌市 三浦強一

都庁舎をバックに写す鼻の穴

路面電車わがふる里はレトロ調

港から荒海へ出るビッグバン

言いつ分のある手も含め多数決

頭まで食べて欲しいとイワシの日

今治市 塩路よしみ

青葉若葉わたしも同じ空気吸う

気が向けばおいでポットにお湯がある

ジーパンと歩幅が合わぬ年になり

知っていてとぼけ上手な母が好き

さくらはらはら花もわたしも地に還る

尼崎市 田辺鹿太

閑という時間を売りに街へ出る

荷くずれをしない程度に嘘を積む

従順に生きた羊に悔いがある

職人の腕が夜泣きをする不況

泳ぐのが下手で情けにすぐ縋る

和歌山市 木村親路

セクハラの手相が今の妻でした

あの時の誓詞を探すフルムーン

捲土重来二浪した子にサクラサク

ペアルック愛の不安も包んでる

妥協せぬ波に男の詩がある

兵庫県 安達厚

申告が済んで去年は遠くなり

豊作の減反に泣き離農する

新聞の休み日課を狂わせる

休日がふえて文化が変わり出す

卒業は休まずに来ただけのこと

藤井寺市 太田扶美代

終章へ今から少し凝ってみる

聞く人があるから止まらない涙

母さんを一人占めにした記憶

甘えたいのに先肩を揉まされる

あたたかい笑顔が一番風邪に効く

草餅を配って母の雛祭

尼崎市 内田 美也子

満一歳孫は大地を踏むかまえ

たんぼの綿毛を吹いて反抗期

さくらさくら山寺埋めて人埋めて

お祭りの気分で渡る明石橋

愛媛県 黒田 茂代

乾杯のグラスの向こうに敵がいる

ジャンケンポン女が強い野球拳

毎日が駆け足老いてゆく月日

かにかくに里は懐かし母が待つ

花はらはら風の調べのままに舞う

岡山県 国米 きくゑ

コンビニで弁当買っている紳士

金婚の翁と姥で舞うてます

振り向かぬ後ろ姿に意地をみる

遠くからそつと支えてくれた父

真心に触れてゆつくり咲いた花

寝屋川市 井上 すみれ

気がつけば二〇〇一年其処へ来た

ご一緒に春を感じに出かけよう

方便の嘘と知っても逃げられず

その気持ち分かる分かと酒を注ぐ

三寸の舌何と大きな事を言う

ふるさとの熱狂持って甲子園

広告に花見帰りの回り道

あれもダメこれもダメだと孫の守り

長電話言い足りなくて手紙書く

週一度主婦に戻って米をとぐ

八王子市 井上 京一郎

まあ聞いてくれと押し込む縄のれん

自腹きる酒は止まり木だけで消え

待たされる電話トイレを呼んでいる

親馬鹿の声になつて電話口

ピンチとは言えず正念場と社長

横浜市 近藤 道子

旅十日旧知の友となつている

留守番へきどつた声で話してる

ファックスでデートの場所が送られる

ファインダーのぞけば笑う君がいる

豊かさの街でナイフがあばれてる

和歌山県 中後 清史

晴れる日がきつと来るよと友が言う

叱られる方にも言いたいことはある

身に覚えあつて神経逆撫でる

記憶喪失症候群の時の人

優雅だという年金の暮し向き

唐津市 樋口輝夫

賞め殺し送別会でわけを知り

這う蟻が互いに道を譲り合う

披露宴簡単粗辞が長すぎる

うちよりもマシな布団がゴミに出る

先輩と俺を煽てる九官鳥

富田林市 大橋鐘造

アドリブで生きる男の太い眉

糸切れて凧が知つたる世の広さ

いつまでも独楽が回っているゆとり

今日の手を洗って明日の日に備え

根回しが効いたか今日の風当り

河内長野市 木太久 正一

新生児新芽のような手を握り

若人の司会さわやか甲子園

旭屋で道頓堀の雨に逢い

共通の遊びを妻とひとつ持ち

景気の日つんでしまった低金利

横浜市 布山嘉信

春風を喜んで舞う糸柳

訛りある鶯今年も春へ来る

減税は簞笥に入れる前に消え

脇役を見事にこなすかすみ草

古賀メロディー下手なギターでなつかしむ

兵庫県 谷田多美子

古希過ぎた身にはうれしい春の風

ダイエツト明日からにして桜餅

晩学のノート私の宝物

蛸と鯛跳ねる大橋足の下

浮き沈み生き抜ける子になってほし

大阪府 奥野義夫

すらすらと仏を書いて集印帖

法螺少し混ぜてハワイの海の色

へそ繰りはこうしてためる妻の知恵

ネクタイを替えてめでたい席に居る

ペンツにも劣らぬ母の押し車

今治市 中村好恵

安らぎに逢える予感のまわり道

小言いう係が一人日々多忙

にんげんが好きで続ける小あきない

保護色に逃れ私の影がない

トンネルを抜けるときつとある希望

尼崎市 河津正治

病む妻へパントマイムの日が続き

社長より専務がキレて社が栄え

よこしまな恋がときどき目を覚ます

パレットの彩が弾んで春描く

売り切れと言うから更に欲しくなる

親父はサムライしんどおますと息子達
いい年で笑い上戸に泣き上戸
渡る世間はみんな神さま仏様
可哀そうだね踊り食いやら活けづくり

啓蟄にまだ目覚めないもぐらたち
桜満開不況の風に散り急ぐ
先は闇弥生の空の狂い咲き
まだ若い心と葛藤する体

羽曳野市 西村りつえ
高槻市 江原秀夫

柳友の名句に出合う通り抜け
しあわせは友に誘われ花疲れ
一足飛びに掴んだ椅子はがたがたで
淋しくてすぐにはしやぐ雑魚の群れ

富田林市 山原昭水

生命保険満期の金で旅をする
嫁がきて息子は酒が強くなる
日曜は野鳥と遊ぶ大和川
嫁さがし料理に掃除できる人

大阪市 立蔵信子

休日の新聞ラジオ本テレビ
ほのぼのとする話にも尾ヒレ付く
ふるさとの水のボトルを買いにゆく
むなしさは道頓堀に浮くネオン

尼崎市 松下比ろ志

古都千年枝垂れざくらもはんなりと
夕桜ほんのり匂い人を恋う
夫婦とは並んで歩く遍路笠
歳月は去るものですね古帽子

東大阪市 北村賢子
末っ子の甘えん坊が二児の母
世話されるよりしてあげるよこびだ
花の下 子らの笑顔もはじけそう
人波に押されるままに通り抜け

岸和田市 亀井皎月
アルバムに笑ったままの亡友が居り
農繁期昔の人もあり出され
同じ目の高さ貧乏神が寄る
不景氣を問えばうなずく張りこ寅

日立市 加藤権悟
それからの話題が好きな膝頭
ファミコンの群れに孤独な貌がある
しんがりのバトンが華の風になる
タンポポの笑顔に嘘を叱られる

秋田県 湊修水
エルニーニョ四月一日雪積もる
座食してざぶんどぼんに腹を立て
エンマの目妻の目嘘は通じない
神戸からいかなご届く春の味

焼け残り長屋の二階新世帯

堺市 梶本 哲平

箸茶碗皿などふたつずつ買うて

二階借りして一番にテレビ買う

貧しいが幸せ周囲やさしくて

海南市 谷口 義男

上官の命は至上としごかれる

正論をねじ伏せに来る多数決

出る杭になって打たれて見る度胸

友情の狭間で揺れる保証人

大阪市 榎本 日出子

それぞれの個性のばして巢立つ春

入学後 自分の絵馬をさがしに来

正直が余計な事もしゃべり出し

子供皆 母の味方でホッとさせ

八王子市 播本 充子

目標へ自分の足を信じきり

周り皆ライバルと知る順位表

あなたならどうするなんて試される

禁煙をしたムコ殿が見直され

兵庫県 円増 純子

ふる里に近づく詠りここちよく

ためす気の健康法が調子づく

誰にでも調子合わせて敵がない

三歳の知恵だんらんの真ん中に

読書中クシヤミの数で寝るとする

楽しみがありぐつすりと寝るだろう

快適な目覚めに本が置いてある

絵はがきの便りお城のさくら咲く

神戸市 船津 とみ子
今治市 越智 青園

酒やめて食事こんなにあつけない

電話のせき風邪をこちらにもらいそう

食べず嫌いとおして悔いがまたたまる

まだ死ぬと思わないから欲が出る

綾部市 藤田 芳郎

恵方だと思ふ地獄も極楽も

節穴でないぞと眼鏡ずり上げる

結び目の数だけ傷を持って老い

義理の席眠たい鬼と斬り結ぶ

枚方市 二宮 紫鳳

二十年かけてジャジャ馬飼いならし

家事終えてコーヒータムにある至福

お互いの絆確かめ五十坂

フリージアを生けてルンルン友を待つ

羽曳野市 芦田 絢子

面倒はいやとはやばや白い旗

他人さんのことで血圧上げてます

ありがとうのひと言心和ませる

風邪五日夜の盛りを閉じ込める

横浜市 伊藤ふみ
花の下鬼といっしよに踊ってる

石庭に約束ごとがありそうだ
満月が都会の空で遊んでる

鯉のぼり泳ぐ限りは夢を持つ

藤井寺市 岸本寿代

目の手術優しき夫は杖になり

花束に心の籠もる文そえて

今日もまた夫の好きな木の芽あえ

探してる頭の上のメガネです

八尾市 平川幸枝

缶蹴りで一人になった子に夕日

石みれば一応蹴ってみる子供

模様替え老いの部屋にも春うごく

啓蟄の顔して眉の濃い男

堺市 矢倉五月

転んだら起きる術だけ教えとく

食卓が無口本日休肝日

仲良しが死ぬ順番の話など

許し出て好物食べる日の至福

河内長野市 印藤智子

桜咲く入学祝い増えていく

お隣の桜で花見すみました

春眠に目覚時計並べてる

孫からの写真流行のセピア色

吹田市 有田加寿老
すがる目の求めるものがまだ見えぬ
ふくれてもすねても美女は花になる
負け犬になりたくないと張る虚勢
散る花を接着剤で止めようか

出雲市 名原純子
賑やかに花粉飛び交うおらが春

円周率 私の頭悪すぎる

十年の過去美しく化粧する

青い口青い淡呵を声高に

春雨と仲良くなった山桜

三代同居パン党御飯党

姑の味ようやく超えた木の芽和え

時代劇チャンネル権は父がとる

鳥取市 近藤秋星

春うらら隣も布団干している

二の丸のお濠の鯉も花見する

桜散っても菜の花の黄鮮やかに

いつしかに土筆も伸びて忘れられ

金毘羅の石段杖に助けられ

一番の札所を橋が近くする

すつきりと目覚めた朝の良い予感

横浜市 福島かづ子
お彼岸になると元気な老母となる

京都府 勝山 美千代

憂きことも忘れる桜花の京の宵

クラス会昔の笑顔がころげ出る

三世代気疲れします年かしら

風なごむえんどうご飯炊く匂い

大阪府 澤田 和重

手話ふたり静かに愛を積んでいる

自己流に生きる子に夢崩される

カラフルな通販 無駄を買わされる

昔なら切腹ものを詫びて済み

鳥取県 西垣 美知子

母の味弁当箱がなつかしい

青空と自由が好きで空仰ぐ

夢と金入れた財布と旅に出る

うっすらの亡父の表札まだ取れぬ

唐津市 井上 勝視

無位無冠だから背すじを伸ばしてる

有難い信心深い嫁がいる

婦長にもほのかに匂うサロンパス

財産も妻の達者に敵わない

和歌山市 武本 碧

思いやり忘れて地球涸れていく

ディスプレイすれば受話器に逃げられる

風花に乗ってひそかに女舞う

きのご雲知らぬ少年持つナイフ

大阪府 米澤 俣子

母さんの素朴な味の木の芽あえ

活字一つで情報右往左往する

素人と見て贖物をつかまされ

あやふやな情報信じ勇み足

香川県 神保 坊太郎

じゃれている間に首輪嵌められる

全快に千羽の鶴を飛ばさんか

石置いて電車を止めたのはカラス

四月馬鹿天下ごめんの軽い嘘

高槻市 乙倉 武史

若者の辞書に「尊ぶ」項がない

塩漬けの株四季報で泣いている

傍目には幸福そうな他人の絵

貧乏は薬と思う人生譜

尼崎市 清水 久美子

折箱の匂も一役花の宴

対岸の出来事でないビッグバン

尊くて神棚に置く初サラー

老人の介護に尽くす尊い手

羽曳野市 川田 晋

髭おとし美男子になり若返り

関白がゴミの袋を掲げる朝

友達でいようと離婚する夫婦

内定をコーラで祝う母と子と

ビッグバン壺のお金が騒ぎ出す
横浜市 北 沢 街 湖

若いわのお世辞やっぱり心地良い
極楽と天国どこが違うのか
愛と言う特効薬をお見舞に

香川県 松 村 輝 夫

どん底の仮の場で富士目指す
宅配便母の思いと匂の香と
三世代仲睦まじく気を遣う

二の舞を踏まないように踏み分ける

尼崎市 的 場 十 四 郎

春ざわざわ八十路の朝は散歩から

核家族肩に妻子がぶら下がる

親の背な見ない見せない子が育ち

早春の庭に好みの種を蒔く

尼崎市 森 安 夢 之 助

少年の草笛春を連れて来る

大袈裟に笑うてその場濁しとく

どっしりと手応えのある子の意見

ポツリ来た雨に慌てる干しふとん

大阪市 平 井 露 芳

ドル札も使えますよとビッグバン

蛸壺を出て大橋を見てる蛸

ガラス越し動かぬカバが岩に見え

東西を蓮如が結ぶ五百年

春爛漫ちよつと道草したくなる
岸和田市 不 破 仁 緑

花も人も旅は道連れ風に舞う
幸せの音ざあざあと湯が溢れ
一年生どの児も瞳澄んでいる

島根県 福 間 博 利

すんなりといけばいったで気にかかり
真夜中に起きて明け方また眠る
あいさつを向こうからする田舎の児

眼下には日本列島禿げていた

大阪市 中 澤 孝 子

張り切ると何だかいつもどじをふむ

無意識にたばこ吸わせる椅子がある

家族みな敵にまわしてたばこ吸う

待ちぼうけ日を間違えておりました

東京都 清 原 悦 子

下宿して家族の写真額に入れ

まわり道したから人生おもしろい

今までの事を手相にきいてみる

あの頃にもどれる歌を一つもち

富田林市 中 井 ア キ

嬉しい日人にやさしくしたくなる

思いがけぬ人から届く見舞金

雑踏が好き誰も私と気付かない

淋しい夜やたら深爪してしまふ

北九州市 岡田 幸生

あの頃の話になって俺お前
名曲を聞かされ待っている電話

亭主関白そんな時代もありました
ご近所と仲良く願う旅土産

生駒市 川端 きぬ子

餌をねだる窓に可愛い雀の子

目にまぶし幸せ色の黄バンジー

一病息災ほどよい坂の上り下り

遠来を待つ猫までが落着かず

寝屋川市 妻谷 重三

針仕事祖母はきまって目の自慢

デーケーアーまるで赤子を洗うよに

健康を祝ってくれる嫁と住み

万歩計犬の元気にギブアップ

岡山県 土居 ひでの

湯どうぶの湯げに仮面もゆるみがち

出石そば食うて櫓の花見かな

四十年の起伏を語るお茶を入れ

寒のゆるみへ私の春を取り戻す

八尾市 田中 トシエ

老婆の歩幅に合わず散歩道

減税をよろこぶほどの所得なし

文明が引きずっているゴミの山

ふるさとがだんだんビルに入れられる

島根県 武島 ちよえ

即答が出来かねるので眼鏡拭く

落ち込んで居られぬ初夏の風薫る

国会で答になってない答

新緑にみどり足らぬ絵の具皿

今治市 渡邊 伊津志

夜桜の白さが黒く見えるウツ

思いやる心にちよつと幅が出来

無に返れ欲を捨てよと波の音

失意の日海月がばかり浮いている

大阪市 榎本 洋子

盃が心の扉開けたがる

父在ればもつと幸せあったかも

春の野に四ツ葉のクローバ見つけた

猿ヶ島親子抱き合い日なたぼこ

横浜市 生坂 サト子

タウン誌のお薦めのそば噛みしめる

陰曆に調子合せた暮し方

サスペンスすぐ犯人を当てたがり

時を経た変らぬメニュー食べに行く

静岡市 増田 扶美

心機一転真白い道が見えてきた

茜雲窓染めつくし夢もらう

人と人 犬と犬との長話

真似しても一味ちがう母の味

京都市 前上英一

スランプをポテンヒットが抜けさせる

根回しの釘が効かない慌てよう

小回りの利かぬ翼を父がくれ

泉佐野市 稲葉洋

終幕はひとり芝居となる不運

もういいじゃないか嘆くな過去は過去

急ぐなよどんな庭にも花は咲く

八尾市 高橋明子

見上げたる夢のかけ橋海の上

診察券五つ揃えて家を出る

天守閣水上バスの花吹雪

鳥取県 高尾京

朝の陽と露を受けたる花供え

少子化に高校再編成かなし

歯の治療終えてうまさを取りもどす

米子市 小塩智加恵

目覚ましがうらめしくなる春うらら

これしきにつまずく足をなでてやる

思い出す事出来ぬまま寝間に入る

池田市 木村一笛

懲りもせず禁酒を誓う三日坊主

頬の傷けじめ付けろと捨てぜりふ

どん底で閻魔と神が譲り合う

鳥取市 富山雄幸

赤トンボ軽いタッチで鉄の先

老いたかな愚痴と欠伸が同居する

生き生きと夢をたぐって年を老い

大阪市 尾崎黄紅

ポケットに入れた切符がないという

掃き溜めの鶴は昔を語らない

義理人情を鼻で嗤っている若さ

愛媛県 安野案山子

きのうから燕がもんで戻って来た陽気

六十を叱ってくれる母がいる

欲望のアクセル踏んで道を逸れ

兵庫県 倉垣恵美

春帽子かぶせば祖父にうり二つ

蜂の巣をころがしてきた春嵐

調子にも乗ろう心が渴くから

八尾市 山本宏

裏口から出ない決意で入院す

手も口もほどほどが良い年になる

悲しみを知る人多し一心寺

八尾市 鷺見章

早春の快晴の窓に屋根光る

夕暮れて窓にカラスが来て笑う

待つという永さに耐えて待っている

河内長野市 水谷 笙子
低利子に福沢さんも影うすい
市議選のマイク本日四月馬鹿

男前案外な妻つれてくる

東大阪市 松山 隆

自分史に我が身よけれの嘘交じり

二戸一の透き間にあつた落し穴

雨漏りに遠い回路があるらしい

鳴門市 八木 芳水

何もせずいてもお腹は空いてくる

自惚れがまだピリオドを打たせない

春うららチラシと妻の行つたきり

米子市 大野 蒼流

死神に手紙貰つた交差点

戦争を知らず平和を尚知らず

豊かさが溢れた川で流れない

橿原市 西本 保夫

こんなにも不便とした右手怪我

リハビリに通う自転車にも乗れず

ナスだけリハビリ親切にしてくれる

愛媛県 中居 善信

死んだ振りしてる畑の草を引き

上段に構え言いたい事がある

口少し開けて悟つた顔でいる

羽曳野市 安芸田 泰子
口は出さんけれど聞き耳立てている
童唄遠い昔を連れてくる

木の芽和え添えて亡夫へワンカップ

伊丹市 延寿庵 野鶴

かさぶたを剥がして覗く古い傷

ぼろぼろになつても愚痴をいわぬ靴

諫早の岸で泣いてるムツゴロウ

横浜市 金森 徳三

要らぬもの捨てると何も残らない

清貧に慣れても少し金は欲し

週刊誌中吊り読んでこと足りる

和歌山市 森口 美羽

分別収集されて燃えないごみで居る

土臭い男の太い眉が好き

意地つ張り見栄つ張りですわたしです

吹田市 西岡 豊

似た顔が並んで飲んだ三回忌

一言を辛抱しろと腹の虫

振り出しの地に住みついて五十年

羽曳野市 徳山 みつこ

使っちゃえ空巢がタンスねらうから

シャツ一枚脱がずに汗をかいている

齢かしらきのうは何をたべたっけ

ぜいたくの川におぼれて岸さがす
プライドを夜は捨ててゐる鬼の面
満開の花に素顔となつてゐる

尼崎市 小川 富江

日本の春です桜咲きました
センス良い嫁見習つて若くなり
良い妻をやめてしまおう缶ビール

横浜市 岡田 芳江

老いを笑う我が行く道と気づかずに
雑草と踏まれながらも花をつけ
お金など要らぬポックリ逝けるなら

和歌山県 坂東 和代

語りべは消えて民話もタムの底
ノーともし言えたら自分誉めてやろ
ちよつと耳貸したばかりに共犯者

今治市 村上 久美子

春彼岸木魚の音もあたたかい
少子化へ孫が三人大威張り
百選の桜に頬ずりしたくなる

島根県 槻谷 伸子

えも言えぬ素朴な反りの日本刀
竹トンボ殺いだナイフのさわやかさ
課長補に尻ぬぐわせて天下降る

唐津市 宗 弘

美しい言葉に弱い老いの足

兵庫県 北川 とみ子

父酔えば昔のラツパ聞こえそう
幸せに慣れてつまらぬ噂する

羽曳野市 山本 たけし

惚け防止とぼける技も生きる術
仏にも夜叉にもなれず古希の坂
悔しさに泣いた日もある影法師

兵庫県 西山 八重子

みちならぬ恋は哀しいまでに揺れ
幸せと思う明日へ掌を合わし
欲のない顔で火種を抱いている

高槻市 左右田 泰雄

悲しみを震える肩が支えてる
コンタクト探しあぐねて路地の暮れ
旧姓を添えて新居の便り来る

枚方市 大昇 隆広

幸あれと今日から背なにランドセル
なんやかや言うて市場で買う温み
別れ際ボソツと聞いた苦のひとつ

河内長野市 妹背 尽呂久

お日様が出入り口変え四季巡る
印籠の効き目を見せるタイミング
日銀に毒蜘蛛が巣を張っていた

単身赴任二人の娘適齡期

沖繩県 杉谷 カズエ

単身赴任母が押しかけ同居する

感動のバラリンピックをありがとぅ

出雲市 梅 ミツエ

孫のこと聞いてあんとそっくりや

寝屋川市 瀧本 八十八

ふまれても笑って咲いてる野の花よ
つくしんぼ春がきたよと勢揃い

島根県 谷岡 ふみ

動乱の童らは沈黙抗議の瞳

沈黙を破り奇抜なアイデア

尊さは欲得なしのボランテイア

倉敷市 家守 政子

今年またちまきを送る母心
いい日和部屋一杯に風を入れ
有難い勝手きままに養生し

鳥取県 平井 栄翁

ご多聞に漏れず私も花粉症

嬉しくて孫の合格ふれ歩く

猫撫で声に心浮かれる倦怠期

香川県 向山 治延

手をつなぐのには程よい月明り
雨垂れの音にゆっくり朝寝する
何回も合格電文読む笑顔

島根県 菅田 かつ子

離乳食たべさす母も口を開け

園児の絵父母の顔皆まん丸い

ゴミを焼く煙でもめる時となり

鳥取市 山本 益子

つぶらな瞳抱いております茶髪です
乱暴な言葉がすこし照れている
けんかする相手がそばに居てくれる

砂川市 武田 正美

もやもやのいたずら書きにすかっとす

上ねたの鯨生き生きとパワー付く

天の声肝に銘じて忘れない

新潟県 高野 不二

生きている余生欠伸ばかり出る
年輪の中でしぶとく生き残る
真っ当に生きれば高い空が有る

兵庫県 植村 雄太郎

冗談もちときつすぎる四月馬鹿

今日手紙出したと孫から来る電話

サラ金のずるさドラマでならわかり

不確かな記憶証言しかねます
物忘れするが三度は食っている

三年も待ちくたびれている仮設

真実の愛を一生キープする

鳥取市 森 明美

春だから歳を忘れた色を着る

徳島県 安宅 美代子

余命いくばく世間の口は気にしない

フルムーン虹もつかんだ露天風呂

時間止め妻が昔の絵につかる

輪の中できれいな事など似合わない

尾張旭市 三浦 きぬ

いい響きグラントマザーという呼び名

婆さんと呼ばれたくない八十歳

方言を笑うあなたの訛りよう

尼崎市 野瀬 昌子

良い知恵も浮かばぬままの長電話

子育てのママに切れてる暇はない

大地どっしり春の草花侍らせる

鳥取県 藤山 弘子

防災の訓練をする過疎の村

おにぎり今年も花見した平和

献立に旬の味覚がある家庭

尼崎市 軸丸 勝巳

二軒から二軒の味のくぎ煮くる

車座の不況を聞いている桜

ビッグバン慌てるほどの物もなく

転勤と転校秤にかけられる

横浜市 山梨 雅子

離れまいついでに兜出しておく

リレー式渡された孫守りをする

米子市 門脇 晶子

古希になり老化防止に水着買う

縄文を掘れば伝説うすれ行く

母の地図私も同じ地図を書く

横浜市 山下 省子

いつてらっしやい嬉しそうだねと夫

金のない他は夫に不足ない

なに不足ない奥様にある噂

大阪府 井上 千代子

うぐいすが追いかけて来る島遍路

虫のためキャベツ一本残す慈悲

すり鉢のひねくれゴマが跳んで出る

吹田市 三浦 憩

間違いの電話人柄にじみ出る

妥協せぬ心が呼んでる不仲

今どきの素直宝のように見え

高知県 桑名 孝雄

左遷ではないと思うが遠過ぎる

ルーズだが心の鍵はかけてある

株も男もチョット値下りし過ぎだな

兵庫県 高見末野

小春日の縁に持ち出す針仕事
散る桜手に受けている大師像

おはようと云える人あり朝のお茶

八尾市 與田明

失言に補足の言葉に苦勞する
本の谷間でエンピツが昼寝する

葉桜の背中に悔いを溜めている

米子市 池尾保子

ステジュール通りにいかぬ今日の鬱

高級の瓶にワインを入れて飲む
れんこんの穴からのぞく世紀末

尾崎市 尾宮弘治

残り火に紅を粧い噂撒く
黙々と散った花掃くポランティア

定時では帰りきれない新名刺

どの靴を履いても春は唄い出す
子の世話にならぬと決めて好きにする

川崎市 和泉見早子

魚偏の湯吞が辞書を開かせる

濡れて行く姿 健さんなら似合う
旗振った人と一緒に泥の舟

京都市 高島啓子

よくしゃべるおんな墓参に来ています

横浜市 荒井広和

言い易いからと便利にこき使い
職人の自負いささかも妥協せず

定年後自作自演の日々続く

横浜市 保田絹子

花冷えに何を着ようか迷う朝
夜桜の名残りひとひら肩に在り

親方が留守の一服長談義

大阪市 三浦千津子

チャレンジへ心は古いぬネジを巻く
春の芽に伸びる力を貰い受け

風みどり愚痴も文句も御破算に

横浜市 田中笑子

へそくりにまで不景気が忍び寄り
捨てられぬ物がわが家を埋めていく

頑張って生きてる母が小さくなり

咲いた咲いた初心の園芸チューリップ
好きな句を伝え心を覗かれる

横浜市 豊田羊子

隣席の携帯が鳴り席を立つ

飛んできた種がりっぱな花つける
背が軽く触れ合い恋が始まった

倉吉市 大下智子

種尽きぬ軽い口から出るうわさ

島根県 松本 聖子
良い天気待っていましたた布団乾し
病床へ満開の桜活けてやる

偉かった亡母の教えを子に教え

羽曳野市 森田 四三郎

被害者を興味本意の報道員

コマーシャルほどの効目もない薬

金婚式めでたい夫婦車椅子

横浜市 福田 由美子

疲れのせ体重計が軽くなる

老いた背もリュックが似合う春うらら

くつだけが父をおいぬき大人びる

横浜市 長島 亜希子

あげる人言わない土産買ってくる

権限のない接待は赤提灯

恋人にすり替えられた写真立て

横浜市 鈴江 純子

旅プラン練ってる時は睦ましい

手術後の体力ためず旅に出る

孫自慢はじまり受話器持ち替える

西宮市 長谷川 淳

組板の音がしている母が居る

たまに来る孫伸び過ぎていと眩し

着ぶくれが恥ずかしくなる春日和

横浜市 山本 為佐子
手土産のいらぬ友がありがたい
寝る前の一句がおもい出せぬ朝

初孫にわが面影をさがしてる

鳥取市 有沢 せつ子

表札にや々と家族の名が増える

飽食で犬や猫まで味選ぶ

老人に席譲る子が頬染める

大阪市 小泉 久子

きれいなと言われ一日弾んでる

我が儘を許し合ってる丸い背な

手を貸さず見ない振りするのも情け

滋賀県 中 宗明

妻逝きて人生コース狂い出す

感涙にむせぶ人生叙歎うけ

静岡県 大村 正雄

強弱がほどよく溶けて共白髪

片栗を野外授業の子等囲む

鳥取市 宮脇 道子

古い独り噴き出すように話したす

年金が安定剤で強い強し

岡山市 清水 金太郎

家中を無口にさせた受験の子

合格の孫が春一番の笑顔来る

倉吉市 山中康子

道草も張り合いとなる万歩計

道のりが平坦すぎて飢えてゐる

大阪市 中井正秀

ほどほどに百葉の長吞んでます

腹立ちになんぼのもんと言ひ聞かす

岸和田市 井伊東吉

小出しする景気対策ききめなし

貸し過ぎの跡始末する貸しししぶり

和歌山県 村中悦男

衣食住豊かさ過ぎてわるさする

闘病の友の言葉にうそはない

愛媛県 宮本末子

耐えた日を口にしたくもなる老後

むなしさは架橋に消える船の旅

横浜市 平達也

やり直す零で始まる仲直り

土のまま家庭菜園垣根越し

東大阪市 今岡貞人

晩学にわからぬカナが増えてくる

九十になつても明日を考える

大阪市 鈴木トヨ子

宅配便母の言葉も詰つてる

子の気まま許した親の罪作り

大阪市 星野ひさ

座布団が舞う横綱の負けつぶり

老いてなお美しく咲く梅の彩

泉佐野市 大工静子

救心を犬にのませた医者留守

ポックリと逝くには修業未だ足らぬ

和歌山県 岡本八重子

彼岸入り早ツバメ来て巢の用意

庭の樹々皆じいさんの実生から

和歌山県 上地忍

お宅の雄に似てると子犬置いて行く

美しい別れ桜に教えられ

八尾市 井尻民子

花が散る静寂の日々しのび寄る

隠れ部屋持つて女は安心す

豊中市 宇野義江

春風よ気ままに花粉呼ばないで

星空に亡夫は何処と目を凝らす

和歌山県 上地登美代

出無精の夫がツアー欄見てる

今日も無事お礼を言つて床につく

和歌山県 松本良

妻倒れわが事よりも狼狽える

そばに嫁齒切れの悪い子の返事

豊中市 みき わきみ
スクーターの背なで井ゆれている
それみたか宋襄の仁倒産す

益田市 岡田 たけを
いつ死んでも良いが薬は飲んでる
馬鹿だなと言われて腹がたてにくい

静岡市 中西 雅
あの世にも電話をしたい花見酒
温泉の湯気の彼方は皆美人

兵庫県 徳平 毬子
かにすぎが親子の絆煮つめてる
孫の顔見つめて不満忘れてる

姫路市 服部 一典
病妻に舵を握られ家事を漕ぐ
好きでない嫌いでもない妻になる

熊本市 北川 一進
袷元が奇麗和服も良く似合い
今日からは大人になったお振り袖

横浜市 三村 八重子
かわりを避ける言葉は濁しとく
入浴剤の色だけ残るしまい風呂

米子市 猪森 スミエ
宴会の土産に仲間連れて来る
台風の進路睨んだ握り飯

羽曳野市 川口 信子
孫の声聞きたくてまた電話口
うら切られ靴が小石に八ツ当り

川口市 田中 喜俊
雑談で痛み忘れて心晴れ
門限のない未亡人よく喋る

大阪狭山市 伊藤 尚子
姦しいおんな三人花の下
手を組んでいるから地球丸のよ

千葉県 大川 晚翠
不景気か土砂降りの中竿竹屋
ぼんぼりの明かりに浮かぶ老桜

豊中市 岸田 知香子
心の戸開かず背負った老いのうつ
花の下門出を祝う新学期

高槻市 執行 稲子
月始めシエフおすすめの新メニユー
ラッキーなお日和明石の橋ひかる

鳥取市 山本 崇
ハンドルの遊びが救う急停車
傍目には気楽に見える老いの杖

松江市 松浦 登志子
大勢になると元気のでる訛り
宴会を締めて一人で飲む幹事

神よりも年金さんに手を合わせ
乗りおくれしそう速達便頼み

兵庫県 仲井素水

愚痴っぽくなって老化のまがり角
一人相撲とって夫の失語症

和歌山県 中村君枝

娘が嫁ぎ老人の家また一軒
どんな顔してるんやろビッグバン

八尾市 砂田八寿子

花の下ポケットベルはOFFにする
花の下携帯鳴らす野暮が居る

東京都 井上つよし

金粉がチヨコの中舞う祝い酒
猫の手も借りたい時に役立たず

鳥取市 福島庸二

親離れ自分で背負うランドセル
幕引きの上手な男名が残る

福岡県 本田忠男

ささやかな幸せがある朝の虹
旅にきて砂風呂に入り昼寝する

和歌山県 和田美寿子

良い風が吹けば飛びたくなる花粉
ストレスを桜の下へ置いて来る

鳥取県 橋谷静江

さくら土手私も酔ったふりをする
流れ雲明日の風を信じよう

出雲市 岡あきら

ささやきがほしい六十路の旅枕
輝いた裏に涙の金メダル

兵庫県 中野とよ子

日曜劇場電話のベルが邪魔をする
活断層抱いてその日を暮しして

和歌山県 福重美子

空席に安否気遣う月例会
土地売買一生一度の大仕事

熊本県 増田一乗

紙切れに一言添える宅急便
手を合わせ笑顔を偲ぶ春彼岸

出雲市 加藤スズコ

年金が達者でおれと応援す
子心が計れぬ現世言葉のむ

鳥取市 谷岡清子

愛飢えてかまわれたくて持つナイフ
回り道無駄も心の糧となり

箕面市 出口セツ子

春雷におどろかさされる三分咲き
車座へ電話もかかる花見宴

唐津市 岩崎實

(半澤無眼子氏の句は50ページに掲載してあります)

沙湖抄

八木千代選

ずうつと前のような気がするけど昨日

菜畑で巾の鐘ききのがす

ごつくんと真水を飲んでから眠る

何も変わらないベンチが置いてある

木馬が抱えているのは母の一寸

赦したら愛が重荷になるだろう

あやとりの梯子で足を踏みはずす

スランプのこの平穩を楽しもう

絵を切れば失敗談も落ちてくる

身の内の藪に咲かせている椿

そうねもし でもねあなたのことが好き

耳鳴りの奥は小ちやな遊園地

ほんとうは真つ二つには割れぬ桃

ヘッドライト寂しい街を照らし出す

知らない方が私のことを知っている

輪の中の風が時々輪をこわす

子の前で私の老いを見せておく

アドリブで軽くしてから抜ける穴

人の群れ人には帰る家がある

生きよ生きよ生きよと玉葱の芽が

藤井寺市 高田美代子

東京都 佐藤 季穎

鳥取県 鈴木 公弘

和歌山市 野々 圭子

同

綾部市 藤田 芳郎

砂川市 大橋 政良

西宮市 牧淵富喜子

米子市 政岡日枝子

和歌山市 木本 朱夏

大宮市 新井 朋子

鳥取県 田村きみ子

海南市 三宅 保州

鳥取県 新家 完司

堺市 志田 千代

京都市 都倉 求芽

米子市 鷺見 正子

和歌山市 古久保和子

鳥取県 西原 艶子

鳥根県 松本 文子

種蒔いて間引く女の庭仕事

しよいきれぬ荷物ひとつと夕暮れる

綿あめの見栄は追求せぬように

魚屋が来てにぎやかな辻地蔵

十年一日火加減ばかり気にしてる

花がすみ わたし少うし神憑る

はるかな道渡った渡来人たちの貌

手のひらに掬った欲のありつたけ

年金になじむ口数貧しくて

赤い灯台白い灯台 今生の

前向きになると握手がしたくなる

後編で風も呼んでみようかな

今日のわたしきのうの私とは違う

こめかみのうろこ落ちてから気楽

太筆がなくて自画像未完成

枯れるのも自然慌てることはない

気がつけばわたしも亡母に何もせず

水仙もいつか群生疲労する

冬の耳 言葉を飾る人ばかり

曲線のあと一息が悩ませる

デュエットはゆめのまに夢 月おぼろ

私の肩叩いた人も消えている

月のいたずら傀儡の影が酔っている

傲慢でゆこう素直になれぬなら

約束を破る勇気もないわたし

温かい暮らしに鶴は馴染めない

富田林市 藤田 泰子

寝屋川市 森 茜

和歌山市 川上 富湖

鳥取市 武田 帆雀

西宮市 門谷たず子

和歌山市 楠見 章子

米子市 青戸 田鶴

和歌山市 川上 大輪

兵庫県 遠山 可住

米子市 白根 ふみ

愛媛県 中居 善信

和歌山市 上地 忍

八尾市 村上ミツ子

八尾市 大内 朝子

松原市 小池しげお

松原市 玉置 重人

米子市 茂理 高代

出雲市 竹治かし

吹田市 山本希久子

米子市 林 瑞枝

尼崎市 春城 年代

兵庫県 大谷幸次郎

弘前市 一戸 ツネ

和歌山市 桜井 千秀

米子市 木村富美子

尼崎市 田辺 鹿太

静止画像噓が終わると動き出す
余白への自分を騙す時間割

唐津市 久保 正剣
和歌山市 吉村さち子
八尾市 高橋 夕花

春は苦手まどろむことが多くなり
春愁のところどころに君がいる

松江市 川本 晔
川崎市 和泉見早子

易の灯にすがって彼は来る来ない
夜あそびがすぎたか朝がえりの月

岡山県 富坂 志重
八王子市 播本 充子

噛み合わせ話 腰から眠くなる
遠く住む子等と心の距離もあく

和歌山市 山口三千子
大阪市 立蔵 信子

別れかたしらないらしい電話鳴る
正直な手紙が書けたことがない

鳥取県 岩崎みさ江
西宮市 奥田みつ子

あじさいのなお重くなる一周忌
肥後守あれが宝であった頃

唐津市 仁部 四郎
熊本県 高野 宵草

咳すれば一里四方に夜のしじま
矢絣の少年になりラムネのむ

今治市 月原 宵明
大山市 早川 盛夫

玄関に得体の知れぬ靴がある
誘い水かけて林檎の木を揺する

和歌山市 武本 碧
鳥取市 植田 一京

句読点打ってヒントが湧いてきた
クラシック聞こえてきそう羽根のペン

枚方市 海老池 洋
和歌山県 中後 清史

フラスコに沸騰点がある破綻
画いた絵に我不在とて破り捨て

弘前市 蒔苗 果林
高槻市 乙倉 武史

鏡にも発言権が欲しかろう
一心同体などと錯覚したまんま

今治市 村上久美子
弘前市 相馬 銀波

輪の中で老いの喜劇と気付かない
精一杯登った山が低かった

寝屋川市 太田とし子
唐津市 井上 勝祝

群衆にまぎれ生きてる顔をする
白旗は振れぬ明日が逃げるから

富田林市 中井 アキ

老いひとり話の種を下さいな

米子市 光井 玲子

花占い互いの歳を笑い合う
ひと言を励みに開く貝の口

八尾市 高杉 千歩
倉敷市 小野 克枝

厄介な用事を休みの朝に言う
たまらなく老いに背いてみたくなる

守口市 森川まさお
藤井寺市 太田扶美代

地球のどこかで助け求める声がある
鬼灯がぼとりと落ちた四月の計

和歌山市 青枝 鉄治
弘前市 斉藤 劔

ふるさとを終焉の地と決めている
食べるのが生きるためだけでは悲し

米子市 門脇 晶子
大阪市 本間満津子

行つて来ます返事ある迄くり返す
本心を包み切れないオブラート

寝屋川市 江口 度
羽曳野市 吉川 寿美

人をもな許すふつから炊けた飯
世の中に一歩遅れてついで行く

富田林市 片岡智恵子
放方市 前 たもつ

種袋さがし残らず置いておく
かけがえのなき人つれて春の雨

米子市 中井 ゆき
鳥取県 さえきやえ

身から出た錆落とすのは辛すぎる
死ぬるのも生きてるのもおかげさま

横浜市 保田 絹子
鳥取県 乾 喜与志

戦友を全部唄える紙おむつ
ひとりごとひとり返事でもめもせず

和歌山市 福本 英子
吹田市 栗谷 春子

吐き捨てたことばが戻る二十四時
リハビリにロンドンデリー聴きながら

鳥取県 土橋 螢
和歌山市 福井 桂香

見積もりの中で子は子の船をこぐ
人並みになろうなろうと辞書を繰る

兵庫県 北川とみ子
弘前市 高橋 岳水

十字路の風が本音を聞きたがる
秋の駅出たまま汽車が止まらない

鳥取市 福田 登美
米子市 野坂 なみ

どの箱に詰めても変わらない空気

和歌山市 宮口 克子

朝の駅 前が急くから後も急く
荒波の向こうは風かうすあかり
後悔の重みで傾ぐヤジロベエ
感動の山には何時も立ち止まる
窓際にいやにやさしい西陽差す
心芽吹いて昔の詩集読み返す
集団の一人になれば普通の子
五分五分に均せば女も捨てられず
子等が病む霧が晴れるを待てぬまま
イライラのわたし鏡にありつたけ
信頼の絆大事にして老いる
揚雲雀 何かを告げているようだ
触れられぬ花なら遠くで眺めよう
ピカピカにナイフ磨いてひとりばち
いい顔だ七十歳の漁師です
頼る子に頼られ軋む肋骨
桜にも世代交代世紀末
散歩でもしたらと妻に追い出され
ブライドは高くハードル越してる
主導権犬が握つてする散歩
足踏みでまた一日が過ぎていく
神様に下駄を預けている余生
騙される方に回って長生きし
逃げ腰の目に安心な場所は無し
答にはならないかなあお多福面
雑兵は損だ得だとすぐに言う

寢屋川市 井上すみれ
横浜市 三村八重子
奈良県 鍛原 千里
弘前市 中山 雅城
岡山市 井上柳五郎
尼崎市 春城武庫坊
鳥取県 西川 和子
出雲市 園山多賀子
泉佐野市 稲葉 洋
羽曳野市 徳山みつこ
倉敷市 田辺 灸六
鳥取県 土橋はるお
米子市 石垣 花子
横浜市 川島 良子
大阪市 榎本 落児
今治市 塩路よしみ
尼崎市 内田美也子
豊中市 田中 正坊
鳥取県 橋本多哥由
横浜市 北沢 街湖
富田林市 大橋 鐘造
倉吉市 野口 節子
唐津市 田口 虹汀
寝屋川市 堀江 光子
弘前市 佐治千加子
枚方市 濱田 良知

病院のはしごも楽な春がきた
根負けし我を忘れる日がこわい
曖昧な返事したまま梅雨になる
甘栗があるだけ剥いている車中
嬉しそう一寸いけずをしたくなる
見えずすぎる眼鏡で世間見たくない
七人の敵を味方にする極意
ピカピカにしたのは他家の台所
昼と夜の間で海は紫に
直言をばらまいて寝るコップ酒
昨夜から尾を引く妻の低気圧
子に波長合わせて悔いのない老後
誰であれピポピポ聞くと胸痛む
裏木戸はルール違反の子に開く
子を庇うかたちで母は丸くなる
逢うて来た鏡が怖い時もある
待っててね その後は音も沙汰もなし

高田美代子さんの混沌とした時の表現が、却って今この時間こそと強烈に響きます。数えきれないほどのめぐり会い、それに伴う喜び苦しみの積み重ね、忙しく流し続けた涙さえ、順に過ぎ去ったことなのに、一塊りの月日は大きな流れの中に吞み込まれて、一瞬のうちで過去となるんですものね。佐藤季頼さんの弔いの証にわたくしまで此の数年間の別れの音がふたたび寄せてきました。菜畑の風の甘さと付む人と、菜の花と、澄んだ証の空氣の絡みが哀しく美しく溶けています。鈴木公弘さんの真水は時事句としても優れていますが、「ごつくん」が利いていて、喉仏を通り越すのは苦渋を帯びた現実だろうかと思ったりします。何といっても真水です。

米子市 小塩智加恵
大阪府 大森 年子
大阪市 川久保睦子
大阪市 津守 柳伸
和歌山市 山根めぐみ
八尾市 村上 剛治
黒石市 相馬 一花
寢屋川市 平松かすみ
出雲市 石倉芙佐子
唐津市 樋口 輝夫
高槻市 川島諷云児
香川県 木村あきら
和歌山市 上地登美代
倉吉市 米田 幸子
日立市 加藤 権悟
箕面市 椎江 清芳
寢屋川市 岸野あやめ

麻生路郎の作品とその周辺

大空の、、、ろ

(89)

橘 高 薫 風

四月十八日(土)午前十一時過ぎAKから放送の川柳選評が大木俊秀氏の爽やかな声ではじまった。課題は「みどり」、快調な出発に私は感慨を深くした。

麻生路郎、中島生々庵、川村好郎、私と担当し、二年前に河内天笑氏に託した伝統のラジオ番組である。

昭和十年九月二十二日、柳翁忌の夜七時三十分からの番組は、講演「川柳翁について」阪井久良伎、「川柳の笑いと涙」麻生路郎、募集吟「秋雑吟」の選評を阪井久良伎、岸本水府、岡田三面子、前田雀郎、岡本映絲の諸氏が担当した。

麻生路郎はこの「川柳の夕」の放送について次のように書いている。

BKから放送を頼まれた。BK案で生れた放送だけにAK・BK・CKの人選についても相談にあずかった。水府君と僕とで人選をした。二人の意見が合致したので、それが大体に於て実現すると考えていたが、BK案はAKで美事に打ち毀された。計画に携わった

BKの人を憂鬱にさせた位に歪められてしまった。最初の家がその儘通過したのは私一人だった。他は持場を変えられたり、オミットされたりした。水府君の役割も選句披露の予定であったが、それもアナウンサーの披露となつてしまった。課題も「秋雑」であつた。もつと川柳らしい題を選ぶ必要が無いかと案じていたが果して結果は面白くなかつた。それは兎に角として人選の仕方が殆んどなつていなかった。全く柳界の消息を知らぬ人の選

び方で、内科医が外科医の仕事をさせられていような、危なっかしいものだった。選ばれた人々の多くは筆者の親しい人であり誰がいいとか悪いとか言っているのではないが、医者でさえあれば学究であろうと臨床家であろうと見境なく手を握らせているようでは滑稽でしかないと思う。この点放送当局のためにも日本柳壇のために折角の催しを台なしにしてしまった憾みがないでもない。

九月の柳翁忌に際して「川柳の夕」を企てられたことには満腔の敬意を表する私ではあ

るが、今後のプロ編成を思つて東京の放送局に次の苦言を呈して置きたい。

人選は官僚的であつてはいけない。それに誰に何をやらせるかを第一に考えなければならぬ。あるものを放送する場合には、その道の人についてよく聴く度量が欲しい。放送委員は神様ではない。知つたかぶりをしてはいけない。今回の放送に際しても、東京三、大阪二、名古屋一、所謂五、三、一の比率で人選をしているが、軍縮でもあるまいし、冗談ではない。真に名古屋に人があれば二にしても三にしてもいいであらうし、適才がなければ無理に一を選ぶ必要はなからう。

これも各放送局の加入者数の比率に據るとの弁護が出るかも知れぬが、それは全くいわけのない事である。

森中恵美子さんと私が川柳選評を引き継いだのは昭和五十六年であつた。放送開始五十年の記念には、露の五郎師匠と対談、大いに助けて頂いた。テレビの「詠めやうたえや川柳天国」も正月とお盆の番組として続けられ川柳熱を煽つた。多くのアナウンサー、アシスタントの皆様を思い出しながら、聞き終つたのである。

大木俊秀、竹本瓢太郎両氏の二奮闘と番組の弥栄を心から願うばかりだ。

尚香のむ

宮西弥生選

樹が騒ぐ私を試す音だらう

雨季に入る前にこころを乾しておく

プライドがつかいかい棒になるひとり

きれいごとだけで終わらぬ遺言書

老いてゆくことを忘れるにぎり飯

生きるため風になびいてる柳

一彩が足りず渡れぬ虹の橋

絵手紙に蓄いっぱい描いて出す

いざの時もう振り向かぬ女偏

雑木林を抜けると哀しみも抜ける

常識の違う子達が伸びて行く

横書きの手紙に情け移らない

姑の道へ近づくまでの七曲り

うれしさを内緒にできぬ赤い薔薇

風みどり嫁速球を投げ返す

退屈な駅が続いて乗り過ぐす

賑やかな春のお金に羽がある

物差しを変えて相手の出方みる

さくら満開酸欠になりそうだ

大阪府 三浦千津子
藤井寺市 高田美代子

八尾市 大内 朝子

池田市 栗田 久子

米子市 政岡日枝子

熊本県 永田 俊子

羽曳野市 吉川 寿美

富田林市 藤田 泰子

今治市 村上久美子

倉敷市 小野 克枝

米子市 林 瑞枝

西宮市 門谷たず子

岡山県 山本 玉恵

鳥取県 土橋 睦子

吹田市 山本希久子

和歌山市 川上 富湖

和歌山市 木本 朱夏

和歌山市 桜井 千秀

八尾市 高橋 夕花

春風が誘うカタカナ語の世界

苦心したあとは見せない壺の艶

葉桜にもとのくらしへ戻される

赤い実を落してくれた青い鳥

プライドがあるから答でてこない

さくらさくら老母の指先冷たかり

税務署に優しい人もいて不思議

ボス決めて子等にも遊びのルール有り

白木蓮恋の終りか花疲れ

あじさいもストレス溜めて赤になる

門を出た言葉追つてもつかまらぬ

負けて勝つ無器用者に出来ませぬ

コンパスの丸に馴染めぬ嫁姑

さくらさくらみんな忘れてあげましょう

物差しを見ると背中がかゆくなる

職人を脱皮芸術家の香り

スイッチポン軽いタツチで暮して

食い込んだ指輪が語る幸福度

明日へ跳ば昨日は昨日の事にして

大風呂敷でシッポ上手に隠してる

プラットホームで振り向く癖が直らない

私語は大嫌いな女がほそるから

過労のように牡丹はらりと崩れ落ち

だんまりは突張りなのか照れなのか

ビールはキリン子供がお世話になってます

西宮市 奥田みつ子

大阪府 神夏磯典子

今治市 塩路よしみ

今治市 野村 清美

今治市 野村 京子

西宮市 牧渕富喜子

横濱市 後藤 早智

米子市 石垣 花子

米子市 内田美也子

寝屋川市 太田とし子

米子市 澤田 千春

神戸市 船津とみ子

出雲市 園山多賀子

西宮市 西口いわゑ

横濱市 清水 潮華

鳥取県 西原 艶子

芦屋市 黒田 能子

横濱市 近藤 道子

大阪市 藤田頂留子

八尾市 村上ミツ子

和歌山市 楠見 章子

奈良県 鍛原 千里

八尾市 生嶋ますみ

羽曳野市 芦田 絢子

八尾市 高杉 千歩

眠れない理由を聞いて寝つかれず
 晩学へあれこれ眼鏡掛けかえる
 五欲から離れられずにまだ達者
 土壇場で目から鱗が落ちた鬼
 そのとおりだった辞引にホツとする
 自画像の夫に暴言吐いてみる
 妻の陽気に支えられての車椅子
 大空の心を知ってから痛む
 結界につまずき酔いがさめました
 痛み止め飲んででも悩みには効かず
 地球温暖化まだ知らぬらし驚の声
 鉢の土だけしか知らぬ家に住み
 性格の違い子供の部屋に見る
 さくらはらはら積み残したる事ばかり
 肩書を並べて門は閉ってる
 引き出しに炎えた日もありサングラス
 花吹雪言葉が堰を切るのです
 万華鏡花の季節が包み込む
 胡麻すりをしなかつたのが自負であり
 向い風受けて大きな鳥になる
 直線に進むと亡母に出逢えそう
 忍従の外なし探す二度の職
 ほんの気持と無理は見せないのし袋
 家計簿の赤を埋めてく詩がある
 愛された形で猫が眠り出す

尼崎市	春城	年代
倉吉市	淡路ゆり子	
鳥取県	石谷美恵子	
大阪市	板東 倫子	
米子市	白根 ふみ	
横浜市	保田 絹子	
岡山市	川端 柳子	
米子市	木村富美子	
松江市	川本 畔	
寝屋川市	岸野あやめ	
守口市	結城 君子	
和歌山市	福重 美子	
横浜市	田中 笑子	
岡山市	大石あすなろ	
大阪市	本間満津子	
和歌山市	宮口 克子	
寝屋川市	籠島 恵子	
貝塚市	池田寿美子	
堺市	志田 千代	
米子市	鷺見 正子	
倉吉市	米田 幸子	
岡山県	矢内寿恵子	
羽曳野市	徳山みつこ	
兵庫県	北川とみ子	
富田林市	中井 アキ	

心の色うつす鏡に亡母がいる
 塵箱に本音を書いて捨てました
 確定申告済んで夫に元気でる
 ノーギャラで三十年の嫁の役
 気前よく飲ませて落す蟻地獄
 タイタニック六十路の涙から春に
 整形に化粧自分の顔がない
 ぬるま湯の中で勝手に爪が伸び
 同じ所で何度も辞書の世話になる
 辛きこと春すぎ夏の虹となる

鳥取市	福田 登美
鳥取市	坂田和歌子
和歌山市	福本 英子
寝屋川市	平松かすみ
米子市	石垣 花子
大阪市	津守 柳伸
寝屋川市	坂上 高栄
倉吉市	野口 節子
和歌山市	古久保和子
豊中市	宇野 義江

千津子さんの句―今日の世相をきびしく受け止めた句に思えます。男性、女性にも通じる社会生活の生きざま。「樹が騒ぐ」これは大樹でしょう。寄らば大樹の陰、今では死語になりつつある時に直面した私達の心構えはどうあるべきかと自分に問うています。大変な世の中になったものです。結局職を身につけるべきが安泰と言うのかも知れませんが。美代子さんの句―いよいよ長雨の季節到来です。身辺を清潔と共に気持の持ち方もクールでまいりたいと思います。美代子さんの清廉潔白、なるほど、なるほどです。朝子さんの句―どうしてもひとりぐらしは、こうならざるを得ないのです。何ひとつ他人さまに迷惑をかけずに頑張るひとりの姿は崇高に見えます。時には少し弱音を吐いてみてもよいのでは。久子さんの句―人生の終焉。初めより終りが事の重大さを教えられる句だけに考えさせられます。人間百八つの煩惱と戦って生きるきびしさが、その陰にまた戦を握りおこさねばならないのです。どうかお静かに、お静かにと言いたいです。

振る

岩津ようじ選



モンローがお尻を振った頃がある
特攻の帰らぬ戦友に帽を振る
義理からむ首は小さく縦に振る
念入りに鈴振る祈り試験前
鈴振って遍路揃いのスニーカー
今年また土に優しい鉄を振る
なりふりは構わぬ若き日の猪突
ライバルへ振る白旗を用意する
そつと発つ故郷の駅振り向かず
ルビ振って老母へ手紙を書いている
白旗をいつでも振れる術がある
首タテに振るだけの椅子空いていた
旗振った兵士還らぬ北の国
賽銭の割には派手に鈴を振る
大吉も仏滅もない鉄を振る

周信 潮華 忠男 一風 有朗 倫子 庸佑 たもつ 隆盛 良知 登美 正雄 保州

素朴

田村きみ子選



ようこびへ母は素朴なよもぎ餅
手造り味噌素朴な味で勝負する
素朴だが一番うまいにぎりめし
素朴さが匂う野良着のワンカット
波風を立てぬ素朴な母の知恵
皺々の手で捏ね回す田舎そば
素朴さに触れると想い出す故郷
憲法を素朴に読めば謎ばかり
仰向かず素朴で建てた父の塔
山菜が迎える墓のある故郷
無着色のタクアンの味かみしめる
鶏がいて薬草きの絵に出会ふ
古里の素朴伝えるそばの味
麦飯にとろろ素朴な里の味
鉛筆を削った頃の肥後守
飾らずに自分らしきで生きてゆく
古稀過ぎてからの素朴な生活ぶり
是非嫁にしたと思う素朴な娘
泥臭い素朴な味にひかされる
素朴さに惚れて田舎の土になる
人の世を素朴に生きたたい指
眠りから目覚めた土器の縄模様

哲子 大輪 白光子 睦子 一花 ちかし 四郎 帆雀 政良 千代 雅楓 妻子 たず子 英子 美也子 蛭 幸子 睦子 久仁於 慕情

鈴振りと気付かぬ神に大太鼓
腹心の部下が突然振る反旗
売られゆく牛が振り向く峠道
尻尾振る犬には餌をたんとやる
頼みもせぬ采配なぜか振りたがり
割る前に振った素焼の貯金箱
振って見る打ち出の小槌音ばかり
歳時記に背く野菜が大手振る
片想い振られることはありませぬ
次の世も旗を振りたい亡友でした
自分史の振られていても振った恋
またしてもチャンスを棒に振る頑固
こっそりと熟語にルビを振る祝辞
無い袖を振ると地獄の門が開く
よく振った尻尾ダルマの目に仕舞う
エリートも首たてに振る蜜の味
税務署へ入ると鬼も尻尾振る
似てるなと振り返る女御堂筋
屈辱と保身の尻尾振っている
さかな屋のおっちゃん旗振る通学路
知恵袋逆さに振っている苦吟
思い切り振った三振褒めてやる

志重 権悟 大吾 剛治 ますみ 晋 雅楓 岳水 叭笑 銀波 恭昌 朝花 一輪 大輪 勇太 よしえ あずま 仁緑 政良 久仁於 正剣 勝視

振るために犬の尻尾は付いている
平成も負けず日の丸振っていた
神の声聞きながら振る試験管
番号を振られ羊の群れにいる
旗振った男一番先に逃げ
人の
日の丸を振ると古傷痛み出す
振り向けば顔は確かに男なり
天
ネクタイを締めると動く尾氈骨
軸
嫌な奴に尻尾振ってる嫌な奴

周信 潮華 忠男 一風 有朗 倫子 庸佑 たもつ 隆盛 良知 登美 正雄 保州

素朴なよもぎ餅
味噌素朴な味で勝負する
一番うまいにぎりめし
野良着のワンカット
母の知恵
田舎そば
故郷
謎ばかり
父の塔
故郷
かみしめる
そばの味
里の味
肥後守
生活ぶり
娘
ひかされる
土になる
たい指
縄模様

哲子 大輪 白光子 睦子 一花 ちかし 四郎 帆雀 政良 千代 雅楓 妻子 たず子 英子 美也子 蛭 幸子 睦子 久仁於 慕情

シンプルな御馳走ですぞ冷奴

素朴だが野に咲く花のしたたかさ

素朴だが佗助凛とお茶の席

君が代を聞けば素朴になる男

木綿しか知らぬ素朴な過疎に住み

見つけた素朴古道の道祖神

竹の子の皮に素朴なにぎりめし

橋出来て素朴な町に来るセンス

地下足袋の素朴が納屋に生きている

はなしして見れば素朴な茶髪の子

園児の絵素朴の中にある未来

素朴さが好きで素うどん食べている

素朴さに温もりがある村祭り

町おこし素朴な味が愛される

木挽き歌素朴に洩れるアナの森

住

素朴さの対極にある京の味

飾り気のないのが寄って酌み交わす

幼児の素朴な疑問から学ぶ

赤ちゃんを抱けば素朴な祖父になる

ネクタイがいっつも曲っている素朴

人

まだ芯に素朴さがあり照れている

泣きやんで少女は風になりました

地

母の宝はとて素朴なクレヨン画 政岡日枝子

軸

ひらがなの封書が入れてある荷物

充子

剛治

勝視

しげお

よしみ

洋

隆風

典子

和枝

あやめ

正雄

美子

保州

寿恵子

正剣

啓子

はるお

圭一郎

勇太

勇太

かりん

美代子

再 び

中島正博選



二度とない今日の景色を撮っておく

再びのない一日を生きていく

青春を趣味に再び取り戻し

次の世も夫婦と決めた洗いお茶

再びの週上に煙たい二女三女

再婚の父に煙たい二女三女

地吹雪は再起の道の一里塚

あの時のトキメキ探す旅に出る

再びのお召しにはずむ古い知恵

再会があるかも知れぬ駅に立つ

再会の涙あたりを憚らず

凡々の月日再びない月日

再現のビデオが証す勇み足

髪型を変えて再び翔ぶ構え

再会を約す小指の使命感

住

再生紙なのに表も裏もある

覆水は盆に返らぬ血の歴史

背な子に見せる再起の靴の紐

ふたたびは戻らぬ決意手紙焼く

二度の職よく振る尻尾つけて出る

人

再職へ華麗な過去は伏せておく

リハビリの再起へ妻の手がぬくい

地

過去の事水に流した再生紙

軸

再会の涙を待っているカメラ

雅城

さち子

松煙

慕情

和枝

岳水

大吾

とし子

四郎

啓子

愛論

洋

克治

正剣

強一

大輪

雄々

好恵

英千子

清史

鉄治

よしみ

天

野村 清美

初歩教室

題一〇

吐田公一

川柳は見付け(着想)が大切といわれます。出題に対してその見付けをするための一つの手法として、先ず辞書を引くこと。出題者は必ずといっていいほど、出題には幅のある語を選ぶはずで、私も初心者を対象とする限り、できるだけ幅広い語を用いております。然るに今回の「口」の題に対して

- 赤ん坊泣く大口は乳首呼び
- 垣間見る嫁の大口大アクビ

○大口をたたきすぎると腹が勝ち
と一人の方で大口ばかり三句。これでは見付けが甘いといわざるを得ない。また勝の字は漢和辞典にもない文字。投句前には一度読み返し、誤字・脱字のないようにしたいもの。

添削句

○極楽に行くまでつける口の紅 栄翁

下五に難 句意は異なるが

▽極楽へ向う老母に紅を引く

○口べたが会の終りの幕しめる とよ子
意図するところは分るが、上五と下五の関連性が薄い。

▽口下手のショートスピーチほめられる
○災のもと弁解出来ぬ口

中六以降に一考が欲しかった。
▽災いのもとまいてきた減らず口

○ほろ酔いの口三味線で帰る父 ミツオ
見付けは実に面白い。軍配は原句。

▽口機嫌な口三味線の父の酔い 睦子
○消費税口実にして値上げする
擬人法を用いるとよいのでは

▽値上げする口実を生む消費税
○口減らし老母を背負って歩けない 慕情
これは昔話だけに現在調で詠まない方がいい。

楳山とすれば過去となる。
▽楳山へ老母を背負った口減らし 雄幸
○頬膨らませ口笛鳴らす句の顔
内容を適切に表現するように

▽合格へ口笛吹いて孫帰る 省子
○セロテープ貼りたい君の動く口 省子
下五に難

▽よく喋る口へ貼りたいガムテープ
○口紅をきれいにつけて若くみせ 美寿子
口紅で若くみせたというだけでは説明句。

▽口紅を少し濃いめに唇を翺ぶ

○口過ぎは如何に聞かずもがなのこと 哲平
表現に振幅がない。

▽年金の口過ぎ代りばえもせず 郁子
○つかみ取り出口は狭く欲こぼれ
単なる措辞の問題。

▽つかみ取り狭い出口に欲こぼれ
○怒り心頭に達し口きけず 八重子
表現が堅すぎる。

▽口きけぬほどに頭へ血が上り 奴夫
○常識の範囲で証人口軽く
一席何万円の接待も常識という役人根性を

▽常識の範囲と証人席の口 美也子
○うっかりと口滑らせて悔むこと 美也子
○聞き上手つい喋らせる母の業 美也子
この二句を咀嚼すると

▽聞き上手に口滑らせた内緒ごと
○への字口物言いたげに書いてある サト子
説明句に近い。殊に下五の表現に要一考。

▽文句いたげな老父への字口 茂代
○無口だがその一言が後を引く
この場合会議などの舞台装置を

▽会議室無口の意見で覆り
○赤い口紅女の胸に秘む決意 セツ子
口紅は通常赤いものですから、敢て赤いと

するより、語句を節約すること
▽お別れの決意新たに口紅を引く

○口先の親切見抜く術が出来 円 女

下五がこの句を駄目にしてゐる。

▽口先の親切見抜く年の功

○親切の積りで差し出口をする 義 男

差し出口をしただけよりそこに何か一言ブラスする。

▽親切のつもりが仇の差し出口

○口だけが離婚する気の娘の未練 幸 枝

上五が気になる表現

▽口先で離婚する気の娘の未練

○口喧嘩今夜は風呂も飯もない トシエ

ユーモアのある表現で原句に重配

▽口喧嘩の果ては女のストライキ

○逃げ口は一つ開けてる妻の愛 智加恵

このような場合は誰(妻)としなくてもいい。

▽逃げ口は一つ開けとく思いやり

○愚か者子離れ出来ず口挟み 方 子

上五がいたけない。

▽子離れができず口出して悔いる

○口紅の色を替えてもパツとせず 路 子

下五がパツとしない。下五を大切に

▽口紅で気分を変ええる菜種つゆ

○口答え茶かすつものりの妻の知恵 忠 男

この勝負水入り

▽妻の知恵ちやかしながらの口答え

○電話ベルやり場所のない食事とき よし子

口をモグモグさせるような背景が浮ぶよゆうに考えてみられるとよい。

▽電話口言葉が詰る食事とき

○口開けて一言で待てる歯科の医師 崇

てー、の点は不要。また下五の医師という

ところが難。見付けはいい。

▽口開けたまま待たされる歯科の椅子

○宵の口世間と時間違い過ぎ 早 智

何んとなく分る気がするが今一つ

▽終電も若い世代は宵の口

○口寄せて初キスの味なつかしき 義 江

上五と中七は同義語。川柳はできるだけ口

語体で作る。

▽初キスの味なつかしむ遺影見る

○口約束をやさしい風に乗せてやる ふ み

思い込みの句(自分だけで分る句)

▽初孫との口約束を反古にせず

○口任せらしいとわかるその素振り 武 治

▽口任せらしいとわかるその素振り

○口車上手い話に乗せられる 晚 翠

同想句が非常に多かった。口車は上手い話

にきまつているので同義語と言えから、

上手い話を省略すると、もっと内容のある

句が詠めるのでは

▽口車に乗って奈落の底へおち

佳句

寝たきりも命を繋ぐ口を開け 一 乗

(下五に一考あればなおよかった)

橋正が終りハンサム孫の口 山 雅 子

仲人の口を信じて共白髪 信 子

口コミの効果に店が助けられ 純 子

災いの元とも知らずベチャクチャと トキ

死にたいが口くせの友医者通い 志 重

口裏を合わせて長い夜となる 芳 水

(秘密を抱いた夜は長い)

口遊みはずんで出来た手編み服 みやこ

(手作りの喜びが如実に)

ストレスの捌け口捨てにショッピング 益 子

(女の心理がうまく)

口コミがちらしに勝る店の味 徳 三

(中七がいい)

娘は嫁ぎピアノ無口になったきり 美 子

(娘が嫁つた淋しさを)

電話口はずんだ声でさくらさく 要 子

(合格の喜びを見事に)

口止めの噂話は尾ひれつき 寿 代

(噂話のもつ宿命を)

煩惱の出口で逢つた寒念仏 アキ

(下五の着想に脱帽)

私の句

口当りいい酒で酔い膝枕

路郎賞 候補作品中間発表

川柳塔賞

平成十年一月号、四月号

路郎賞候補作品

吉岡美房

小池 しげお

人生はいろはかるたのようなもの 稲葉冬葉
初孫を妻に取られて寝正月 北岡波留吉
サヨナラをしたのに電話かけてくる

川上 大輪

約東通りに生きてわたしも花の種 池 森子
一番怖いのは神様のスケジュール 長浜澄子
私のバックボーンは日本海 鷲見 正子
一家心中の記事きつちりと十二行 新家完司
誰でも合うよう骨は抜いてある 川上富湖
こころ許せばボトリと落ちる寒椿

芽がでたらあととは見て見ぬふりをする 門谷たず子

数珠玉の一つに隠す過去の罪 高瀬 霜石
藪野鯨虎狼

歯並びの良さに油断をしてしまつ 鈴木公弘

奇跡など当てにはしない父の靴 牛尾 緑良

そつ言えば近頃空をみていない 西出 楓楽

一滴の水の中にもある宇宙 西口いわゑ
有為転変どうあろうとも福寿草 三宅 保州
消しゴムが足らぬ私の一代記 林 荒介

園山多賀子

四六時中哀歎去来愚を重ね 上田佳秋
十指みな起伏に耐えた自負がある 久保 正剣
起立多数その都度政治悪くなり 工藤 吟笑
親の意にそむき子供は皆駆ける 中井 ゆき
余情どつぷり旅の鞆が片付かぬ ストレスのたまつた服を吊つておく

遠い所へひと声かけて箸を割る 吉岡きみえ
こぼれ種大地しつかり受けとめる 長浜 澄子

川崎ひかり

明けまして少し良い事あるように 茂理高代
豆を撒く三面記事の中へ撒く 千葉 風樹
佳き時代春の小川とともに消え 瀬戸まさよ
牡丹雪今亡き人の湧くごとく 春城 年代

板尾 岳人

人間という良心を持ち歩く 川島颯云児

もう春のように描けぬ男の絵 田中 透太
天平の川がながれる槍鉋 三宅 不朽
上げ底のような男が多すぎる 赤川 菊野
裁ち鉄おんなの性をざくざくと 野村 京子
近道も抜け道もない母の地図 岸 桂子
時の止まるは美しきかな氷り滝 桑原 道夫
赤い薔薇死にたくなつたときに買った

妥協せぬ海ぼろぼろの石を抱く 新家 完司
春雷を怖いとおもつ罪があり 藪野鯨虎狼
待つだけは待つたと艶を吐く花芯 鈴木 公弘

奇跡など当てにはしない父の靴 佐治干加子
一徳の中の一人の存在感 牛尾 緑良

転がらぬように踏んばる夫婦箸 諏訪 柳々
神に祈り神に頼らず陽を仰ぐ 川上 富湖
蘭田 猿杓

小島 蘭幸

後ろ向く悲しい癖が治らない 川島颯云児
札束に目が眩まない金庫番 乾 喜与志
犯人と重なる部分少しある 久保 正剣
流木をみつめ川上をみつめる 三宅 不朽

母を想い母を忘れている旅よ 山本希久子
遺書開くときは神妙だったのに 三宅 保州
樞の樹にもたれたままでいた月日 林 荒介
恥ずかしながら遺産は臓器だけである

奇を銜つものなし石臼の重さ 高瀬 霜石
時の止まるは美しきかな氷り滝 牛尾 緑良
桑原 道夫

一家心中の記事きつちりと十二行
誰とでも合うよう骨は抜いてある
錯覚の恋も終つて髭が伸び
萩野鮫虎狼

川上富湖
鈴木公弘
川上大輪

河内天笑

思いやり過ぎてあなたをおこらせる

門谷たず子

六十の夢は掴めるものを追つ

嵯峨根保子

青い地球へ愚かな線を引いている

山根めぐみ

父さんの絵にはいつでも山がある

植田一京

川柳塔賞候補作品

宮口笛生

古稀過ぎてなお踏み迷つ道ばかり
榎谷郁子
光るものないが笑顔を持ち歩く
西村りつえ
足して2で割れば何処にもいる夫婦

藤田 芳郎

起死回生リングは赤く熟れている

的場十四郎

現在が幸せならばそれでよい

川島 良子

新世紀に似合う仮面を彫っている

藤田泰子

我が儘は言うまい妻も疲れてる

武田 正美

握手した手の温もりにだまされる

傍島克治

ゲンコツで叩く仕草も愛だろ

田辺 鹿太

母さんの後から覗くお父さん
驚見 正子
寝違えた首でピカソの絵が解ける

お山見て出動お山みて帰宅
古久保和子
生きること死ぬこと花に教わりぬ
櫻庭 順風

食堂車とりわけ婦人楽しそう
中村ゆきお
食堂署を出れば柳が青かった
麻生アート

ちよつといひ話だまつていられない
村上ミツ子
ふたありで飲むと多少は多くなる
片上明水

側室のようにすまして座る犬
神夏磯典子
いも粥をふと思いつく寒月夜
山本 義子

君の名は知らぬが顔は知っている
谷口次男
甘い顔した渋柿に騙される
大西 文次

さりげなく脱いで表情みせる足袋
塩路よしみ
窓ガラス拭けば償い晴れるかも
西山八重子

賞味期間切れた余生に火を通す
一本 勇太
拳骨という無器用な父の愛
木村 親路

善いことを見る眼の位置をつけ変える
山本 正光

川島 諷云児

大阪で採れたおこめも越ひかり
田辺 鹿太
人嫌い世間ぎらいの二重窓
原 みさを

あげたいが私の臓器は古すぎる
清水金太郎
本当は泣き虫なんだ影法師
加藤 権悟

十八の憧れあれは蟹気楼
中居 善信

匿名にすれば告白できるかも
村上久美子
喪中挨拶そうか黙つて逝つたのか
軸丸勝巳

夕食もチンチンと母は留守
田中 笑子
喜寿傘寿卒寿小朝に会うまでは
梶本 哲平

水性のペンキで心青く塗る
大川 晩翠
反抗期過ぎると海も風いで来る
渡邊伊津志

賞味期間切れた余生に火を通す
一本 勇太
玩具にもナイフピストル持たすまい
湊 修水

酒一升ほどの相談なら乗ろう
桑名 孝雄
レントゲン私の何処を覗くのか
驚見 章

小林 由多香

どつちかが呆ける明日が恐ろしい
岡田たけを
澄んだ川知らないままに魚泳ぐ
福重 美子

我が儘は言うまい妻も疲れてる
武田 正美
晩学の一つ覚えて十忘れ
村上久美子

定年の日から治つた肩の凝り
角野 仁清
何度でも辞書ひく意欲だけはあ
立蔵信子

ユーモアはないが笑顔は持っている
小泉 久子

せいっぱい生きる両手を陽にかざす
西垣美知子
人は皆やさしきものよ夕焼ける
西山八重子

毛並みなど気にせず遊ぶ犬の群れ
松本 良
好感をもてば仁王の目もやさし
吉村さち子

定年の日から夫婦の散歩する
近藤 道子
賞味期間切れた余生に火を通す
一本 勇太

長病みの箸に湯豆腐ささこぼれ
宮本 末子

福本英子

人嫌い世間ぎらいの二重窓
打つ釘も抜く釘もある古希の路
故里の塩をちよつぱり舐めてくる

火傷してから読み返す但し書
鬼は外豆の数より多い鬼
ライセンス両手に余り職がない
足一本足りないカニを買ってくる

ライバルに隠れて研いだ爪が折れ

本音吐くたびわたくしを脱いでいく

スーパードで七草摘んで粥を炊く
忙しくしている歳を忘れてる
餅焼いて夫の話裏返す

風邪ひいた日から日めくり進まない

二時間の式で成人して戻り

榎本吐来

男にはもう懲り懲りと慣れた酌
勇退という名で秋へ吐き出され
言いかけて腹に押し込む齢の功
裏口も作って会議無事終り
病院のはしごが出来てまだ元氣
独楽回し父さん威信取り戻し

お祝いの包み本家の意地も入れ
寺の子もプレゼント待つクリスマス

おちよこから次々本音こぼれ出す

貰い物賞味期限を追ってる目
五歳児の群れの中にもある序列

福浦勝晴さんを悼む

芳地 狸村

岸和田川柳会の顧問で、入院されるまでは長い間、川柳塔社の同人、理事をしておられた勝晴さんの訃報に接したのは、三月二十四日の朝、奥さんからの電話でした。亡くなられたのは三月二十二日午前九時、享年八十五歳でした。

二年半前から体調をくずし、入院療養に励んでおられたが、脳梗塞で永い旅に立たれるとは考えてもいませんでしたので、突然の訃報に驚いています。岸和田川柳会にとつては痛恨の出来事です。

勝晴氏は昭和十年ごろより川柳の句づくりを志し、岸和田市在住の青木三碧・中野三志郎さんと交流、その後、川柳塔社同人になる。読売新聞社の時事吟で月間賞を受賞される。きしせんぐ亀利抄の選者。川柳塔、新聞柳壇、他の柳誌への投句などに

飼犬がクツションになるわだかまり
山 康子
広辞苑 時代の波に追いつかず 三好 専平
白黒をはっきり言わぬ知恵で生き

こんなにも偉かったのか聞く弔辞
大谷幸次郎
近藤 道子

活躍される。

同氏の温厚な人柄は川柳塔社、岸和田川柳会の柳友のよく知るところです。

雅号の勝晴は、息子さんの名前を用いておられたので、勝晴さんと電話がかかると奥さんが、息子さんと間違えて困ると言っておられたように、氏のユーモアを得意にした勝晴川柳ともいえる句を紹介します。

死んだほうがましとぬげぬけ生きてきた
歩かせるつもりポチに引きずられ
いきまいて行くパチンコで返り討ち

スマートなハンサムよその旦那さん
旦那さんはジュース嫁はんだジョッキ
マツタケに言わずと人間ケチばかり

今頃は、岸和田川柳会の高橋操子・植山武助・三輪通彦さん達と天国で川柳をたのしく競い合っていることでしょう。

ユーモアをさけて翺ひ立つ雲の峰
法名 光岳浄勝信士
狸村

ご冥福を心からお祈り申し上げます。合掌

秀句鑑賞

—5月号から

門谷 たず子

かすり傷ほどの悲しみ笑っちゃお

塩路 よしみ

喜びも悲しみも、生きている証。ちっちゃな悲しみなど笑いとはしてプラス志向でゆきましよう。読む方も明るい気持になれます。

可も不可もなく定位に夫婦著

吉村 さち子

同感句です。可も不可もない有難さ、定位に二膳の箸を並べられる倅せを、一日でも長くと思ふこの頃です。

唐草に包んだ母の青春譜

一本 勇太

母にも青春がありました。母をなつかしむ気持を唐草模様にして、ベテランの句。

父の夢子の夢風は乱高下

田中 笑子

面白い見付けです。父と子の夢が違っているのは？。父の夢もゆるら迷っているのでは？。

おーいお茶りモコン今日は電池切れ

金森 徳三

近頃川柳に笑いが少ないと言われます。こんな句を川柳味と言うのでしょうか。たまには電池も切れます。少しはご自分でどうぞ。

水仙よ起床ラツパは亡夫へ吹け

倉垣 恵美

黄色いラツパ水仙が見事に咲きました。もう一度お早くと起きてきてほしいご主人への思いがひとと感じられて、こちらも胸が切なくなります。どうぞお元気でね。

少年の夢がこぼれる春の駅

太田 扶美代

春の駅には新しい希望が、夢がこぼれています。少年達も今の気持を忘れず、まっすぐすこやかに伸びて行ってほしいもの。

ランドセルもう偏差値が待っている

大野 蒼流

孫達の受験戦争を見ていてつくづく教育の歪みを感じます。可愛いランドセルもすぐに巻込まれてゆくのでしょうか。同感句。

噛み合わぬ感情線がショートする

湊 修水

よくある事ですね。思い通りにゆかぬがこの世の習い、できるだけショートさせないように暮らしたいもの。上手な表現です。

石一つ投げて出方を確かめる

芦田 絢子

気の小さい私にもどこかにこんな所があって、同感しました。もっと勇気を持って前進した方がいいのかも知れませんね。さまざまな杖を頼りに生き延びる

小泉 久子

一人では生きてゆけないこの世、さまざまな杖のお世話になりながら暮らしているのですね。普段忘れがちな感謝の気持を思い出させて頂きました。いい句だと思います。

思いやる心を作り出す笑顔

波辺 伊津志

あたたかい句です。笑顔は思いやる心を作り出すものか、思いやる心が笑顔になるのか、どっちだっていいですね。いつも心に太陽を顔にはほえみを、という言葉を忘れずに。

しっかりと巻いてキャベツの護身術

角野 仁清

無口でも味方になった腕時計

門脇 晶子

花作りこんな平和が来たわたし

円増 純子

淡々と癌病棟やひなまつり

林 風子

力足らずの鑑賞でお許し下さいませ。

葉忌

本社 五月句会

五月七日(木)午後五時半

アウイーナ大阪

西尾葉前主幹が亡くなって九二年、五月の本社句会を葉忌とし、その第一回が、七日開催され一四名の参加者に西尾家より記念品が贈呈された。また新家完司氏の句集「平成十年」も出席者全員に配られた。

お話は板尾岳人氏。昭和十一年の五月に起きた阿部定事件を取り上げる。猟奇的な殺人事件でありながら、世間の反応は、驚きはしたものの暗いものではなかったらしい。激しい気性の持ち主であり、独占欲の強さがさせた犯行であったと言ふ。

裁判記録、訊問の様子は、告白文の最高傑作と言われ、以後の小説にも度々登場する。初出席は堺市の志田千代・見本ちや子、大阪市の川久保睦子・中澤孝子・榎本洋子、大阪市の安永暁子さんと女性ばかり六名。

月間賞は和歌山市の川上大輪氏に輝く。(司会―朝子)(記名―月子・いわゑ)

(受付―英千子・寿美)(清記―希久子)

席題「さわやか」 中林醉虎選

娘らの声がお好きな道祖神

さわやかな今朝の占い信じよう

偏差値がさわやかな子を消していく

さわやかな風が河童の皿を干す

さわやかな顔で舞妓のおいでやす

さわやかにさよならをする筈だった

さわやかに別れて書い書いた暴露本

さわやかな風森林浴においてませ

さわやかな恋さわやかに通り過ぎ

さわやかな声で一浪すると言ふ

さわやかな風に欠伸をしてる鬼

さわやかに私を通り抜けた人

雄大な入日に向かい缶ビール

さわやかな風さわやかな人に逢う

サイフォンの香にさわやかな日を期待

さわやかな空だな妻と豆を剥く

珈琲を飲んで何にもなく別れ

さわやかに生きたし欲を少し捨て

意見通つてうれし握手する

核ゼロのさわやかな風待つている

敵に塩おくるさわやかな笑顔

曇天を割って緑の風その他

こてんぱんにやられた汗が心地よい

遺言信託さわやかな提案だ

单身赴任終えさわやかな切符買う

さわやかな口からきついことボンと

さわやかな花子 島出て嫁にゆく

達子

睦子

哲郎

シマ子

柳弘

いわゑ

大輪

頂留子

みつ子

寿美子

典子

義文

諷云児

澄子

扶美代

鬼遊

孝子

一一三

一二三

ダン吉

寿美

岡美代子

大輪

弘一

一三三

月子

弥生

さわやかに筒めしを食べている

サイターよラムネよ雨期を飲み干して

さわやかな風に恋する山の靴

さわやかな空へ献体考える

快晴だ全力疾走試みる

住

左遷地の他人の笑顔がさわやかに

修羅の椅子 子に譲つてのさわやかさ

五月晴れ天女が衣干しにくる

さわやかに生きます夫は逝つたけど

さわやかな男で何時も金がない

人

さわやかに預金通帳0となる

地

献血の手帳にのこる爽やかさ

天

冷奴のさわやかさには敵わない

軸

さわやかな敗者で2位の台に乗る

兼題「にこにこ」

母の瞳をにこにこさせる鯉のぼり

にこにこの父の写真が見当たらぬ

にこにこの妻がにこにこなにかある

葉忌や師はにこやかに羅漢仏

阪神連勝はにこにこ飲んでるビール

子想外の入出にこにこ淡路島

にこにこ七坂越えた笑い皺

にこにここと勇氣をくれた車椅子

しげお

森子

義子

楓楽

扶美代

弥生

一風

睦子

あやめ

いつふみ

寿美子

保州

富湖

醉虎

照子

剛治

倫子

外的

隆盛

射月芳

壺

門谷たず子選

窓口の笑顔に税務署かと尋ね
 オアシスの芥子にここにこ癒やされる
 一升瓶提げてここにこ友が来る
 ここにこ金の苦勞の浮動票
 ここにこ握手で顔で書いてやる
 始末書はここにこ顔で書いてやる
 ただ取り柄にここにこ毒の無い男
 売り言葉にここにこして受け流す
 企みがありそう妻のここにこに
 さくらんば ここにこ風に身こもりぬ
 ここにこ嘘の続きを聞いておく
 かあちゃんにここにこして万馬券
 さわやかな笑顔言うこと言うてくる
 君知るやにここにこ顔の奥の奥
 ここにこ骨抜きに来た孫娘
 お日様がここにこみんな生きている
 エビス顔世間のとげを抜いている
 ここにこすると男は誤解するようだ
 ここにこ敵ですかそれとも味方
 核ゼロのその日にここにこある地球
 老いて行く技はここにこありがとう
 詐欺師かも知れぬにここにこ寄って来る
 歯科医とはここにこ逢うたことがない
 ここにこして妻へ迂闊に近寄れぬ
 たっぷりとお乳を飲んだ子の笑顔

住

柳宏子
 英王子
 保州
 房州
 いっふみ
 いっふみ
 ますみ
 酔虎
 義子
 稚代
 狸村
 一三
 鹿太
 重人
 隆盛
 悟郎
 洞庵
 千代
 ダン吉
 保子
 あやめ
 かすみ
 大輪
 ♀女
 武庫坊
 楓楽
 森子

ここにこ法螺を吹くから憎めない
 ここにこ聞き流しとく売り言葉
 八百羅漢の一つに笑いうつされる
 地
 ここにこ胸のマグマを覗かせず
 天
 ここにこの好きな鏡と暮らして
 軸
 兼題「声」
 三宅保州選
 おかえりの声が聞こえるママのメモ
 鳩尾のあたりに声をつまらせる
 高砂や 自棄っぱちな父の声
 間違われ娘で通す電話口
 声落としそれほどでない話聞く
 大声より筋の通った小さい声
 泣き声も二人目なれば動じない
 子の熱が下がったらしい叱り声
 うぶ声が十指握って天を蹴る
 泣き声が武器と子供が心得る
 子育ての声は十色を使い分け
 控え目な声が核心ついてくる
 ひと声で我に返った橋の上
 ヒステリックな声でお経をあげている
 先生の声で元気になる患者
 いたわりの声を鎮痛剤にする
 ひと言をかけたら窓が開きました

三男
 飄云児
 天笑
 備昭子
 扶美代
 たず子
 剛治
 螢
 正子
 いっふみ
 孝子
 洋
 一步
 保子
 ♀女
 洞庵
 保子
 澄子
 森子
 寿美子
 かすみ
 富湖
 金太

見かけたらひと声かけて下さいね
 一声を自分にかけて立ちあがる
 かけ声で起きるよつこらとこいしょ
 声変りそれから喋らなくなった
 声変りそれで自分声がない
 山村留学声もでっかくなつた
 魚屋の聲に鰯が目をさまし
 愛想いし声できつちり断られ
 パリトンでやんわりお茶に誘われる
 大声の父にびくともしない母
 夫には私の声が聞こえない
 その道は待てと仏の音がする
 神の声聞きたく森の奥に行く
 歓声を罵声に変えた馬の鼻
 檻の罅声かけようがかけようが
 声のする方に鬼さん待っている
 華やかな声に傾く鬼の面
 雑音の中のひとつは天の声
 住
 飛行機の真下に住んでいる地声
 聞き洩らしたのは天使の声だろ
 時どきは悪魔の声と眠ります
 鉄橋の下ならどうぞ唸り声
 さよならの声がしそな待ちぼうけ
 人
 視聴者の声でヒロイン死なせない
 すすり泣く声が両手にひっかかる
 地

稚代
 いわゑ
 倫子
 柳宏子
 義
 萬人
 重人
 月子
 みつ子
 しげお
 弘一
 鹿太
 路児
 大輪
 薫風
 洋敏
 夕花
 楓楽
 外吉
 美代子
 扶美代
 隆盛
 哲郎
 正雄
 森子

天

勇氣出し少年に声かけてみる

たもつ

軸

金魚売りの声を聞きたい昼下り

保州

兼題「達筆」

小池しげお選

達筆の色紙に栗生きている

笛生

達筆なだけで尊敬してしまふ

剛治

達筆でその気にさせるお品書き

アキ

達筆と無口は遺伝するらしい

鹿太

ご達筆どんな美人か見てみたい

靖巳

達筆だから心がこもっていない

金太

達筆の友と少し距離をおく

扶美代

達筆で届いた友の頼みごと

庸佑

達筆の苦手は数学科英語

射月芳

達筆な釣書会っだけ会って見る

ますみ

達筆を褒めると仮名を使わない

二南

達筆はいつの間にもやたら人格者

一步

達筆な妻に何もかも任せ

月子

達筆へいつも自分で酔っている

楓楽

達筆へ敬意を表しているわたし

恵子

達筆の釣書につられる見合い

周信

恋文が達筆なので冷めてくる

弘一

達筆の履歴書一次通り抜け

哲郎

達筆でゴミ捨てると書いてある

義

達筆に無心状とは気づかない

正一

達筆でないけど母の文字が好き

靖巳

扶美代

扶美代

扶美代

扶美代

扶美代

扶美代

扶美代

達筆に人柄があり顔がある

狸村

囑託で残してもらおう達筆家

正雄

達筆の手紙にいつも酔わされる

洋子

達筆に一步下がって読む手紙

夕花

達筆な手紙をもらい肩がこり

義

達筆を見込まれ本社勤務する

弥生

達筆な句碑の字読めず風薫る

シマ子

世が世ならという達筆の借用書

保州

達筆な字で果し状が来る

昭子

達筆で心の中が覗けない

睦子

落書きが達筆だから憎らしい

諷云児

達筆で届いたことわりの手紙

森子

達筆に年はとらない墨の艶

ますみ

命名に祖父の達筆生きている

たず子

達筆の語尾が膨らむ花便り

森子

達筆の詫び状余計腹が立ち

大輪

達筆で説得力がある葉書

正雄

達筆な人へ返事を書いている

美代子

達筆でしようむないこと言うてくる

恭昌

達筆の遺言状がまだ書けぬ

希久子

兼題「慌てる」

しげお

達筆が知らん漢字を書いている

高杉鬼遊選

珍客へめざしの匂いうろたえる

安美代子

海峽を越せたらあとは慌てない

アキ

ビッグバン慌てるでない一円貨

正子

間違つて我が家に止る救急車

典子

父さんが慌ててはいた後ろ前

千代

灰撒けど花の咲かないおじいさん

シマ子

立ち話こげくさいのはうちらしい

寿美子

エルニーニョ季節も慌て者だった

富湖

慌てるな道は一本だけでない

大輪

カクレンボが好きならわたしのパスポート

美代子

慌てなくてもなるようになるお葬式

絹子

慌てて金持ちが金の行方に慌てる

弥生

慌てて墓石を買った慌てる者

義子

慌てても急に敬語が出てこない

倫子

ふいに帰って私を慌てさすあなた

英王子

慌てるなと慌てさせてるのはあなた

希久子

エルニーニョ少し慌てた方がよい

千歩

慌てるも氏も素姓ももろに出る

楓楽

一度慌ててみたいと思つたつむり

度

慌てても粗品必ずもろてくる

千秀

ふきのとう少し慌てたぬくい風

絹子

慌てないまだお見合いは三度目だ

周信

婆さんが結婚するて言うて

寿美子

早い夏 花も毛虫も大慌て

洋

タイムサーピスあと何名と慌てさせ

頂留子

竹の子よ慌てるでない春二番

暁子

曲水の宴慌てぬ筆の先

高栄

とんだとこでおしゃべりお米と会いました

醉虎

あわてるなお前褒めてる訳じゃない

文秋



毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

賑やかな一群降りて空気が抜け
白粉気も停年もない厨ごと
賑やかにやろうと我が家使われる
魂の揺れを鎮める海の色
能面の白さに塗って心閉す
陽だまりに白粉花の歌がある
賑やかな輪の中にいて一人なり
おしろいをはたいて女立ち上がる
白粉の厚みとともに増えるウン

せつつ川柳万画会

延寿庵野鶴報

香住 喜美子
欣史子
清芳
シマ子
弘直
能子
田実子
あずき

清澄
興次郎
真由美
富枝
喜久造
孝治
昌三
富美子

夢の中心さぐりて掴む青い鳥
手さぐりてでベビーは乳房ほしいまま
おう雑草かお前も雨を待つてたか
泣くじやない待てばまた咲く紅椿
雨の日も晴れる日もあり夫婦仲
柔らかに言葉に恋芽ぶく
手の届くあたりへ期待隠しとく
芸術へ脱ぐ柔肌はためらわす
ポツリ来た雨に慌てる干しふとん

岸和田川柳会

長谷川呂万報

好治 久美子
郁子
加寿老
満寿蔵
永壽
野鶴
勇次郎
夢之助

類似品のゴリラと睨みおつている
例年が隔年となる子の帰省
例年のキャンパ地選手待つ地元
校門が例年迎える泣き笑い
ばあさんに老後の蛇を握られる
女子長命妻の老後が気にかかる
神様が再婚しろという老後
紅さした乙女のような桜餅
美味しそう和菓子に弱い下戸の父
船よりもイチゴ大福よく売れる
八ッ橋と生八ッ橋の京土産
手作りと書いた和菓子がうけている
参道の和菓子楽しい寺参り
本家元祖古い屋号のある和菓子
老舗の味が劣らぬ母のよもぎ餅
看板の味が生きている京和菓子
幼子のアイドルになるお婆ちゃん
捨て猫が老人ホームでアイドル

わが夫アイドルにして暮そっか
低金利ちよっぴり淋しくなる老後
残り火をかきたて好きな句をひねり
アイドルと言われた頃もある熟女
人気下降豪華衣裳で食い下がら
アイドルを活字でおどす週刊誌
アイドルが男泣きした世界新

高槻川柳サークル卯の花

川島諷云児報

苑子 萬の ひで 松風 一齋 富志子 白光子
晴美 秀夫 茶の子 泰雄 武庫坊 女
とし子 柳宏子 二南 芳子 スミ子
靖巳 萬の 紫香 白溪子 波留吉 高栄

胸の線だけは別なのダイエツト
 エリートへ親は期待を双葉から
 三日月がふくらむ日までもう待てぬ
 ヴィーナスの胸にふくらむ白木蓮
 春の野を行けばふくらむ一行詩
 淋しくてやさしい鬼と手を結ぶ
 意見するはずがさされてる縄のれん
 出来合いで老いの命をつないでる
 シツベ返しを考えているパンの耳
 最後かもしれない桜を待ちわびる

川柳塔おつばこ吟社 木村あきら報

参観の日のカアさんは別の顔
 追い越した時から寒くなる背中
 まだ早い言いつつ過ぎた適齢期
 不景気をゆくり耐えて春を待つ
 追いつた後に孤独が降りかかり
 檜山も春は花咲き鳥唄う
 ほんの気持とつとつ懐空になる
 玄関に空が恋しい飾り風
 ここだけの話尾が付きヒレが付き
 黒いから何時もカラスは損をする
 様々な思惑絡め胸算用
 饒舌がほしい裸木のある窓辺
 タンポポがホームに咲いた無人駅
 記念樹に八十すぎて話すとは
 夢を追う事に疲れた絵の具皿
 先輩の過ぎ去りし影追いかけて

杜的 澄子 艶子
 (幼)恵美子
 マツエ 志子
 照子 重人
 ルイ子

坊太郎 かおり マツエ 輝夫
 放任 いさむ
 治延 貞仙
 文仙 よしみ
 吟笑 くに子
 治 あきら
 チカエ ひかり
 なみ子

大漁旗波のウネリも唄い出す

川柳東大阪 森下

余生まだ燃えるものあり黄水仙
 酔い醒めた水に男の朝がある
 汚れなき天使の顔にある寝息
 より道をききた父の人間味
 カロリーを気遣う妻の味に慣れ
 明日咲く花へカロリー補給する
 グラムまで量って妻は肥えている
 カロリーのこと詳しく料理下手
 街の灯が近くて少女帰らない
 発掘の現場古代が近くなる

はつ恵 朝子 猪太郎 雅文 信治 あや子 シマ子 度 治也 湖風 晋吾 東雲 頂留子 文秋 恭昌 たもつ 柳伸 太郎 愛論

この景気虎に聞いたら首を振る
 ご機嫌斜め首を洗って出直そか
 首覚悟したら言いたい事が言え
 浮気発覚妻鬼の首とつたよう
 少々のも事で動じぬちちの首
 呼ぶよりもせしめる気楽な仲間内
 合格の知らせ一気春を呼ぶ
 山の子へ入道雲も呼んでいる

サークル檸檬 小林 一夫報
 憎しみが募る愛しすぎたから
 埃まみれの本に一日釘つけに
 浮世の埃 払って雑箱に入る
 とは言っても無理をしなけりや生きらぬ
 一からの出直し叩き出す埃
 連綿と回る宇宙の埃達

犬ふぐりかたまり咲くはさびしさか
 何かすることがあるから生きている
 人の世や泣いてすむことすまぬこと
 身のほどを知らぬ大きなイヤリング
 佐川川柳会 赤川 菊野報
 人妻と歩くドラマは炎の匂い
 春風へ女ドラマの眉を描く
 栄転か左遷か春の荷が動く
 清張のドラマに夜を狂わさず
 悠々自適朝の連ドラ欠かさない
 母さんのドラマが眠るセピア色
 ヒット曲想い出させるメロドラマ
 古希となり涙腺故障メロドラマ
 ドラマならここで出て来る助け舟
 佳句地十選 (5月号から)
 大内 朝子
 私の歩いた跡が道になる
 一番星につらい話はどうしようもない
 一本の藁ほどですが赤い羽根
 針のない時計をもつて夢買いに
 天までの夢ふくらまず豆の芽よ
 生き延びる嘘の数だけ手を洗う
 一億の思い上がりにつケが来る
 蟻の死に涙を流す虫もある
 前向きに生きて暮らした汗を拭く
 越えてきたつらさは言わぬ渡り鳥

薫 正坊 楓 希久子
 千鳥 初江 君子 京子
 桂一 俊一 素人 三郎
 朱夏 扶美代 仁清 楓 楽
 いわゑ 昭子 倫子 花峰
 文仙 道子

人生のドラママコビーなど出来ぬ

何もかも放つたらかして帯ドラマ

ぶっつけ本番人生ドラマ泣き笑い

肩寄せて老いの日課は朝ドラマ

流行も晴着もいらぬ野良仕事

古写真こんなドラマが二人にも

目線合愛のドラマの幕が開き

北国の雪も主役にするドラマ

我がドラマ所詮端役でがまんする

菓稽のドラマ花見の八十五

流行を追つたあの頃あの私

産声へ世紀のドラマ幕を開け

流行のビールス海を越えて来る

流行へ素知らぬ振りの天の邪鬼

うぶみ川柳会

西村

黙光報

ハーブの部屋クレオパトラになる私

国粋主義儀は仁丹愛用派

コーヒの摘まみにならぬようにする

プライドを摘むと茶漬がうまくなる

愛の芽を摘んでしまった職員室

可愛さに負けて愛の芽摘みそこね

セリ摘んでビタミン補給した戦後

悪の芽を残して伸びる芽を摘んだ

娘と電話内緒が出来て辛せた

内気だと自分で言えは皆笑い

気の変らぬ内に拳式をやつちまい

百歳を自指せと子等は言うけれど

老いし身に情け容赦のない政治

千恵子

野風

昌子

たかし

朱坊

美々

治夫

登美子

伸夫

竹萌

和香子

菊野

憲一

六峰

孫が出来老人仲間にされている

老いたって胸のシクナル鳴り止まぬ

喜寿米寿老いに差がある同期会

若い気が五感の老いにけつまずき

今年から敬老会の一年生

とつとり川柳会

武田

帆雀報

健康に悪いとタバコ止めてみる

健康な体で青い空を見る

金も無い名譽も無いが健康だ

健やかな老母は菩薩のように笑み

健康法病氣になつて考える

健康な時は値打ちが解らない

健康な大統領でなまぐさい

女房がふくれた面で鍋磨く

披露宴ときどき胎児ノックする

ふくらみが隠せる時に拳式する

五ヶ月が過ぎてふくらむ岩田帯

ふくらんだ財布に妥協したらしい

十歳の乳房ふくらむ女ふくらむ

新人の夢がふくらむ入社式

上げ底の箱出た主婦の悲鳴です

日本中弱者が悲鳴あげている

悲鳴して転ばぬように夫婦箸

失恋の悲鳴砂丘に吐いてくる

聞きたい悲鳴は我が家かも知れぬ

屈折の悲鳴鏡に問い直す

薄桃色の晴れ着にワインこぼれ落ち

必ずや介護を受ける時がくる

天人

あづま

正和

登美枝

雄人

一夫

一枝

かつみ

美恵子

喬水

鬼桜

石花菜

輪多朗

舎人

静生

高栄

忠良

和枝

孝男

悦子

圭一郎

多哥由

一京

行男

大漁

和歌子

螢

必勝の祈願に神は背を向ける

春なのに私必ず風邪を引く

輪の中で必ず目立つ人らしい

実家に行けば必ず泊る嫁御です

幸せは必ずくると易者の灯

当選をしたら必ず何もせぬ

城北川柳会

神夏磯典子報

万歩計付けて梅林見に行けり

淋しさもほどほどになり十三回忌

呆れた話両手休息しています

白塗りの齡は見せないおてもやん

春風よ気ままに花粉呼ばないで

カラオケで命の洗濯しています

足腰をきたえるために乗るメトロ

野に山にすみれタンポポ春化粧

家中が何時も明るい丸い母

半世紀苦しいことはみな忘れ

宅配便母の言葉も詰つてる

気まま旅ひよこり降りる風の駅

託卵の無情郭公良くお育ち

三十年お年郭公されたお雛さま

だんだんと先輩になる恐ろしさ

登校拒否するしき知らぬ父母教師

カラオケに自分ひとり酔つている

運の無い時に抱かれる膝小僧

下積みものくるしき知らぬ七光り

春日和母同じことくり返す

女だと遠慮していたのは昔

幸子

きみ子

睦子

蟹郎

典子

帆雀

美代子

登美子

とし子

史風

義江

高栄

博遊

和歌子

久留美

千歩

トヨ子

達子

昭子

あやめ

典子

一枝

あき子

ただし

白峰

あい子

藤子

北風のぬくさを知つてから素直
好いように解釈をしてよく眠る
点滴の針がこの世に繋ぎ止め
十三回忌亡父も吞もつとコップ酒
無位無冠勝手気ままな落葉樹
カラオケの社長へ義理のアンコール
気ままいふことを知らない母の背な

川柳塔唐津支部

久保 正剣報

パレットに出せない色を追っている

晴翠

学生の服を着ている無頼漢

高明

片思いしている影を抱きしめる

勝視

キレル切るところで聞いたことがある

輝夫

スイングの白球追つて子と走り

實

お茶の間を泣かすテレビの御対面

久仁於

一日一善今日も待つてる日記帳

虹汀

神仏の有無は学者に任せます

弘

原点が素朴な問いでよみがえり

四郎

枝垂れ桜咲けば時限は句碑のもの

正剣

川柳塔みぞくち

小西 雄々報

火の始末子にも教える防火デー

静江

火事場では頼りにされる力瘤

公美枝

震災の大火脳裏を離れない

豊枝

酔い回り火事騒ぎにも高軒

和代

火事見舞い遠い縁故も義理のうち

正光

半鐘にバケツリレーを祖父語る

久子

火事騒ぎ演習と知りほつとする

信敬

山火事へホイ捨てやめとボチが鳴く

弘子

忘れぬ火事の標語は胸に張る
山火事の怖さを知らずエルニーニョ
春風は火事のこわさを知っている
死者の出た火事とは知らず雲走る

三幸川柳教室

三宅 保州報

しがらみの行方へ希望つなく糸

初子

先は闇やがて灯にあう風に会う

美智子

修羅こえた行方に想う花野あり

正一

さんと雲行方は弥陀の掌と知らず

公子

短絡な答えに見えてこぬ行方

和子

ばあちゃんの行方を捜す手毬唄

昇太郎

少子化の行方空虚な絵図ばかり

三千子

自由求めて翔ぶには羽根がもろすぎる

百合子

不況風求職票を吹き溜める

正圃

求人ピラ一枚にある寒さ

町子

父と子の求める地図にずれがある

嘉平

生きていて限り求めるものがある

保州

ゆつくりと読むから弔辞らしくなる

さち子

顔を讀んで裏金用意する

美子

文庫読むむ得う街の片隅で

桂香

読むほどに文章微妙に揺れ動き

千秀

読みかけの続き焼き芋食べながら

当代

新聞を読んで怒つてめし食つて

親路

読みさしの本に挟んである昨日

朱夏

峰打ちの裏が読めない反抗期

鉄治

おたふく豆にっこり顔で春つげる

敏子

その勇氣最初に納豆食べた人
ふたりいてカラコロ淋し落花生
さくらさく朗報信じ小豆煮る
豆粒の疑惑が夜を眠らせぬ
豆の木に登り天国下見する
ロードショー南京豆で初デート
鬼の目にあたられぬように豆をなげ

はびきの市民川柳会

菅田 絢子報

減量の指示へ食事がうま過ぎる

晋

開通のつり橋春を待つ淡路

末一

残された余生に懸ける老いの坂

四三郎

春告げに宅配便のいかなこ煮

昭平

幾山河越えて金婚祝い酒

昇

寅さんのように気儘に旅したい

志洋

暇つぶし気儘で覗く美術館

たけし

六十になったり五十でとおしたり

みつこ

盆栽が気儘な山を夢に見る

泰子

眼で食べるリッチな味の京料理

敦子

つきあえばつきあうほどに人間味

信子

苦勞した人で話に味がある

洞庵

薄味で余生丸く丸くなり

一壺

この味の秘訣を知つた落し蓋

聴

上役に塩と砂糖を間違える

庸佑

姑の味をちびちび変えてゆく

専平

妻よ君と組んでよかつた四十年

かつみ

妻と組む余生のプランばら色に

敏

組んでみてライバルの良き身にしみる

利武

自己流に方程式を組み替える
自己主張誰とも組まぬことにする
私とどつぷり組んだ善と悪
コミックと聖書が同居するコーナー
コーナーの無言が夢を引き締める
僕のコーナーに妻の夢を置いてある
毎日の素振りにコーナー陽があたり
コーナーは不用雑貨の溜まり場に
痛い目にあつても減らぬ僕の口
登りつめ痛み忘れた足の裏

川柳塔ふくへ 橋本多哥由報

落人の里か哀しい碑が眠る
頼みごと金を渡すと領いた
息をころして領く父を待っている
騙された判から寒い日が続く
方々の民話の中にある教え
方々に良い種を蒔き夢を盛る
仏壇の前で領く幸福か
老齡化愛の絆を方々へ
逃げ道を探すと迷路深くなる
炭小屋に逃げたが運の尽きだった
父無口パントマイムに領いた
春一番吹いて散りゆく寒椿
寒明けて早沈丁花かおり出す
後僅か領き合える日々惜しむ

川柳ささやま 酒井 靖子報

卒業のない集まりの輪が温い

知恵の輪が解けずにつづく不眠症
近すぎて大切なもの見失う
底ぬけに笑う妻からと風の疲れ
耳底に愛してまふと風の声
一粒の種が育てた花の笑み
忘れた人が心の底に在る
米びつの底に女の歴史あり
急がずにそろそろ来いと天の声
耳鳴りの底で揺れてる仏間の灯
点滴がそろそろ滲みてゆくいのち
どん底で育てた母の嫉糸
古女房そろそろへそくり出来る頃
そろそろとタイムカプセル出番待つ
靴底に妻の呪文が敷いてある
童話聞く育ち盛りの瞳が光る

川柳大版 坊農 柳弘報

この男理屈ぬきでのつき合いだ
嬉しいぜ君のハートをゲットだぜ
嬉しいと身体で表現する私
ブリクラで孫と一緒の嬉しい顔
朝シャンのロングヘアが鼻につき
嬉しいな貯金箱がいっぱいだ
屁理屈が多い割には骨が無い
哀愁も影もロングになる夕日
ダイヤ婚二人の愛のロングラン
晴耕雨読 理屈通りにいかぬ老い
経済のロングヒットを待っている
ロングより私ショートで勝負する

川柳大版 坊農 柳弘報

入学が待ちどおしいわランドセル
海越えて柳誌うれしい鳥ぐらし
ロング缶これが私の楽しみで
ロンくに嬉しい恩を思い出す
人生のロングバットに向かい風
知らぬ間に区別している目がこわい
庶民には空恐ろしい億汚職
新製品ロングセラーという当たり
旬のもの区別がつかぬ膳が出る
倫理法作ったやつ首をしめ
腕相撲負けた負けた嬉しそう
おいしいと言えば嬉しそうに笑い
ときめきの春に理屈などいらぬ
言わいでもよい屁理屈に座が白け
焼酎を濃い目に割った嬉しい日
一徹な男分煙主張する
いつまでも欠けは困る人がいる
おふくろの味に理屈はいりません

純子 恵美 美智子 多美子 すす子 末野 八重子 素水 とみ子 つや子 和子 富美 ヒサ子 可住 靖子

黄緑の糸を集めて春を編む
赤い糸ぶつ切り切つて逝つた亡夫
もつれ糸母は魔法の手でほどく
あつそつそつ今日女を釣る日だぜ
アツケラカンと死んで頼りの糸もきれ
陰で糸引かれ操り人形だ
茶番劇法の刃で切り捨てる
愛情の糸をゆつくり解いてみる
なり振りもかまわず摺つたごまが効く

川柳塔打吹 米田 幸子報

良花 鉄心 美花 希久志 比呂志 柳昌 洛醉 雅巢 本蔭棒 一歩 まつお 笑風 柳宏子 ダン吉 金太 重人 柳弘 幸子報 睦子 孝恵 明美 石花菜 季芳 かつみ たけの きみ子 よしえ

悩むより話せと温い友の声

手も足も脳も電池が切れかかる

明石大橋連なる明り目前に

三寒四温花芽笑ったり震えたり

浮かれ虫小な胸を叩く春

場当りの勝負な的が定まらず

稼いでも何の因果か貯まらない

宅急便送るたのしみ薯植える

腕白を送って母の深呼吸

スケジュール一杯抱いて花を待つ

数々のドラマを生んで五輪終え

子等の雛みんな飾って春うらら

久し振りそんな電話も地方選

生煮えの言葉が残る舌の上

登り坂下り坂あり六十路

紅梅がほころび足音軽うなり

居酒屋のニュースはいいつも正確な

差引きはゼロの暮しに慣らされる

京都塔の会

松川

杜的報

磔

求芽

柳宏子

とみ子

克治

糸子

達子

睦子

睦子

折鶴もわたしも時雨を聴いている

千羽鶴のひとつが僕を覗んでる

暇つぶし指が勝手に鶴を折る

風船を折る折紙は赤がいい

紙兜折って力んだ端午の日

折紙でだまされてます舟遊び

折紙持って地球の裏へ翔んでます

序列ある小鳥の水浴び見て楽し

幸せの序曲未完の絵に描く

呼び止めてついでの用が多過ぎる

極楽の序列へ写経続けます

自己主張ちよっぴり序文の一頁

鯛釣って来るとはよもや思わぬ

運命線もよもやと思ふ恋する

信用はあなただけです地蔵様

青信号全て信用出来すか

美しいから信用はされてない

信用を戻す明日も走ります

序の舞の切手に思い出抱いたまま

年齢の順序に呼ばぬえんまさま

序の口で師の目素質を早見抜き

少し褒めすぎたと思う序文書く

犬散歩序のはがき出し忘れ

運命の序曲見合いの席で聞く

ボカボカと温み感じてくる序文

よもやとは思うが遺書を書いておく

信用という空手形に泣かされる

信用がぶつ切り切れた泥の舟

水たまり映った空も春の色

川柳塔さやらぼく

政岡日枝子報

いつまでの命やさくら散り初める

紙ネンド作った雛もほほえみて

せかせかとみんな必死に朝の駅

ひと刻の幸桜吹雪の中に居る

強かに地下茎伸ばすシダの群れ

春がすみ確かな答えつかめない

毬投げて鬼と遊びたがる少女

紫香

飄云児

とし子

白浜子

吉之助

杜的

武庫坊

豊次

百合子

芳子

英一

京子

飛鳥

庸佑

福子

ただし

正坊

高栄

欣之

水客

祭りから祭りうたげの笛吹いて

地下水を命とすくう山の道

気付くに遅すぎて愛届かない

砂時計に生まれて休まる時がない

木を植えて借りの大地にありがたう

グランプが運んでくる中国産の砂

握手する同じぬくみを感じ合う

陽を背なに世間話をポチとする

若返る種を蒔きたい脳のひだ

婿殿が来るぞ来るぞと障子張る

雑学で一時ピンチ切り抜ける

悪友を束ねて花の咲き乱れ

川柳塔わかやま吟社

宮口 克子報

感謝していますか生きてることに

逃げ道の目印に置く酒の瓶

四面楚歌わたしの影を見失う

命あるものにやれない落第点

ありが豊かな実り大神楽

氏がとうすんなり言えた花の下

日々感謝忘れぬ老母の紙おむつ

朝の鏡ある日逃げたくなるわたし

時の人理路整然と嘘で逃げ

片腕と信じた奴が先に逃げ

核心を突いて敵方雲がくれ

落第の子も包み込む陽の温味

主婦としては落第ですと受賞の辞

落第とは違う私は留年だ

生涯学習落第してもあわてない

千代

千春

富美子

亜弥

恵子

天雀

日枝子

蘭

すみえ

正子

春枝

荒介

保州

富湖

輝子

昌子

あつむ

英子

三枝子

萬的

利治

正博

君枝

柳宏子

願

親路

良

落第へ座右の銘を書き変える
札束に負けて人間落第し

千寿子
紀美女

小雨ならぬれず掃れる軒づたい
雨の日は雨の絵を描くことにする

笑女
いわゑ

わたくしに似合う才女でない女房
才女ではないが遣り繰りうまい妻
才女には遠く農婦で生きる銀
世渡りが上手で才女が斬る世相
小気味よいペンで才女が斬る世相

早苗
茂美
房子
きみ子

太陽が沈むと影が背伸びする
スポットライトの影で頑張る馬の足

大輪
三重

車中での詠りと詠り止めどない
元総理出雲詠りがかくせない
大事にしよう出雲詠りも年寄りも
一升瓶下げ出雲弁がやつて来た
国詠り聞いて振り向く縄のれん
まめなかや兄の詠りは温かい
披露宴父の涙がとまらない

叮紅報
恒松

川柳塔まつえ吟社
恒松

實満
孝男
宣子
喜与志
弘子
幸枝
はるお
隆風
睦子
諷人に

春風に心をよぎる君の影
裏切らぬ影は味方と信じてる
温暖化もう逃げ場所のない地球
根を張って死ぬまで母は影になる
影に居る人を裁けぬ口惜しさ

三男
吞天
高夫
豊太

今年また桜を愛でる宴に
古希の宴女難の梯子外される
宴席が外してくれた主婦の柳
花の宴一期一会の風となる
花の宴花の命と競い合う
あつさり孤独楽しむ盆栽家
振り向きもせずあつさり母の巣立ち
あつさりの味付けうまいと母の巣立ち
一枚の辞令であつさり渡り鳥
あつさりとつくし野に立ち身を悟る
酒一升飲めばあつさり去んでくれ
香焚いて見合いの席を潤わせ
久し振り磯の香りにくつろぎを
香ばしい亡母の炒り豆なつかしい
いま香らねばいつ香るのか女
豊満なぼたん妖しいほど香る
香りにも乗せて切ない花言葉
才女には程遠いけど恙無い

友子
満江
博子
久枝
登美子
アキエ
奏子
知恵子
螢
太泡
みえ
寿美子
芳枝
桂子
静江
義良
日出子
午朗
煩惱児
ひふみ
米子
畔
多賀子
与根一
邦代

川柳塔鹿野みか月
土橋

螢報

影絵知らぬ少年が病む街が病む
影身になって地の果てまでも尽くしきる
逃げる追う恋はシューゲームだね

稚代
さち子
克子

あつさりと孤
あつさりとつくし野に立ち身を悟る
酒一升飲めばあつさり去んでくれ
香焚いて見合いの席を潤わせ
久し振り磯の香りにくつろぎを
香ばしい亡母の炒り豆なつかしい
いま香らねばいつ香るのか女
豊満なぼたん妖しいほど香る
香りにも乗せて切ない花言葉
才女には程遠いけど恙無い

知恵子
螢
太泡
みえ
寿美子
芳枝
桂子
静江
義良
日出子
午朗
煩惱児
ひふみ
米子
畔
多賀子
与根一
邦代

違ふことするからみんな目をつける
すれ違ふ運命か今日もひとり旅
神の掌が違ふ方へとそれてゆく
赤心を見せた椿の花の色
団らん笑い今日は今日も孫がもつ
ポックリと死にたい人が薬のむ
のはほんど今日の晩酌する時間
頬かむりする顔ぶれに腹が立つ
椎茸の傘が見事に立ち並ぶ
だれの手も借りぬひとりてまた立てる
音立てるまで少年に眼を向ける
立ち泳ぎ上手になって街へ出る
四月に立つと遙かの未来見えてくる
風流な柵を好んで鳥がくる
柵が好き隣のバラがからみつく
ラフレター毎日柵にぶらさがる
力んでる心の柵が外れない
柵こえた隣の灰を替めておく
見てくれる柵を外して童子なり
猪も柵越えをして生きてゆく
ふたりして恋のしがらみ解く覚悟
母と子の柵に絶やさぬかすみ草

宣子
喜与志
弘子
幸枝
はるお
隆風
睦子
諷人に

雨の日はひとりぼっちの鍵の音
身の程を知ってさびしい庭の雪
思いきり憎んでそして許し合う
旅立った人を案じる雨三日
転がった豆にくらしい塗りの箸
憎まれた少年の罪意識なく
早逝の君を惜しむか雨しきり
この年も雨降りつつく田原坂
憎いとは口には出さぬ竹トンプ
話もつれて春寒舗道よく響く
突然にうまいパン屋が消えていた
雨上がり蛙も背伸びする日差し
おとなりに文句言えない憎い猫
から元氣出すのも芸のうちなりき

てる
キク子
みつ子
藍
哲子
トミエ
貴代子
まさお
澄子
武庫坊
年代
民平
君子
義子

あつさりと孤
あつさりとつくし野に立ち身を悟る
酒一升飲めばあつさり去んでくれ
香焚いて見合いの席を潤わせ
久し振り磯の香りにくつろぎを
香ばしい亡母の炒り豆なつかしい
いま香らねばいつ香るのか女
豊満なぼたん妖しいほど香る
香りにも乗せて切ない花言葉
才女には程遠いけど恙無い

知恵子
螢
太泡
みえ
寿美子
芳枝
桂子
静江
義良
日出子
午朗
煩惱児
ひふみ
米子
畔
多賀子
与根一
邦代

違ふことするからみんな目をつける
すれ違ふ運命か今日もひとり旅
神の掌が違ふ方へとそれてゆく
赤心を見せた椿の花の色
団らん笑い今日は今日も孫がもつ
ポックリと死にたい人が薬のむ
のはほんど今日の晩酌する時間
頬かむりする顔ぶれに腹が立つ
椎茸の傘が見事に立ち並ぶ
だれの手も借りぬひとりてまた立てる
音立てるまで少年に眼を向ける
立ち泳ぎ上手になって街へ出る
四月に立つと遙かの未来見えてくる
風流な柵を好んで鳥がくる
柵が好き隣のバラがからみつく
ラフレター毎日柵にぶらさがる
力んでる心の柵が外れない
柵こえた隣の灰を替めておく
見てくれる柵を外して童子なり
猪も柵越えをして生きてゆく
ふたりして恋のしがらみ解く覚悟
母と子の柵に絶やさぬかすみ草

宣子
喜与志
弘子
幸枝
はるお
隆風
睦子
諷人に

落第へ座右の銘を書き変える
札束に負けて人間落第し

千寿子
紀美女

小雨ならぬれず掃れる軒づたい
雨の日は雨の絵を描くことにする

笑女
いわゑ

わたくしに似合う才女でない女房
才女ではないが遣り繰りうまい妻
才女には遠く農婦で生きる銀
世渡りが上手で才女が斬る世相
小気味よいペンで才女が斬る世相

早苗
茂美
房子
きみ子

太陽が沈むと影が背伸びする
スポットライトの影で頑張る馬の足

大輪
三重

車中での詠りと詠り止めどない
元総理出雲詠りがかくせない
大事にしよう出雲詠りも年寄りも
一升瓶下げ出雲弁がやつて来た
国詠り聞いて振り向く縄のれん
まめなかや兄の詠りは温かい
披露宴父の涙がとまらない

友子
満江
博子
久枝
登美子
アキエ
奏子
知恵子
螢
太泡
みえ
寿美子
芳枝
桂子
静江
義良
日出子
午朗
煩惱児
ひふみ
米子
畔
多賀子
与根一
邦代

川柳塔まつえ吟社
恒松

螢報

春風に心をよぎる君の影
裏切らぬ影は味方と信じてる
温暖化もう逃げ場所のない地球
根を張って死ぬまで母は影になる
影に居る人を裁けぬ口惜しさ

三男
吞天
高夫
豊太

今年また桜を愛でる宴に
古希の宴女難の梯子外される
宴席が外してくれた主婦の柳
花の宴一期一会の風となる
花の宴花の命と競い合う
あつさり孤独楽しむ盆栽家
振り向きもせずあつさり母の巣立ち
あつさりの味付けうまいと母の巣立ち
一枚の辞令であつさり渡り鳥
あつさりとつくし野に立ち身を悟る
酒一升飲めばあつさり去んでくれ
香焚いて見合いの席を潤わせ
久し振り磯の香りにくつろぎを
香ばしい亡母の炒り豆なつかしい
いま香らねばいつ香るのか女
豊満なぼたん妖しいほど香る
香りにも乗せて切ない花言葉
才女には程遠いけど恙無い

知恵子
螢
太泡
みえ
寿美子
芳枝
桂子
静江
義良
日出子
午朗
煩惱児
ひふみ
米子
畔
多賀子
与根一
邦代

違ふことするからみんな目をつける
すれ違ふ運命か今日もひとり旅
神の掌が違ふ方へとそれてゆく
赤心を見せた椿の花の色
団らん笑い今日は今日も孫がもつ
ポックリと死にたい人が薬のむ
のはほんど今日の晩酌する時間
頬かむりする顔ぶれに腹が立つ
椎茸の傘が見事に立ち並ぶ
だれの手も借りぬひとりてまた立てる
音立てるまで少年に眼を向ける
立ち泳ぎ上手になって街へ出る
四月に立つと遙かの未来見えてくる
風流な柵を好んで鳥がくる
柵が好き隣のバラがからみつく
ラフレター毎日柵にぶらさがる
力んでる心の柵が外れない
柵こえた隣の灰を替めておく
見てくれる柵を外して童子なり
猪も柵越えをして生きてゆく
ふたりして恋のしがらみ解く覚悟
母と子の柵に絶やさぬかすみ草

宣子
喜与志
弘子
幸枝
はるお
隆風
睦子
諷人に

影絵知らぬ少年が病む街が病む
影身になって地の果てまでも尽くしきる
逃げる追う恋はシューゲームだね

稚代
さち子
克子

あつさりと孤
あつさりとつくし野に立ち身を悟る
酒一升飲めばあつさり去んでくれ
香焚いて見合いの席を潤わせ
久し振り磯の香りにくつろぎを
香ばしい亡母の炒り豆なつかしい
いま香らねばいつ香るのか女
豊満なぼたん妖しいほど香る
香りにも乗せて切ない花言葉
才女には程遠いけど恙無い

知恵子
螢
太泡
みえ
寿美子
芳枝
桂子
静江
義良
日出子
午朗
煩惱児
ひふみ
米子
畔
多賀子
与根一
邦代

違ふことするからみんな目をつける
すれ違ふ運命か今日もひとり旅
神の掌が違ふ方へとそれてゆく
赤心を見せた椿の花の色
団らん笑い今日は今日も孫がもつ
ポックリと死にたい人が薬のむ
のはほんど今日の晩酌する時間
頬かむりする顔ぶれに腹が立つ
椎茸の傘が見事に立ち並ぶ
だれの手も借りぬひとりてまた立てる
音立てるまで少年に眼を向ける
立ち泳ぎ上手になって街へ出る
四月に立つと遙かの未来見えてくる
風流な柵を好んで鳥がくる
柵が好き隣のバラがからみつく
ラフレター毎日柵にぶらさがる
力んでる心の柵が外れない
柵こえた隣の灰を替めておく
見てくれる柵を外して童子なり
猪も柵越えをして生きてゆく
ふたりして恋のしがらみ解く覚悟
母と子の柵に絶やさぬかすみ草

宣子
喜与志
弘子
幸枝
はるお
隆風
睦子
諷人に

雨の日はひとりぼっちの鍵の音
身の程を知ってさびしい庭の雪
思いきり憎んでそして許し合う
旅立った人を案じる雨三日
転がった豆にくらしい塗りの箸
憎まれた少年の罪意識なく
早逝の君を惜しむか雨しきり
この年も雨降りつつく田原坂
憎いとは口には出さぬ竹トンプ
話もつれて春寒舗道よく響く
突然にうまいパン屋が消えていた
雨上がり蛙も背伸びする日差し
おとなりに文句言えない憎い猫
から元氣出すのも芸のうちなりき

てる
キク子
みつ子
藍
哲子
トミエ
貴代子
まさお
澄子
武庫坊
年代
民平
君子
義子

あつさりと孤
あつさりとつくし野に立ち身を悟る
酒一升飲めばあつさり去んでくれ
香焚いて見合いの席を潤わせ
久し振り磯の香りにくつろぎを
香ばしい亡母の炒り豆なつかしい
いま香らねばいつ香るのか女
豊満なぼたん妖しいほど香る
香りにも乗せて切ない花言葉
才女には程遠いけど恙無い

知恵子
螢
太泡
みえ
寿美子
芳枝
桂子
静江
義良
日出子
午朗
煩惱児
ひふみ
米子
畔
多賀子
与根一
邦代

違ふことするからみんな目をつける
すれ違ふ運命か今日もひとり旅
神の掌が違ふ方へとそれてゆく
赤心を見せた椿の花の色
団らん笑い今日は今日も孫がもつ
ポックリと死にたい人が薬のむ
のはほんど今日の晩酌する時間
頬かむりする顔ぶれに腹が立つ
椎茸の傘が見事に立ち並ぶ
だれの手も借りぬひとりてまた立てる
音立てるまで少年に眼を向ける
立ち泳ぎ上手になって街へ出る
四月に立つと遙かの未来見えてくる
風流な柵を好んで鳥がくる
柵が好き隣のバラがからみつく
ラフレター毎日柵にぶらさがる
力んでる心の柵が外れない
柵こえた隣の灰を替めておく
見てくれる柵を外して童子なり
猪も柵越えをして生きてゆく
ふたりして恋のしがらみ解く覚悟
母と子の柵に絶やさぬかすみ草

宣子
喜与志
弘子
幸枝
はるお
隆風
睦子
諷人に

落第へ座右の銘を書き変える
札束に負けて人間落第し

千寿子
紀美女

小雨ならぬれず掃れる軒づたい
雨の日は雨の絵を描くことにする

笑女
いわゑ

わたくしに似合う才女でない女房
才女ではないが遣り繰りうまい妻
才女には遠く農婦で生きる銀
世渡りが上手で才女が斬る世相
小気味よいペンで才女が斬る世相

早苗
茂美
房子
きみ子

太陽が沈むと影が背伸びする
スポットライトの影で頑張る馬の足

大輪
三重

車中での詠りと詠り止めどない
元総理出雲詠りがかくせない
大事にしよう出雲詠りも年寄りも
一升瓶下げ出雲弁がやつて来た
国詠り聞いて振り向く縄のれん
まめなかや兄の詠りは温かい
披露宴父の涙がとまらない

友子
満江
博子
久枝
登美子
アキエ
奏子
知恵子
螢
太泡
みえ
寿美子
芳枝
桂子
静江
義良
日出子
午朗
煩惱児
ひふみ
米子
畔
多賀子
与根一
邦代

川柳塔まつえ吟社
恒松

螢報

春風に心をよぎる君の影
裏切らぬ影は味方と信じてる
温暖化もう逃げ場所のない地球
根を張って死ぬまで母は影になる
影に居る人を裁けぬ口惜しさ

三男
吞天
高夫
豊太

今年また桜を愛でる宴に
古希の宴女難の梯子外される
宴席が外してくれた主婦の柳
花の宴一期一会の風となる
花の宴花の命と競い合う
あつさり孤独楽しむ盆栽家
振り向きもせずあつさり母の巣立ち
あつさりの味付けうまいと母の巣立ち
一枚の辞令であつさり渡り鳥
あつさりとつくし野に立ち身を悟る
酒一升飲めばあつさり去んでくれ
香焚いて見合いの席を潤わせ
久し振り磯の香りにくつろぎを
香ばしい亡母の炒り豆なつかしい
いま香らねばいつ香るのか女
豊満なぼたん妖しいほど香る
香りにも乗せて切ない花言葉
才女には程遠いけど恙無い

知恵子
螢
太泡
みえ
寿美子
芳枝
桂子
静江
義良
日出子
午朗
煩惱児
ひふみ
米子
畔
多賀子
与根一
邦代

違ふことするからみんな目をつける
すれ違ふ運命か今日もひとり旅
神の掌が違ふ方へとそれてゆく
赤心を見せた椿の花の色
団らん笑い今日は今日も孫がもつ
ポックリと死にたい人が薬のむ
のはほんど今日の晩酌する時間
頬かむりする顔ぶれに腹が立つ
椎茸の傘が見事に立ち並ぶ
だれの手も借りぬひとりてまた立てる
音立てるまで少年に眼を向ける
立ち泳ぎ上手になって街へ出る
四月に立つと遙かの未来見えてくる
風流な柵を好んで鳥がくる
柵が好き隣のバラがからみつく
ラフレター毎日柵にぶらさがる
力んでる心の柵が外れない
柵こえた隣の灰を替めておく
見てくれる柵を外して童子なり
猪も柵越えをして生きてゆく
ふたりして恋のしがらみ解く覚悟
母と子の柵に絶やさぬかすみ草

宣子
喜与志
弘子
幸枝
はるお
隆風
睦子
諷人に

影絵知らぬ少年が病む街が病む
影身になって地の果てまでも尽くしきる
逃げる追う恋はシューゲームだね

稚代
さち子
克子

あつさりと孤
あつさりとつくし野に立ち身を悟る
酒一升飲めばあつさり去んでくれ
香焚いて見合いの席を潤わせ
久し振り磯の香りにくつろぎを
香ばしい亡母の炒り豆なつかしい
いま香らねばいつ香るのか女
豊満なぼたん妖しいほど香る
香りにも乗せて切ない花言葉
才女には程遠いけど恙無い

知恵子
螢
太泡
みえ
寿美子
芳枝
桂子
静江
義良
日出子
午朗
煩惱児
ひふみ
米子
畔
多賀子
与根一
邦代

違ふことするからみんな目をつける
すれ違ふ運命か今日もひとり旅
神の掌が違ふ方へとそれてゆく
赤心を見せた椿の花の色
団らん笑い今日は今日も孫がもつ
ポックリと死にたい人が薬のむ
のはほんど今日の晩酌する時間
頬かむりする顔ぶれに腹が立つ
椎茸の傘が見事に立ち並ぶ
だれの手も借りぬひとりてまた立てる
音立てるまで少年に眼を向ける
立ち泳ぎ上手になって街へ出る
四月に立つと遙かの未来見えてくる
風流な柵を好んで鳥がくる
柵が好き隣のバラがからみつく
ラフレター毎日柵にぶらさがる
力んでる心の柵が外れない
柵こえた隣の灰を替めておく
見てくれる柵を外して童子なり
猪も柵越えをして生きてゆく
ふたりして恋のしがらみ解く覚悟
母と子の柵に絶やさぬかすみ草

宣子
喜与志
弘子
幸枝
はるお
隆風
睦子
諷人に

ローズ川柳会

山崎 君子報

心根がうれしくなつて礼尽くす
 礼儀などこ吹く風と子ら育つ
 幸せの身にも礼儀は欠かせない
 道を問う茶髪お札を忘れない
 信愛という礼儀もつ仲となり
 食卓に礼儀のいろは載せておく
 腕白の手形が残る 古机
 机の上のボタンを押すとお茶がくる

わかあゆ川柳会 松本はるみ報

保険法変つて医師が遠くなり
 立ち直るかやさしい風と下駄の音
 ピンと来たヒントは素敵な言葉です
 それなりの夢があるから耐えてます
 未来凶へ子供の夢を聞いてみる
 立ち直る術を教えて送り出す
 立ち直ることを信じて花に水
 二杯目のいがいコーヒからヒント
 長生きのヒント笑顔の中にある
 夢夢夢 夢で終ったわが希い

いずも川柳会 園山多賀子報

知っていますか私が一番好きな花
 切り口に刺さつた少年の花びら
 花活けてひとりの部屋と見られまい
 週末が見頃でしょうと氣象台
 今日ありて花の命とたわむれる
 言いつ分は聞かずに花は散っていく
 いつの間に花びらの口尖り出す

富久江 武子 三千代 和子 茂 ひろ子 八重子 螢
 英子 はるみ 鈴江 かつ子 聖子 好栄 ちよえ 博利 清泉 白汀

子離れをしよう梢の花だから
 無職する実感が湧く花作り
 無に返る窓はしとしと雨の音
 欠点をかくす人です無口です
 隣に座る人とわたしたは無関係
 悩みなど無いと言つたら嘘になる
 信心も神も仏も胸に住む
 信心はお経ばかりで救われず
 一病を持つと信心深くなる
 調子よい時の忘れてる信心
 涅槃図へ信心ころ高ぶらせ
 笑い声信心一家丸く生き
 破れ衣放浪癖に似合つて
 放浪の果てに初心が失せてくる
 大ジョッキの中で放浪してみよう
 放浪の果てをベン牝紙知つて
 放浪癖未だ治らない竹とんぼ
 放浪の街によさこい聞く屋台
 今日生きた自説は曲げぬ放浪記
 流される度から心を丸くする
 母のいる絵から流れの子守唄
 流れ着く終着駅には花咲かす
 黙認の流れを変えた処方箋

久代 裕 叮紅 昭二 陽子 多賀子 房子 明朗 勝子 れいじ 満江 蘭水 まこと ちかし 文子 きみえ 美佐子 茂美 義良 一繁 寿美 桂子 芳枝

はたる川柳同好会 井上直次報

飾り皿いつまで待たす応接間
 自らを飾りたてると時です
 身を飾るのは控へ目に花見の日
 飾りものひとつもないが温い店

直次 博史 吉太郎 蛭柳 直次

ふるさとへ飾る錦のないままに
 飾らない素顔が好きで僕の妻
 着飾つていてもお好み食へに行く
 ファミリーの写真飾つて遠く住む
 蟻の列その一匹に僕が居る
 上目使つて虫の居所探る部下
 虫ひとつ殺さぬ顔の大久伸
 虫好かぬ人なくしたい老い修業
 お参りの少なさ知つてる虫の声
 ムズムズと浮気の虫が袖の中
 腹の虫抑えた後に残る悔い
 腹の虫抑えかねてる洗い顔
 ヌードショーまさか親父に会おうとは
 骨董市まさかを求め眼が光る
 リストラにまさかのまさか配置がえ
 保険屋はまさかの時に力入れ
 寝耳に水おしどり夫婦であつたはず
 お互いに支え合つてる四十年
 子を思い子に支えられ喜寿の春

祥風 よしろう 保子 桂子 だし 馬洗 正安 勝 清 和歌子 キヨ子 セツ子 雪子 正三郎 竹二 たけお 昭子 久子 善守 英子

西宮北口川柳会 亀岡哲子報

音のない世界をつなぐ手話の輪よ
 ドアたたく音聞き妻とすぐわかる
 西安洛陽 遺跡が語る中国史
 雨の古都わがまま聞いてくれませう
 雲々々古都もじんわり近代化
 古都の雨心にしみる一周忌
 カメラ持ち古都千年の旅情汲む

哲嗣 武庫坊 義子 房子 比ろ志

終章は自分を褒めてやるつもり
入つてに褒めれば聞く春うらら
褒め上手褒められてと気付かない
褒め過ぎと気付くかすかな隙間風
褒められたことなどないが母の愛
消費税だけが惜しくてたまらない
出し惜しみした切札が反故になり
惜しがって賞味期限が切れました
不合格一点の差と後で知る
引越で捨てたあれこれ惜しまれて
ファイナル別れを惜しむペンライト
ブライドにすぎる余生が口惜しい
惜しいけど丹精の娘が嫁に行く
片方がないのダイヤのイヤリング
陽気にはなれぬピエロの影法師
囲まれて童話読んでおばあちゃん
食欲に負けてふるえる体重計
雨だれをじっと聞いている物思い
地団にない道も歩いてきた夫婦
疑いが晴れたか喋りまくられる
ママの注射のぞきこんでる目が丸い

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

澄子 富喜子 石舟 松煙 萬的 信子 透太 しげお 文 能子 春蘭 トミエ 源一 江美 貴代子 周信 はつ絵 絹子 正坊 飄云児 二南 みつ子

詫びを聞く度裏側を推理する
三浪の弱さを吊るし絵馬軋む
ドーナツ現象都市に砂漠ができそう
ドーナツの輪に一匹の鬼を飼う
教え子の個性を一つずつ拾う
ドーナツの芯を探して陽が暮れる
よく聞けば同病憐れむ仲でした
いろいろな姿態を拝む終電車
ドーナツの穴から見られてる男
ドーナツに風が吹いたか娘が嫁ぐ
いろいろな悩みを仏聞き厭がる

川柳塔おとり

原みさを報

銀波 花匠 順風 大吾 しのぶ ツネ 柳々 一人 花 黙人 花峯 五葉庵 孝子 千秋 羅奈 黙光 艶子 雄々 友子 ゆきの 幸次郎 崇 舎人 宏章 由多香 愛恵 ひかり 半量

アウトドア崩れた父権たて直す
公園の遊具も弾む春休み
海風いで心も風いで眠くなる
話し合う理屈に丸みまだ出来ぬ
高官の遊びを知ったダンボール
遊興に身をついやしたきりぎりす
若さから棒引きしてほし鼻の息
大陸の砂が舞い込む春霞
遊ぶだけ遊んだ男棺の中
お上手を遊びに来てと嫁が言う
老夫婦若いピチピチギャル見とれ
日だまりの舌がころころよく遊ぶ

尼崎いくしま川柳会 春城

年代報

しげる せつ子 風花 和子 登美 清子 敬之介 庸二 伝住 道子 小生 みさを 節子 涉 紫香 光穂 キク子 タカ子 吉太郎 一笛 義芳 伊三郎 美子 とみ子 澄子 比ろ志

乱気流一億二千が乗っている
流れにも慣れて寸志の封を切る
流水の天使衣の袖を振る
古稀すぎて流れる月日夢うつつ
落ち椿舞と仲よく流れ行く
海峡の流れを渡る四月馬鹿
さまざまに流れるビルの谷間の渋滞
ぬくもりのやがてひとりになるふたり
俤せを抱くと腕がだるくなる
風呂敷に包んだしなやかな形
目覚めては哭く凍蝶の歩くほかなし
銭で済むから簡単に引き受ける

翠洋会

児玉

新しい神戸の屋根は軽くなり
シナリオを軽く書きかえ生き延びる
沈丁花匂う二度目の靴すべり
大阪の匂いどっぷり抜け出せぬ
入学の子へアスナロの樹を植える
よくきれる男は歴史もする
銘刀に妖しく光る歴史有り
刃こぼれの数に男の意地がある
駆けてくる子供を抱けば陽の匂い
耳痛い話に軽く出た目まい
使わずにすんだ軍刀持っている
いい匂いのこして妻の松竹座
社の秘密不正が匂う臍口令
焼き肉の匂い駆け込む終電車
口喧嘩妻の一太刀とどめさし

昭三 日出男 久子 千恵 愛 ヤス子 薫 静 武庫坊 富美子 芳子 白溪子 蛙報

小刀に善と悪とを言いふくめ
身軽さと孤独にゆれる影法師
峰打ちで男の愛が試される
冷蔵庫に春が匂っているくらし
刀折れ南の島に果てた戦友
価値観の違いと軽くないなされる
厳しさも優しさも母二刀流
出刃を持つ私を鯛がにらんでる
弁解をするほど男軽くなる
方程式解けて五月が匂い出し
下手くそな刀と思う斬られ役

川柳クラブわたの花

吉村 一風報

ストレスをもらってくれるポール蹴る
ジーパンでワルツすんなり踏む舞妓
落ちていた財布を一度蹴ってみる
芸人をあくび一つできずを付け
セピア色あの日の花が字引きから
石ころを蹴り蹴り帰る母の留守
猫の恋邪魔して走る路地の裏
夫婦別姓ほんまに僕のとうちゃんか
ライバルに当らぬ顔のしわ
人生の道程さぎむ顔のしわ
ふらふらとよを見しながらぼくの道
楽な道ばかり歩きたがるわたし
居酒屋にギターの流れ忘れられ
タンポポの綿毛地道を恋しがる
女ですあれこれあって迷う道
赤ちようちん来いこい来いとゆれている

志華子 千歩 宣司 真砂 久峰 靖巳 周信 千枝子 楓 榊 千梢 鬼遊 幸子 明子 春江 知佐子 美代子 民子 明子 八寿子 宏 剛 治 道子 君江 春子 一風

春が来る道は菜の花レンゲ草
勉学の道は辿れど一里塚
雨模様運の強さで決行す
春の風恋の道草したくなり
子供背負う帯は便利な宝物
里がえり帰りが辛い母の顔
すんなりとも冥土への道手を合わす
またしてもテレビドラマに泣いてます
またとなく祖父の背中の道しるべ
我が道を行く押し車待つてあげ
一筋を通しメダルがついてくる
愚か者六道に立つ道しるべ
道端に犬が寝ていて遅刻する
政治屋の道どろまみれ金まみれ

横浜あおば川柳会

満秋報

電化が進み駅弁が違くなる
へそくりが笑いころげる畳替え
道しるべ朽ちて進路を教えない
外面のいい懐はいつもゼロ
うたた寝の顔に残した畳の目
寝ころんだ私を畳放さない
終章へ収支のゼロを心掛け
零点をとってちらつく親の顔
少子化が進みブランコ風を乗せ
宝島昨夜のつづき読んでやる
一畳で足る禅堂の修行僧
近代化進めるごとにゴミが増え
そこそこの世話にも花はよく応え

幸枝 隆盛 寿代 信司 友甫 逸子 美智子 朝子 一道 ますみ トシエ まさと 鬼遊 芳江 良子 雅子 絹子 サト子 街湖 充子 笑子 見早子 省子 広和 かつ子 純子

茶の稽古畳の目にも審査され

そこそこという老母の背なを掻いてやり

ほめられもけなされもせぬ成績表

ゼロ口とつ見間違えての無駄遣い

帰国して畳のよさを日本人

畳替え古い事件を読みかえす

古畳跡から判るくらしぶり

そこそこの仲が腕など組んでいる

挨拶もそこそこにして出す暮盤

代役は挨拶だけで席を立ち

そこそこの出来映えですという自信

無から有実らせ土地へ根をおろす

幸せは畳の上で死ぬること

畳干す行事も母とともに消え

掛けても割ってもゼロには歯がたたぬ

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

休肝日ほとけのような人になる

一台の酒でほとけになった父

慈悲深い弥勒菩薩のまるい影

冬眠へ目覚し鳴らす磨崖仏

花見バス花より仏を拝ませ

ほんやりでよキレルナイフを持つよりも

焼き芋が匂うほんやりしておれぬ

ほんやりと割れた茶碗をついでいる

私も三年太郎真似てみる

まだショックあらぬ彼方を見る涙

ほんやりと青いリングは他人のもの

宴果ててほんやり後の祭り見る

ふみ

羊子

亜希子

旬多留

十三子

嘉信

八重子

数の子

あらた

のぶ子

達也

潮華

政勝

早智

満秋

千里

隆盛

萬的

昭度

勝美

柳伸

弘直

和歌子

頂留子

夕花

秋子

二万五千発の核にほんやりしておれぬ

試着室の前でほんやり妻を待つ

縁あつて蹴った話が生きてくる

松ぼっくり蹴れば懐かし故郷の風

言えなくて愛の仕草は石を蹴る

花にでも花が教えているをり戻す

誰を見てすこし正気をとりに戻す

あでやかに装い誘う毒の花

花の下みんなとつてもいい笑顔

花の名も知らずにくるりくるり四季

満開を待たずに辞令渡される

すみれの花あなたの側で咲きたくて

木洩れ日が描く模様は春の彩

消しゴムでわたしの模様消している

人間を集めて曼陀羅を描く

風紋の日毎に変わる素晴らしさ

いろどりも模様ずれもない夫婦

鉛筆一本こころ模様を染め上げる

川柳ねやがわ

江口

脱サラの意気込み活気が戻り出す

値下げビラ街に活気が活気づく

モコモコと春の大地が活気づく

選抜へ母校活気の寄付がくる

彩添える師のひと筆で活きてくる

雀から貰うつづらの請求書

大物は居ない平和な群雀

手乗りにはならぬと決めている雀

合格通知届いて消えた迷いごと

ダン吉

ますみ

信博

洋宏

剛治

泰

賢子

春子

欣之

弥生

東雲

利昭

半蔵門

美千子

柳宏子

弘一

森子

度報

ルイ子

頂留子

朝子

たもつ

一風

とし子

弘一

恵子

小路

原点に立つと迷いが見えてくる

千羽鶴親の迷いがぶら下がる

一つずつ迷いを超えてきた写経

献体のはなし弾んで迷つてくる

迷うことまだまだ尽きぬ集印帳

迷い子札つけて貰って祖母が来る

迷うほどのお金を持ったことがない

腹の虫炎えて満々たり闘志

筋通す末席の腫が炎えている

残り火が炎えないように蓋をする

若いっていいな仕事に炎えている

少年の腫にもえている未来

向学に炎える心の芽を伸ばす

後継ぎの孫を溺愛して困る

春うらら定年の身の置き所

日本丸ザボンドボンでゆれている

子のマンガ百年先の知恵を描き

諺もヒントはずれになる世相

ガード下で国を憂えるホームレス

銀行に薬いっぽんも置いてない

最初だけ迷いのあつた袖の下

岬川柳会

八十田洞庵報

赤ちゃんを囲み飽きずに小半日

同窓会みんなが囲む人気者

まだ若いつもりカラオケ恋の唄

関白のつもりが妻の尻の下

卓囲む三時のメニュー孫が決め

まだ若いつもりを笑う針の穴

冬葉

高栄

光子

吉之助

良知

茜

あやめ

一途

三千子

権太

文秋

洋

庸佑

勇太朗

仁清

かすみ

淳朗

波留吉

時弘

度

年子

信博

里子

とみ

幸子

浪速子

老い仲間たき火囲んで花咲かす

ポランテア囲む人の輪暖かい

宝くじ当たったつもりの設計図

老後をばさえるつもりが低金利

うまいことだますつもりが騙される

冗談を言ったつもりが本音吐き

初舞台死んだつもりで一步出す

久し振り里帰りした子を囲む

工事場は焚火囲んで酒談義

外遊の孫を囲んで話笑く

鍋囲むファミリー今年一人ふえ

囲み解き仲良しクラブ復活し

祝福の胸上げ友に囲まれる

小荷物を解く手を子等とろけ出る

鍋囲む湯気に本音もとろけ出る

映画村囲む俳優厚化粧

温もりが逃げないように囲む鍋

悲しみももう癒えたかな六地蔵

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

不況風店先猫も通り過ぎ

わたくしの駆け込み寺が台所

千切れ雲京に降らせた名残雪

憂さ流す蛇口いっぱい開けて置く

雪解けの水へ祈りの流しびな

受け流す胸の広さを持たおとな

流されてばかりわたしの気の弱さ

あの時に流した涙本物か

自分史にK点越えを書いてみる

啓一

ユミ子

道江

昌夫

狸村

庄六

よし子

令子

悦子

ミチエ

孝子

鉄男

みつ子

俣子

みやこ

正美

洞庵

勇

鈴

ハツエ

満寿蔵

すみ

昌子

澄子

石舟

夢之助

正治

ソプラノに誘い出された重い靴

初恋の名残も皺に二度童子

世界一大橋ほめてさくらほめ

船長の暮しを愛えた夢の橋

出不精の猫が炬燵で軒かく

出不精のくせに毎日髭を剃る

川柳藤井寺

高田美代子報

絵葉書の派手さに負けている切手

青い鳥さがし切手を二枚はる

無心言う手紙に切手貼り忘れ

ライバルに切手を少し曲げて貼る

美人画の切手集めた遠き日よ

友情をつなぐ一枚の切手

切手代別納でくる寄付集め

恐竜の切手で異星人に出す

切手まで右肩上げて貼る男

朝の駅リズムを崩す花粉症

クラス会無限の時間欲しくなる

肩書きが変り汚職の天下り

スカートのいたざらをする春一番

行けるうちにたきましょと老いの旅

泣かないでやと語れる一周忌

どん底でやと掴んだある悟り

ハープなどやと叶ったマイホーム

子育てがやと終って本が読め

やと子離れやと女を取りもどす

日の位置へやと届いた子の意見
定年後やと気づいた妻の労

勇次郎

弘治

十四郎

鹿太

向西

紫香

和子

敦子

志洋

鐘造

みよ子

昌子

かつみ

元紀

正一

トミ子

政代

末一

宗一

春蘭

愛子

大八

桂子

恒雄

花梢

和樹

修六

同居してパンとミルクにやと慣れ

走って走って人並にやと

長い冬やと氷の割れる音

ほろ酔いの父の宝は子の寝顔

紙屑のようでも子には宝物

少年に戻れば行ける宝島

貧しいが明るい妻が宝です

文化財宝庫の街に住む誇り

欠けてから宝になった亡母の櫛

倉吉川柳会

松本よしえ報

ナイヤガラ滝の祈りは小さすぎた

当確が出たぞ四斗樽追加する

言い訳に一言足して誤解とけ

醤油樽使って作るミニガーデン

樽詰めそのままふる里駆けて来る

生活の足しにと母がお小遣い

酒樽が轮番待てる選挙戦

滝壺に結婚リング落としちゃう

裏山の滝に落とした頑固玉

観光の目玉華厳の滝を組む

銀き沈みながら滝へ花の首

男滝の樽ころがらというゲーム

魚買いすぐそこのに歩かない

滝上る鯉もタイトル持っている

ピヤ樽と似て太いのが僕の妻

熟睡してワイン樽こくがつつく

継ぎ足した酒が言わせた内緒ごと

治子

美代子

扶美代

敬一

智久

六点

昭子

史郎

アキ

康志

明美

西節子

美由紀

あけみ

幸子

ちよ子

睦子

きみ子

かつみ

雄々

螢

苦句

民枝

秋草

季芳

玲子

勤節子

樽のたが緩んで少し惚けて来た
ナイヤガラ日本の滝を呑んでいる
親ばかの子の独走を援助する
あの滝に打たれた場所が悪かった
八木節のリズムを樽で叩き出す
滝壺に一羽の燕ちゅう返り
滝つぼはその気にさせる恐い場所
滝壺で何が起きたか人だかり
滝つぼに葛藤の足跡がある
敏感な樽がわが家に座つとる

豊中もくせい川柳会 田中 正坊報

まず水が出て待たされるレストラン
一回はナイフに揺れた我が子なり
一回は指切り信じ待っている
一回は逢つてごらんと叔母が言う
楽しもう一回きりの人生だ
パイプがつまる夫婦が呆けてくる
くゆらせたパイプの先にある思索
他人には見えぬパイプがある二人
共白髪よくぞここまで支え合い
沈黙考 蠅が一匹とんでくる
両手からこぼれるほどについた唾
春や春人みな花に溺れてる
老いふたり水掛け論も仲がよい
春うらら猫も娘も帰らない
何もかも許したように陽は沈む
日の目見ぬつつかい棒のままでよい
自叙伝に内助の功を大書する

よしえ 秋人 智子 次男 和枝 一夫 和歌子 康子 石花菜 明光 和歌子 享子 紫香 落児 女 博史 吉太郎 たけお 悟郎 一笛 楓云児 柳宏子 石舟 重人

年金で支え合つてる老夫婦

かわはら川柳会

上田

俊路報

正坊

赤い糸きっぱり切れ蝶になり
脱サラをきっぱり決めて旅に出る
きっぱりと言えば玉子も角が立つ
きつぱりと心の中で線を引く
ナツメロを聞いて再び若返り
遅咲きを再び待つて二合瓶
重油汲み再び生きた日本海
かみの毛を再び染めて七変化
傷ついたツバメ再び風に乗る
再会へ心の振り子まだ揺れる

富柳会

池

森子報

カクテルに苦い思いを絞り入れ
噂には触れずブランコ揺らして
シナリオが変わる男と女の間
矢印を少し曲げて春の午後
蓋すればすむと気楽な人がいる
おとし蓋すこし自由をくれれないか
うっかりと鬼に渡していた火種
深追いの雨が私に死ぬという
蓋を下さない悲しい日の私に
焦点を絞ると仏の顔がある
棺の蓋閉じて定まる人の価値
無人駅に草花芽吹く温かみ
三月の別れ別れになる校歌
歯こぼれのナイフ昔を語らない

文子 アキ 登子 鐘造 昭水 美代子 絹歌 紅紫朗 扶美代 花梢 智勇 欣之 森子

川柳岩出

児島与呂志報

生きるとは椅子取りゲームかも知れぬ
通過した駅に青春蘇る
そして春信じて胸の窓あける
風やさし心の窓を開け放つ
何事もプラス思考に変える椅子
椅子なんどいらぬ心が世を守る
急がねば私のすわる椅子がない
次の椅子自分で決める天下り
駅の渦案内板がさばっている
女にはゆつくり座る椅子がない
昔からわたしは椅子に縁がない
温めてくれた椅子にもある沈み
人生のまど窓ごとにある日照り

堺川柳会

河内 月子報

負の遺産宝にかえた両の手よ
普通の子の気持が怖くなるナイフ
昨日より白髪一本増えている
一杯のお茶に気持を込めて朝
気持まで老いてはいないフラメンコ
話しまだ昨日に戻るクラス会
昨日とは違う流れにのるわたし
昔のこと昨日のように話す母
夫婦にもタブーがあつて離婚沙汰
娘の気持思えばそつとおこころ
不景気で箆笥貯金が理にかな
気持よい挨拶出来た一年生

みつこ 健吾 美代子 五月 梓 冬虹 八千代 かりん 頂留子 文 紀美女

弓削川柳社創立50周年記念・紋土600号記念・岡山県芸術祭参加

第50回 西日本川柳大会

とき 平成10年11月1日(日)午前9時開場
ところ 久米南町中央公民館・弓削小学校体育館

第1部(事前投句の部)

- 課題と選者(応募締切 7月31日消印有効)
「残す」 仲川たけし・小松原爽介・田口麦彦
「半分」 山田良行・梶川雄次郎・小林由多香
「夢」 橘高薫風・清水惣七・濱野奇童
- 参加費 1000円(発表誌呈)・無記名清記選
各題2句以内を一枚のB5大用紙に連記、末尾に
住所・氏名・雅号を明記、参加費を添えて下記へ
〒709-3014 岡山県久米郡久米南町下弓削 弓削川柳社

第2部(大会当日出句)

- 課題と選者(各題2句)
「スタート」 齋藤 大雄 「歩む」 大木 俊秀
「予言」 大野 風柳 「昔」 森中恵美子
「太鼓」 泉 比呂史 「結ぶ」 寺尾 俊平
- 出句締切 10時30分・欠席投句辞辞・席題なし
○会費 2000円(昼食・発表誌・記念品呈)
- 前夜祭 10月31日(土) 久米南町中央公民館
17時から 会費 5000円
- 宿泊は津山市内のホテルを斡旋いたします。
参加及び宿泊申し込みは8月31日まで
- 句文集「川柳町半世紀」作品募集
7月31日締切 詳細は弓削川柳社まで。
- 主催 久米南町・久米南町教育委員会・弓削川柳会

昨日の地蔵無理するなど今日も言う
父に似ぬ子供に育てたい気持
ふっふふふたんまり貯めて利子で食
その先を言ううと気持がひび割れる
老いふたり昨日と同じつつがなし
ふたりして耐えてきた道リラ句う
ふり向けば他人の風に利用され
ライバルの火花小さくさびしいね
ふたりなら楽しさ倍に料理する

金三郎 洞庵 哲平 勇太 昭子 小楓 森子 雪

人柄がよくて火花のたねがない
気持だけ若さに挑み輪に入る
抱きしめた心の火花子にあずけ
雑魚なりの小さな火花散らしあい
手作りの釘煮気持とおすそわけ
古傷を思い出させる火花もち
伴せは火花を散らす友が居る
ホワイトデーあなたの気持うれしくて
いい友いっぱい昨日と同じ朝がくる

磯子 日出子 洋子 孝子 晓子 春子 柳宏子 千代 扶美代

新家完司川柳集(三)

平成十年

A5判 122頁

頒価 1000円(送料 310円)

〒689-2303

鳥取県東伯郡東伯町徳万597 新家完司

TEL/FAX 0858-52-2414

道頓堀の雨に

別れて以来なり

田中正坊

本書の執筆にあたっては『川柳総合事典』（尾藤三柳編・雄山閣刊）をはじめ戦前・戦後刊行の資料、関係句集二百数十冊にあたり、水府の長男、岸本吟一、柴田午朗、磯野いさむ、『番傘』以外からは東野大八、大石鶴子、桶高薫風の各氏に聞きとりし、伝聞については必ず「ウラを取る」という厳密な取材態度をもって臨んでいる。

昭和二十二年、岸本水府・麻生路郎・中島生々庵の三人が大阪文化賞を受けた。ある新聞が社説で「今度の表彰は間違っている。この中に雑俳屋が入っている」と書いた。『雑俳屋』というのは、川柳作家を理屈抜きにおとしめる言葉である。当事者は心外だったろうが、著者もこのことに怒りをあらわにし、そのアンチテーゼとして本書が生まれた。

著者は大阪市生まれで、古川柳の佳句について解説した『古川柳おちばひろい』（講談社）、現代川柳の秀句を鑑賞した『川柳でんでん太鼓』（講談社）の好著がある川柳愛好者。水府の代表句に「頬冠りの中に日本一の顔」があるように、彼の活動舞台となった大阪という土地柄にもなじみが深く、〈川柳作家・岸本水府とその時代〉を書くのに最もふさわしい人と言えよう。

構成は、「第一章 恋せよと薄桃色の花が咲く」から「第九章 金扇の父 銀扇の母忘れず」までの各章から成り、さらにトピックごとに節に分かれ、それぞれに句が配されている。この壮大なドラマの主役は水府で、大正二年一月十五日、関西川柳社から西田當百、木村半文銭らを同人に、「我々は大阪において大に大阪を咏はんとするのである」と宣言して創刊された『番傘』に集う作家群像を中心に展開されるが、その中では食満南北をはじめ小田夢路、片山雲雀、堀口塊人、藤村青明らが異彩を放っている。

また、主役に準ずる一人としては、大阪川柳の一方の旗頭である麻生路郎があり、若いころは水府と肝胆相照らす仲であったが、後に袂を分かって好敵手となった。大正十三年二月十五日、あえて川柳界を代表するような『川柳雑誌』を創刊、川柳の社会化運動の機

関誌とすることを提唱し、〈誤れる川柳観を排す〉として川柳の真価をPRしている。

著者はそれに共鳴し、「現代は川柳ブームといわれながら、川柳のもつごく狭い面ばかり拡大歪曲されて川柳の全体像は歪んでいる。人間諷詠、人生観照の大らかさを取りおとしているようである」と述べている。

このほか、川柳中興の祖、井上剣花坊と阪井久良伎や川上三太郎、吉川維子郎、田中五郎八、柑元紋太らについても触れているが、プロレタリア川柳作家の鶴彬については、八十余ページにわたってその事蹟と作品を紹介し、「同じ反戦作家である小林多喜二ほどには知られていない」と慨嘆している。そしてこれらの人物像は、さすが練達の作家の筆になるだけに、その息吹まで伝わってくる。

文中には、二千八百句の川柳がちりばめられ、その時代背景も描かれている。何しろ上・下巻千三百ページの大作で、一気には読み通せないが、〈日本近代川柳史〉として座右に置くことをすすめたい。校訂が不十分であったためか、固有名詞などに誤りが少なくないことが惜しまれるが、再版の際はそれを正すとともに、関係年表と人名索引を作成することを希望しておきたい。

（田辺聖子著・中央公論社刊）

柳界展望

本社同人の山本養子さんが毎日新聞社賞を受賞した。

▽同人消息△

★時の川柳社は平成9年度作家賞及び第18回ときせん賞を次のとおり決定、5月10日表彰した。作家賞は梶原サナエ・片山米子・和田恭子・中井昭子の四氏。

へときせん賞

バークンのセーターすぐ

うちとける 佐藤季穎

ときせん賞は江尻麦秋

準ときせん賞は江尻麦秋

平田香子・和田恭子の三氏。

なお、同大会で同人の林荒介氏が神戸市長賞、西口

いわたさんが神戸市会議長賞、大石あすなろさんが時

の川柳社賞を受賞。秀句に

西口いわゑ・林荒介・高杉

鬼遊の三氏が輝いた。

▽人事往來△

■4月18日、薫風主幹は神戸市の生田神社境内の檀元

紋太句碑除幕式に出席。

■4月19日、薫風主幹は府中の森市民聖苑の渡邊蓮夫

氏葬儀に参列。

■オール川柳賞大賞を受賞した川上富湖さんの記事が

四月一日付の大阪新聞に写真入りで大きく掲載された。

▽御芳志御礼△

■川上大輪・富湖夫妻（和歌山市）から金一封を拝受いたしました。

■西尾家から栗忌に金一封を拝受いたしました。

■同人の新家完司氏（鳥取県）が第三川柳集『平成十年』を発刊。A5判122頁。頒価1000円

■はびきの市民川柳会は合同句集第五集『白鳥』を発刊。会員37名の各15句と写真及び故人五人の各7句を掲載。序模本吐来・うしろのき塩満敏。A5判96頁。定価1000円

新同人紹介

山中康子

—完司・次男推薦

妻 谷重三

—鬼遊・たもつ推薦

句集『一會一句』を出版、

「再会の場所はここよりはかかない」ほか360句を収録。B6判60ページ

▼訂正とお詫び▲

4月号P117（各地柳壇）下段27行目巻き線香↓

巻き線香

5月号P1（巻頭言）上段6行目露乃五郎↓露の五

郎▼P5（川柳塔）下段8

行目鳥取県堀江正朗↓島根

県堀江正朗▼P113（柳

界展望）上段かこみ記事4

行目ペイタワーホテル↓べ

笑语事長はか同人が参列。

■堀口富未さん（故堀口塊

人氏夫人・西宮市）は4月

2日、病氣のため死去。90

歳。3日、エテルノ西宮で

の通夜に薫風主幹が参列。

■中野樺子さん（同人・堺

市）は5月2日、脑梗塞の

ため死去。78歳。4日、自

宅での葬儀に薫風主幹・天

野

野

野

野

野

野

野

野

野

野

野

野

野

野

野

野

野

野

野

野

野

野

野

野

野

野

6 月 各 地 句 会 案 内

句会名	日時と題	会場と投句先
尼崎 いくしま	5日(金)午後1時から 昔・持つ・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富柳会	6日(土)午後1時から マンガ・軋む・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田駅南出口徒歩3分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
西宮北口 川柳会	8日(月)午後1時から 芯・磨く・まだ・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほたる 川柳 同好会	9日(火)午後1時から 守る・予定・僅か	豊中市立堂池公民館 阪急・モノレール堂池駅西へ150米 〒560-0033 豊中市堂池中町3-10-28 井上直次
八尾市民 川柳会	10日(水)午後6時から ぶらり・吸う・旅・老人	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
堺川柳会	11日(木)午後1時から 素直・裏(共選)・のどか(折句)	堺市総合福祉会館 南海高野線堺駅西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳塔 まつえ	13日(土)午後1時から 気分・救う・内緒	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川柳塔 わかやま	14日(日)午後1時から 芸・看板・逆立ち	近鉄カルチャーセンター JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
もくせい 川柳会	15日(月)午後1時から 箱・まさか・わかる・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	18日(木)正午から 時効・うどん・もつれる・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島凜云児
岸和田 川柳会	20日(土)午後1時半から 礼儀・ローカル・わき見・赤札	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒569-0827 岸和田市上松町610-85 芳地理村
川柳 ねやがわ	21日(日)正午から グループ・皿・鍵・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
南大阪 川柳会	24日(水)午後6時から 続き・疲れる・包む・貫く	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
京都 塔の会	26日(金)午後1時から 蛙・もがく・途中	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札東出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
東大阪市 川柳 同好会	27日(土)午後6時から 洗う・視野・たっぷり・芯	東大阪市立社会教育センター2F 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市川柳 民会	28日(日)午後1時から 辞書・拾う・ネーム・「横着」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

編集後記

★六月号と聞くだけで、六月のあの日を思い出します

と、ある同人からの手紙に書いてあった。小出智子さんの一周忌が近い。困ったことにぶつかる度に「智子さん、どうしたらいいの」と聞くが返事はない。

★平成九年一月号から一応編集長ということになって

いるが、同年十二月号までは、前編集長田中正坊さんが、表紙の色や記事など表紙回りと、柳界展望は担当して下さっていた。今年一月号からはじめて私がそれを担当して、表紙の色遣いなどむずかしいものだなと痛感している。

★柳界展望も誌面の都合で掲載に限りがあるが、徐々にみなさんの消息なども載せたいと思っている。手始

めに、四月号には「同人消息」として「かわはら川柳会」発足を披露した。これ

からも各地の情報などをお知らせ願えたら有難い。

★「ほらまた考えすぎるからわからなくなる」としゃべられた文字の手彩色絵はがきを頂いた。私がいつも必要以上に周りに気を遣ったり考えすぎたりしているのを見かねて、友人が送ってくださった。友達とは本当に

有難いものである。机の前に貼って、いつも心しているのだが、いつの間にか、また考えすぎている。

★三十年前に今のマンションに引越してきた時には周囲は田んぼと苺畠だった。籠を持ってゆくと山盛りに苺を採ってくれた。初夏に

田んぼに水が入ると蛙の合唱が賑やかだったが、今はみんな住宅になって、蛙の声を懐かしんでいる。(み)

ひとこと

「オール川柳賞大賞を載いて」

全国から実力のある川柳作家が数多く応募する中まさか私がオール川柳賞の大賞を受賞できることは夢にも思っていませんでした。

亡父、十郎の影響で二十歳頃から川柳を始め、その後、父の「川柳しんぐう吟社」へ参加し、主人や地域の方々と共に川柳を続けて参りました。

平成七年、和歌山市に転居した

路郎師の「川柳は人間陶冶の詩」を座右の銘とし、川柳の魅力を模索しながら、これからも頑張りたいと思っております。

本当にありがとうございます。(川上 富湖)

▼前回尻切れトンボで終わった、純粹日本酒協会加盟

の酒銘は、岡山「美作」広島「加茂泉」愛媛「梅錦」

福岡「富の寿」佐賀「窓の梅」「天山」大分「薫長」熊

本「朱孟」の八銘柄、前回と併せて十七銘柄である。

▼これは、一九七三年(昭和四十八年)十五社で発足

して以来五社が退会、新たに六社が加入した一九七

年(平成九年)現在の数字

ルコールや糖類・酸味料等

光」でした。(金)

を加えた、いわゆる普通酒も造っているからである。

▼十七銘柄のうち私が飲んだのは、「桃の滴」「玉乃光」「招徳」「天山」「朱

孟」で、最初のは某句会終了後いつも行く昼食会で、

次の二種は以前家でしばらく飲んでいたもの。「天山」は唐津の懇親宴で、「朱孟」は個人の旅で飲んだもの。

は個人の旅で飲んだもの。なお、「玉の光」は「玉乃

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（8月号）」

地名

雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

川柳塔 (8句) 橋 高 薫 風 選
水煙抄 (8句) 西 田 柳 宏 子 選
渺湖抄 (3句) 八 木 千 代 選
茴香の花 (3句) 宮 西 弥 生 選
課題吟 (3句) 「うっかり」 堀 畑 靖 子 選
 「墓 席」 山 本 三 郎 選
 「筋」 (3句) 吐 田 公 一 担 当
 古 川 喜 美 子 選

8月号発表 (6月15日締切)

本社6月句会

と き 6月8日 (月) 午後5時半
 と ころ アウィーナ大阪 4階
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・772・1441
 地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分
 兼 題 「短 い」 吉 川 寿 美 選
 「やさしい」 福 本 英 子 選
 「雷」 奥 田 み つ 子 選
 「はさみ」 田 中 正 坊 選
 「おふくろ」 橋 高 薫 風 選
 席 題 1題 当日発表 (各題2句以内)
 会 費 500円 投句料 400円

9月号

課題吟 「指 」「降りる」
 「涙 」「指 」「ふたり」
 初歩教室 「決める」

本社7月句会 7日 (火) 予定

兼 題 「役 者」「酒 」「ふたり」
 「指 」「男 」「

夜市川柳募集

第1回「花」 西 出 楓 楽 選
 ハガキに3句 6月末締切
 投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 堺 川 柳 会

「川柳塔」への投句について

- (1)川柳塔への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限ります。
- (2)渺湖抄・茴香の花欄および一路集(課題吟)への投句は、同人・誌友に限ります。ただし茴香の花欄は女性だけ。
- (3)各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・氏名)を明記してください。
- (4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

定価 六百元 (送料76円)

半年分 四千元 (送料共)

一年分 七千九百元 (同)

平成十年六月一日発行

編集兼 発行人 橋 高 薫

印刷所 美 研 ア ー ト

〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町二一〇一六

発行所 川 柳 塔 社

電話 (06) 691-14番

振替 〇〇九八〇一五二三三六八番

第13回国民文化祭・おおいた'98

川柳作品募集要項―燦々と詩歌が光る豊の国―

応募受付期間 4月1日(水)～6月30日(火)(消印有効)

事前投句(各題2句・共選・未発表作品に限る)

「駅」

萩原 柳 繁・佐藤 真砂延

「半島」

小松原 爽介・野口 初枝

「風」

大木 俊 秀・早川 双鳥

「人間」

小嶋 旬 月・斎藤 大雄

応募料 1000円

応募方法 大分県実行委員会作製の「募集要項」を御覧の上、所定の応募用紙を使用のこと。

応募先 〒879-5102 大分郡湯布院町川上3758-1

第13回国民文化祭湯布院町実行委員会事務局「文芸祭」川柳係

発表川柳大会 10月24日(土)10時～15時

湯布院町立由布院小学校体育館

当日投句

「碑」 外山 あきら・兵頭 まもる

(二句共選)

「竹」 坂本 柳 峯・森中 恵美子

賞(予定) 文部大臣奨励賞 他多数

問い合わせ及び募集要項請求先

〒879-5102 大分郡湯布院町川上3758-1

第13回国民文化祭湯布院町実行委員会事務局

(電話)0977-184-2604

主催者 文化庁・大分県・(社)全日本川柳協会・他

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします

美 研 ア ー ト

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号
TEL・FAX(06)372-1178